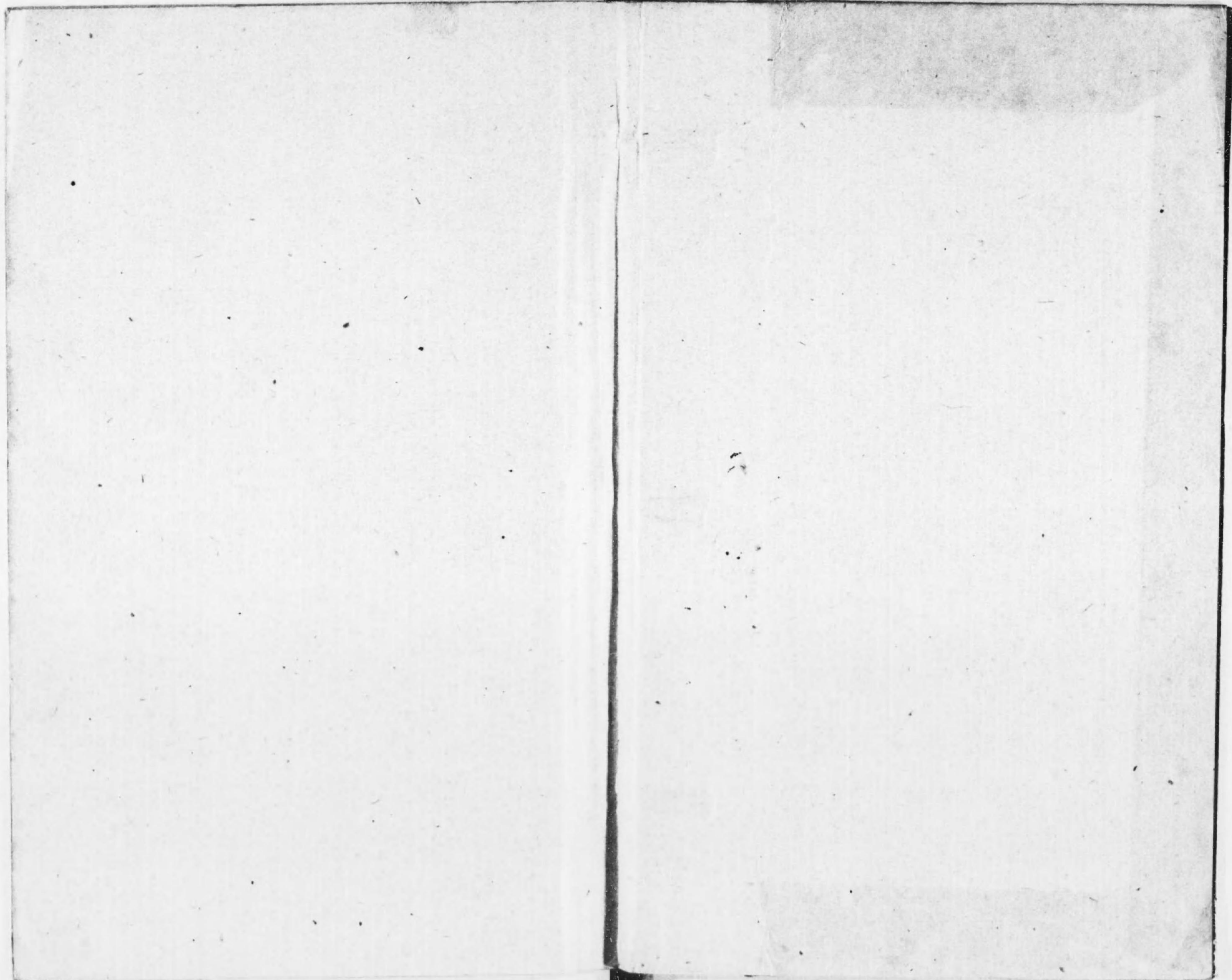


506
105



始





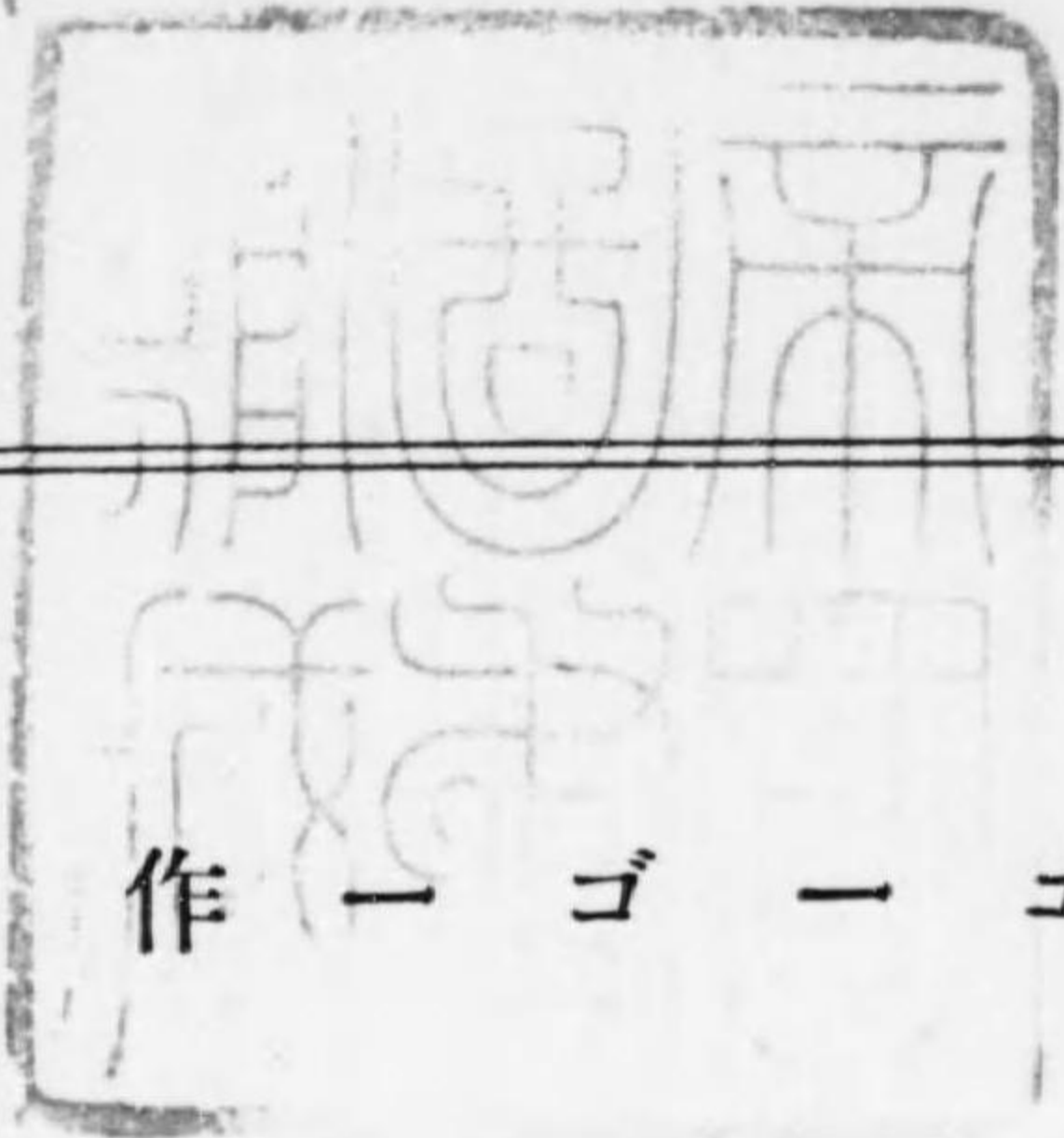
人ふ笑

作一ゴ一ユ

譯郎一晃原宮



506-105



作 一 ゴ 一 ュ

笑 ぶ 人

宮原晃一 譯

冬夏正
版

11. 5. 18

交 内



笑 人

宮原見一郎

前篇 海と夜

序章 ウルズス

ウルズスとオモとは親密な友情で結び合はされてゐた。ウルズスは人で、オモは狼であつた。兩個は氣質が合つてゐた。狼に名をつけたのに人であつた。恐らく彼は又自分の名をも自ら擇んだらう。ウルズスを自分に適當と思つて、オモをその獸によい名と思つたらう。此人と此狼との一團は、市場、教區の祭禮、通行人の群れ集まる街路の片隅などで、無駄話を聞き、山師の藥を買ふ者共のお蔭で金を蒐めてゐた。此狼は、温順しく、行儀がいゝので、觀客に受けた。人馴れた様を見るのは心地善いものである。私共の最大の憚びはいろんなものが飼ひ馴らされて、私共の前に並ぶのを見るにある。さればこそ王の行列の通路には深山な人が集まるのだ。

ウルズスとオモとは辻から辻、アベリツウイズの廣場から、デエドプウルの廣場、市外れから市外れ、村から村、町から町へと渡り歩いた。一つの縁日を演ち上げると、次のへ行つた。ウルズスは箱車に棲つてゐた。充分に馴れたオモが晝はそれを曳き、夜は番をした。難儀な道、山の間などで、餘り凹凸のある場處では、人間も、首に挽草をつけ、狼と肩を並べ、陸じく曳いていつた。兩個は斯

うして共に年をとつた。彼等は行き當りバツタリ空地、林の中、道の交叉點、郊外、市の入口、市場、公道、公園のあたり、教會の入口などに露營した。箱車が縁日に止るとき、口をアングリ開けた饒舌が走り、物見度かりが兩個を取り捲いて、ウルズスが口上を述べ、オモが藝を演つた。オモは口に大皿を咬へ、叮嚀に見物人から金を蒐めた。彼等は生活の資料を得た。狼は博識だつたし、人も亦同様であつた。狼は人に仕込まれた、或は又自身狼の藝を仕込んで、それで金を儲けた。『何よりも人間に退化するな』と、彼にその友は言つたらう。

狼は決して人を咬まなかつたが、人は時々咬んだ。少くともウルズスは咬む眞似をした。ウルズスは厭世家であつた、そこで彼の厭世を際立たせる爲めに、彼は手品師となつた。併し又胃囊がそんな境遇を課したが故に、又彼はそう生活するのであつた。なほ此厭世手品師は、自らを多様ならしめるが爲めか、それとも完璧ならしめる爲めか、醫師であつた。醫師たることは大したことでもなかつたが、ウルズスは腹語術者であつた。人は彼が口を動かさずに語るのを見た。彼は誰の發音、語調でも眞似て、人を欺した。彼は多くの人聲を眞似て、聴く者に多くの人が語ると思はせた。彼單獨で、群集の呟きを起した。そこで彼はアングストリミツの稱號を與へられた。彼はそれを受けた。彼はあらゆる鳥の啼聲、たとへは鶉、鷓鴣、田鴉、鷓鴣、木兔耳等、彼のやうな渡り者の聲を眞似た。それで彼が氣が向くと、大道に人の喧騒する響を聞かしたり、牧場に家畜の鳴く聲を聞かしたりした。まるで群集のやうにざわん／＼とするかと思へば、また曉のやうに、爽快、清淨であつた。併し斯る才能は、稀有であるが、世にないものではない。前世紀にツウゼルと稱ぶ者が、人や動物の錯雜した音聲を眞

似、獸の叫びを爲せ、獸苑の用をつとめて、道化師の仲間について廻つたことがあつた。ウルズスは小慧しく、類の無い、奇妙な、私共が比喩譚と稱ぶ怪奇なことが好きだつた。彼は之を信するふりを見せた。此悪戯は彼の性癖の一部であつた。彼は人の手相を見、手當り次第に本を開き、判断を下し、運を占ひ、黒い牝馬に逢ふと危い、お前さんが旅をするのは猶更危い、お前さんが何方へ行くかを知らない人に呼びかけられることがあるなどと教へた。そして彼は自ら稱して『迷信の販賣者』と言つた。彼は言つた『俺とカンターベリーの大監督との間には一つ違つたことがある。それやまつたく本當だ』と、そこで大監督が、憤つて、或る日彼を呼び出した、併しウルズスは彼が降誕節の日に前以てつくつて置いた説教をやつて、巧に猥下を煙に捲いてしまつた。大監督はそれを暗記して、教壇の上から、我物顔に説教したのだつた。そのお蔭で、ウルズスは大監督に赦された。

ウルズスはお醫者としては、何か、かにかで癒やした。彼は香料を用ゐた。彼は藥草に通じた。彼は人の棄て、顧みない、かぶと苔、柔荑、あめりかヤウブの如き植物から大きな力を引き出した。彼は勞症をモウセン苔で治療した。時には大戟を用ゐた。それは底の方で取つたのは下劑、上の方で取つたのは吐劑となつた。彼は『猶太人の耳』といふ植物の瘡で、咽喉の痛みを治療した。彼は牛を癒す葦、馬を癒す薄荷を知つてゐた。彼は曼陀羅華の美と效とを知つてゐた。是は男女にかゝらぬこととは誰も知る如くである。彼は多くの處方をもつてゐた。彼は燒傷を『鯢魚の毛』で癒した。是はブリニーによれネーロが口布にしてゐたものだといふ。ウルズスは曲管や蠟をもつてゐた。彼は煉金術を行つた。彼は萬能藥を賣つてゐた。彼は嘗てベトラムに禁錮されたことがあつたといふ話だ。彼は

名譽にも狂人と思はれたのだが、詩人と見られて、解放された。此話は恐らくは嘘であらう。私共はよく斯る話をあたりに傳へるものだ。

事實ウルズスは學者、趣味の人、古い羅典の詩人であつた。彼は二個のことに通じた。彼はヒボクラチゼー(ヒボクラチゼーは希臘の醫學)し、又ビンダリゼー(ビンダリゼーは希臘の詩人)した。彼はラビンヤヴィダと洒落競べをした。彼は神父アウルにも劣らぬチエズト式の悲劇を作つた。彼が古代韻律に通じたところから、彼の話は特に比喩や、古典的の隱語に富んでゐた。二人の娘を後につれた母親を彼は『平仄々がる』と云ひ、二人の息子を前に立たせた父親を『仄々平がある』と云つた、又祖父祖母の間に小兒がはさまつて歩めば『平仄平がる』と言つた。こんな澤山な博識もお終ひは貝飢死であつたらう。サレルノ派は教へる『少しく喰へ且つ屢々』と。ウルズスは少しく食べて、しかも稀であつた。斯如く彼は教へに半ば従ひ半ば背いた。けれども之は常に彼の周圍に集らず、彼を買つてやらぬ社會の罪であつた。ウルズスは言つてゐた『一文を喰き出すのは慰籍だ。狼は吠吼により、羊は其綿毛により、森はそのひわにより、女はその愛により、哲學者はその Epithonema により慰められる』と。ウルズスは必要に迫られて喜劇を作り、それを獨りで演つた。之が藥を賣る助けをした。彼はいろんな勞作のうち、千六百〇八年倫敦に河をもつてきた騎士ヒュー・ミッドルトンの事蹟を詠じた英雄的牧歌を作つた。此河は倫敦から六十哩のハートフォードシャーに靜かに流れてゐたものだつた。騎士は來つて、それを占領した。彼は、十字鉞や鶴嘴を提げた六百人の一隊を率ゐて、土を除け始め之を穿ち、之を起し。或る時は二十呎の高さ、或る時は三十呎の深さにして、空中に木の水管を建て、

悪魔の顔を出現したり、無暗に踊らして人を責め殺したり夢で吉凶を卜つたり、恐怖を満したり、四つの羽の生えた牡鶏を生れさしたりするには、餘りに好人物であつた。彼はこんな悪戯をしなかつた。彼は或る悪むべきことは出来なかつた。例へば、習ひもしない獨逸語、希伯語や希臘語を話すやうなことで、是は有し難き曲事の印、又は發狂の自然な前徴である。若しウルズスが羅典を話したとすれば、それは彼が知つてゐたが故である。彼は自分が知らないシリヤ語自身に語らせたことがなかつた、其外、シリヤ語は、不淨な人が夜中悪魔を禮拜する時に用ゐる國語である。醫術では彼はいしくもカルダンよりもガーレンを取つた。カルダンは學者とはいへ、ガーレンに比すれば蛆蟲に過ぎなかつたからだ。

要するにウルズスは、警官を恐れて世を渡る者共の一人ではなかつた。彼の箱車は、彼の餘りに多くもない衣裳を入れた筥の上に、横に臥られる程大きく、長かつた。彼は提燈、若干の蠶、釘にかけた二三の道具——その中に樂器もあつた——を所有してゐた。その他、彼は、晴れの場所で、着て演ずる態の皮を一枚もつてゐた。彼は之を着るのを盛装と言つた。彼はよく言ふのだつた『俺は二枚皮をもつてゐる是は眞物だ』と、——熊の皮を指した。箱車は彼と狼とのものだつた。彼の箱車と、曲管と、狼との外、彼は笛と、ヴィオロンツエロを持つて、それを巧に弾きこなした。彼は彼自身の煉金藥を創造した。彼の智慧は時に充分に食へるだけのものを儲けしめた。箱車の頂には一つの穴があいて、それに鑄鐵製暖爐の煙筒が通つてゐた。暖爐は彼の筥に近く、その木を焦す程だつた。暖爐は二部に分れてゐた。一方ではウルズスは藥を、別な方では馬鈴薯を調理した。夜は狼は鎖でつながれ

車の下に匍ひ込んで睡つた。オモの毛は黒く、ウルズスの髪は灰色だつた。ウルズスは、若し眞個六十でないならば彼は五十であつた。彼は自分の運命を、私共が今も述べたやうに、馬鈴薯——則ち當時豚と罪囚とを養つた屑で生活した程に、甘んじて受てゐた。彼はブリ／＼しながら、しかも穩しく喰べた。彼は大きくはなかつたが、長かつた。彼はおこ／＼みで懣懣だつた。老人の曲つた腰は、生の地下りである。自然は彼を衰傷せしめる爲めにつくつた。彼は笑むのが難しかつた、又泣くことも出来なかつた、それで彼は涙からの慰藉をも、喜悅からの甘さをも奪はれた。老人は思惟する廢墟だ。斯る廢墟がウルズスであつた。彼は香具師の饒舌と豫言者の瘠瘦と、填充した地雷の激發性ともつてゐた。ウルズスが是であつた。少年の時代には彼は或る貴族の家の哲學者であつた。之は人が今日の如くあるよりも狼の如くあつた百八十年以前のことであつた。けれどもこれよりも遙以上ではない。

二

オモは普通の狼ではなかつた。彼が山査子や馬鈴薯を好んで食ふところから見れば、彼は曠原種の狼とも思はれ、彼の暗い毛色で見ればバリッオン種とも思はれ、彼が遠音を吼え聲にまで長めるところで見れば、智利産の犬とも思はれた。けれども誰も未だ智利犬の眼玉を見てそれが狐であるかなしかを私共に決定せしめる程充分に査べた者がない。そこでオモは眞實狼であつた。彼は長六呎あつた。之は狼としては、リツウアニアに於てさえも美事な長であつた。彼は甚だ強かつた。彼は斜視であつ

だが、彼の咎ではなかつた。彼は柔かい舌をもち、彼は時にはウルズスを甜めた。彼は狭い短い逆毛を彼の背にもつゝた。彼は森林生活の健全な瘡方を以て、瘡せてゐた。彼がウルズスを知り、且つ箱車曳く以前には、一夜に五十哩を行くことなどは何とも思はなかつた。ウルズスは彼と流れの傍で逢ひ、彼が魚を取る巧者と、智恵とを太く賞讃して、『蟹喰ひ』と稱ばるゝ、正直、純粹なクウバラ狼の一種として彼を歓迎した。

役獸としては、ウルズスはオモを驢馬よりも重んじた。彼は自分の小舎を驢馬に曳かすのを嫌つた。彼は驢馬にそんなことをさせるのを勿體ないと思つた。なほ彼は、人間に理解されぬ四つ足の夢想者、驢馬は、哲學者達が愚かなことを言ふ時、其耳を不安さうに動かす習慣のあることを見た。人生に於て、私共の思想と、私の間に、驢馬は第三者である。それは邪魔をする。友としては、ウルズスは人よりも犬を擇んだ、狼は愛には縁遠いものと思つて――。

是がオモのウルズスに満足しないわけであつた。オモはウルズスに取つては同僚以上であつた。即ち同じであつた。ウルズスはその凹んだ脇腹を撫で、言ふのだつた『俺は第二の俺を見付けた』と。

彼はなほ言つた『俺が死んだなら、俺を知らうと思ふ者は、只オモを研究すれば良い。俺はオモを俺そつくりの寫しとして、後に遺して置く』

英國法律は森の獸に、柔しくないもので、狼と喧嘩を仕掛け、彼が親しく市街に出掛るのを邪魔した。けれどもオモはエドワード第四世の法規により、(家僕)の免許を利用した。――その主人に附添ふ家僕は自由に往來することを得――。その外、狼の法律が弛んで、宮廷の婦人達が、晩年のス

チエアート家の治下には、犬の積りで小さな狼の、猫程な大きさのを、高い金を拂つて、亞細亞から持つてくるのが流行した。

ウルズスはオモに自分の才を一部傳へた。例へば眞直に立ち、忿憤を澁面して我慢する、吼える代りに唸るといふやうなことである。又狼の方では、自分の知つたことを人に教へた――露宿すること、パンや火がなくなつて済みますこと、宮廷に奴隷たらんよりは、森で飢を忍ぶこと。

いろ／＼な道を、英國とエコスを出でずして旅行した箱車は、四個の輪をもち、なほ狼の爲めに轆、人の爲めに横木が備へてあつた。此横木は道の悪い場合の用だつた。それは鳩小舎のやうな軽い板で出来てゐたけれど、丈夫であつた。その前部には硝子戸があつて、演壇風の小さな露臺がついてゐた。後部には入戸板のついた戸口があつた。戸の下の脰金の上に回る三段の梯をおろすと、小屋に入れる。小屋は夜は門と錠とで固く鎖れるのであつた。雨と雪とがどつさり其上に降つた。それは以前にはベッキ塗りだつたが、車に及ぼす四季の變りは、統治の廷臣に及ぼすが如くで、それが何色であつたやら、今は辨別が困難になつてゐた。前部の外側には板があつた――之は標札であるが、白地に黒い其文字は、段々とゴチャ／＼となつたり、消えたりしてゐるが、昔はそれが讀まれたものであらう。

『摩擦により金は年々其量の千四百分の一を失ふ。之を目減りと稱す。故に全世界に通用する一千四百萬の金は年々その一百萬を失ふ。此一百萬は埃となつて、飛散し浮遊し原子となり、藥に入り、良心を重からしめ、富者の魂と抱合しては之を傲倨ならしめ、貧のそれと結びては、それを粗暴ならしむ。』

此銘は、に打たれ攝理の御情で消されて幸に讀めなくなつてゐた。何せかなれば黄金の吸入に關する哲學は、同時に謎語的で又明白であつて、知事、裁判官や、其他の法律の臺連中(英國では官公職の或る者は臺を被る)英國の立法府は當時常談をしてはゐなかつた。一個の人間を重罪囚たらしめるは容易であつた。司法官傳統的に獐猛で、殘虐はおきまりであつた。訊問の裁判官は増してきた。チエフレー家は後嗣をこしらへた。

三

箱車の内部にはまだ二つ銘があつた。箱の上、白亞で塗つた木片には、インキで左の文字が書いてあつた。

知り置くべき事

『男爵、英國の貴族は、眞珠六個入の帽子を被る。冠は子爵より始まる。子爵は無数の眞珠をはめたる冠を被る。伯爵は尖端に眞珠を入れ、低く覆盆子の葉を間にまじへたる冠を被る。侯爵は。同じ高さに、眞珠と覆盆子の葉とを飾りたるを、公爵は只覆盆子の葉のみにて、眞珠の無きものを。皇族は、十字架の小環と、百合花のつきたるものを、皇太子は王冠と同じくして、只開きたるものを被る。』

『公爵は至高、至強の貴顯、侯爵、伯爵は、最も高貴にして、威力ある主、子爵は高貴にして、有力なる主、男爵は頼もしき主、公爵は閣下、他の貴族は殿。最も尊敬すべきは、正しく尊敬すべき

の上なり。(下略)』

是と反對の側に、同様なものが書いてある題して

何物をも有せざる人を満たす満足

是には英國貴族のことが長々と記してあつた(併し本文には無關係で、面白くないから略す『譯者』)

四

ウルズスはオモに賞讃した。人は己れに近きものを賞讃する。是はきまりである。

常に内心に憤り、外面に呷いてゐるのがウルズスの常態であつた。彼は創造の不平者だつた。彼は天性反抗の人であつた。彼は世を無情なものと思つた。彼は何物にも又何人にも善行證を與へなかつた。蜜蜂はその刺の爲めに、蜜を造つても赦されず、満開の薔薇は黃熱と嘔吐の故に充分日光を吸収し得なかつた。多分ウルズスは窃りと、大に攝理を批評したらしい。彼は言ふだらう『明かに悪魔は發條で仕事をする。神の過ちは撃鐵をおとすことである』と。彼は單に王侯のみを褒めた、そして彼の褒め方は獨特であつた。或る日ヂエムス第二世が愛蘭土のカトリック教會の聖母に巨きな黄金の洋燈を寄贈したとき、ウルズスは、其處をオモをつれて通りかゝり、そんなことには無頓着な彼も、群集の前で、嘆驚して曰く『本當に聖母は此跣足な子供達が靴を欲しがるとも、洋燈が入用なんだ』と。斯る忠君の證據と、又既存の權力に對する彼が敬意の證據とは法官等をして彼の浮浪生活と、狼との低級な同盟とを許して置かしめるに、預つて力があつたらう。時に夕方など、友情の薄い爲めに、

彼はオモに彼の四肢をのばして、自由に隊商のあたりを迷ふことを許した。狼は信用を濫用することが出来なかつた、そして社會、即ち人類の間に於ては、老犬のやうに要心して行動した、とは云へ、若し意地糞の悪い官吏にかゝり合つたら、面倒なことが起つたのだらう。それでウルズスは正直に狼を出來る限り鎖でつないで置いた。

政治的に見れば、彼の金に關する記述は、元來讀み難く、それに今は分りに難くなつて、只一つの汚點となり、敵に何の手掛りをも與へなくなつてゐた。ヂエームス第二世時代の後ですら、ウィリアムとメーリーの『尊敬すべき』治下に於て、彼の後の仲間、安如として、英蘭土の小都會を廻つて歩くのが見られるのだつたらう。彼は自由に大英國の一端から他端へ旅行し、彼の藥を賣つて、狼の助けで、彼の山師的のお茶番をやつてゐた。又彼は容易に、當時警察が、渡り歩く曲者の群を拘ひ、特にコムブラチコスの跋扈を防ぐが爲めに、全英國に張りまはした網を潜つて歩いた。

之は當然であつた。ウルズスは曲者ではなかつた。ウルズスはウルズスと共に生活した。即ち額を鳩めてゐる間に、狼が穩かに鼻つ面をつき入れてゐたのだつた。若しウルズスがしたいまゝにしたら、彼はカリブ土人になつただらう。それが出來ないので、彼は獨りのまゝであつた。孤獨な人は、文明に承認された、變態の蠻人だ。最も迷ふ人は最も孤獨だ。それ故その居所が斷えず變る。何處ぞへ長く止まることは、手馴けられる氣がして苦しくてならなかつた。彼は彼の生涯を彼自身の道により過した。都會を見ると、茂みや、藪や、茨や、岩洞を餘計に好きになつた。彼の家は林だつた。彼は市井の雑踏の中では得意に構へてをれなかつた、それは森の囁きに充分に似てゐた。群集は或る程度

まで私共の沙漠に對する趣味を満足せしめる。彼が自分の箱車の氣に入らなかつたことは、それが戸口や窓をもつてゐるから、家に似てゐたからだつた。洞穴を四輪に乗せ、岩窟の中に居て旅行が出來たならば、彼の理想が實現されたのだつたらう。

彼は、前にも言つた通り、微笑んだことがなかつたが、彼は笑ふのは常だつた。時には眞個、苦笑をした。微笑には承諾があるが、笑ひには往々拒絶がある。

彼の大事業は人類を憎むことであつた。彼はその憤りで心が解けなかつた。人生は恐ろしいものと明かにしたので、悪の上覆を見たので——王が人民の上に、戦争が王の上に、悪疫が戦争の上に、飢饉が戦争の上に、愚劣が萬事の上に——生きてゐるといふ單なる事實に或る懲罰のあることを證した。ゆめに、死は一個の救濟なるを認めた、故に彼は人が彼に病者をつれて來た時、それを癒した。彼は老人の生命を長める興奮劑や、飲料を持つてゐた。彼は跋を元の通りに立たして、斯ういふ嘲笑をその者共に投げつけた『そうら。お前はモ一度立てるやうになつた。此涙の谷に長く歩むがいい』彼は貧人が飢えて死にかけてゐるのを見ると、身につけたたゞけの有金残らずやつて、こゝう吁鳴つた。

『生きていけ、畜生め。喰へ。長生しろ。貴様の懲役を俺は減刑しちややれない』
そしてから、彼は手をこすつて、言ふ

『俺は及ぶ限りの害を人にしてやる』

後ろの窓を通して、箱車の天井に此の詞が内の方に記してあるのを通行人は讀むことが出來た。けれども外から見えるのは、木炭で、大文字に斯う銘記してあるのが見えた——

哲學者 ウルズス

序章 Comprachicos

今誰が Comprachicos といふ詞を知つてゐるか又誰が其意味を知つてゐるか？

Comprachicos 又は Comprapequenos は浮浪者の恐ろしい、え體の知れぬ會で、十七世紀に名高く、十八世紀に忘れられ、十九世紀には聞かなくなつたものである。コムブラチコスに舊い人間醜惡の一部である。一切を集合的に見る歴史の巨眼にて見れば、コムブラチコスは奴隷制度の大きな事實に歸着する。兄弟に賣られたヨセフはその物語の一章である。コムブラチコスは其痕を西班牙、英國の刑法に残した。讀者は英國法の暗黒な紛糾の裡に、恰も一野蠻人の森林中に其足跡のやうに、是が其戰慄すべき眞實を印してゐるのを見るだらう。

コムブラチコスは、コムブラベケニヨスに等しく、西班牙語で『子買ひ』のことである。

コムバラチコスは子供を賣買した。彼等は子供を盗みはしなかつた。子供の誘拐は別な仕事であつた。然らば彼等は何に其子供を仕上てたか？

怪物に。

何ぜ怪物に？

笑ひものにするために。

人民は笑ふ必要があつたし、王も亦同様だつた。香具師は大道に、道化師は宮廷に入用だつた。

人が自分に快樂を得させんとする努力は、時に哲人の注目に價した。

何を私共は此數枚の序に素描してゐるか？本のうちでも最も恐ろしいその一章を——その本は『幸福な者による不幸な者の培養』と、名付けらるべきものだ。

二

小兒は大人の玩具に出来てゐる。こんな事が存在した、斯慶ことは今でもある。幼稚、野蠻な時代には、斯慶事が特殊の商賣になつてゐた。偉大な世紀と稱ばれる、第十七世は、斯る時代の一つであつた。それは調子に於て眞にビザンツ式世紀であつた。それは腐敗した簡素と、織巧な殘忍とを集結した。妙な文明の變態——御世辭笑ひをした虎だ。マダム・ド・セヴィニエが薪と車に就て乙なことを言ふ。其紀世は澤山の子供を商つた。阿諛な其世紀の歴史家は腫物をかくして、藥だけをみせた、ヴァンサン・ド・ボールの如きそれである。

人間で出来た玩具が成功する爲め、彼は早く手を付けられねばならん。矮人は子供のうちに仕立てられねばならん。私共は幼年を弄ぶ、併し形の整つた小兒は面白くない。狗婁の方が遙にお可笑しい。

そこで一つの技術が出来る。一個の人間を取り、それを不具に育てる調教者があつた。彼等は一個の面をとり、それを喙くちばしにこしらへた。彼等は成長を止め、面相を捏こち上げた。畸形學的實例の人工には規則があつた。それは全然たる科學であつた。整形外科術の相反と想へばいゝのだ。神が眼を與へれば、彼等の技術はそれを斜視ヤビシラにした。神が完全な圖樣ウツヤウを與へたのには、彼等は、素描スケッチをやり直した。鑑定家の眼には素描の方が完全だつた。彼等は動物をも變退せしめた。彼等は斑馬を發明した。チエーレンヌは斑馬に騎つてゐた。今日でも彼等は犬を青や緑に染めないか？自然は私共の講布だ。人は常に神の細工に何物かを加へようとする。人は創造に手をつけて、或る時はヨリ善くし、或る時はヨリ悪くする。宮廷の道化師は人を猿に引き戻すだけより他に何の企圖もなかつた。それは謬れる方向への進歩であつた。退化の傑作であつた。同時に彼等は人を猿たらしめんと努めた。パーバラ・クリヴランド公妃サザンプトン伯夫人は、侍童に鼠猿をもつてゐた。ダッドレイ男爵夫人フランセス・サットンサットンは男爵第五位の人で、金縁の服を着た拂々にお茶の給仕をさせ、貴婦人閣下は之を『我が黒』とおよびめされた。ドルチェスター伯夫人カザリン・セドレイセドレイはいつも馬車に乗つて國會に出るときには、三正の阿弗利加猿が馬車の後に、立派な制服を着て、空嘯ソウソウしてお供してゐるのだつた。メチーナ・チエリーの一公妃——この化粧を樞機官カウチナールが見た——はその靴下を一疋の猫々にはかして貰ふのだつた。此秤器皿に乗せられた猿共は獸化した人間に對する分銅であつた。此人獸の混淆は矮人ヒョウと犬との例に於て特に顯著であつた。矮人は決して犬から離れなかつたが、犬は矮人よりも常に大きかつた。まるで彼等は頸輪で一緒につながれてゐるやうだつた。此並置は諸家の記録によつて實録せられ

るが著名なのはチャールズ第一世の後、ヘンリー第四世の娘、佛蘭西のアシリエッタの矮人、ヂエフレ・ハドゾンの肖像である。

人を退化させるには彼を不具ならしめるにある。彼の状態を阻止する事は、不具ならしめれば、成就する。當時の或る活體解剖家は、人間の顔から、神聖な像を磨滅するに、驚異すべき成功を収めた。エーメン・スツリート・コレヂの學員、倫敦藥種檢定員たるドクトルコンテスタは、雜典語で一書を著し、その偽外科術の、手段を記述した。若し私共はカリツクフェラグスのユスツスを信するならば、此外科術の發明者はエヴオンモーア——和蘭語大河の義——と稱ぶ遁世僧であつた。

選舉侯バラチーンの矮人、ベルケオー——その像（或は幽靈）はハイデルベルヒの洞穴中魔法箱の中ミッドから飛び出した——は此科學のいろ／＼に應用された、顯著な實例である。それは、その生存法則の恐ろしく簡単な生物を仕立て上げた。それはその生物を苦むにまかせ、娛みになれと命令した。

三

怪物の製造は大規模に行はれ、いろ／＼な部門に分れた。

回王カウングが之を求め、法王も之を要求した。前者は女を警護させる爲め、後者は祈禱をさせる爲め。之は特殊なもので、複製は出来なかつた。斯るものは人間に非常に近いので、放恣と宗教とに必要であつた。土耳其の後宮とシスチンの教會では同じ種類の怪物を用ゐた。前者は莽猛、後者は柔順。

彼等は今日では産せぬものを、如何に産すべきかを知つてゐた。彼等は私共私共に缺けた才能をもつて

るた。或る善良な人々が、没落が来たと呼んだのも所以なきに非ずであつた。私共は最早生きた人間の内彫刻する術を知らない。之は拷問術が失くなつた結果である。人は其點では昔て名手であつた。けれども今はそうでない。技術は程なく全滅する程簡單化せられた。人の肢を切断するに、人の腹を切開するに、臟腑を曳き出すに、珍品は瞬間に掴まれ、発見はなされた。私共は今や此實驗を排斥せねばならぬ、そして、剛手の扶助により爲された外科術の進歩を斯くの如く奪はれてゐる。

往時の生體解剖は市場向の珍品、宮廷の道化師、回王、法皇の宦官の製造に限られてはゐなかつた。それは千態萬様であつた。その勝利の一つは英國王に牡鶏を造つてやつたことだ。

牡鶏のやうに時を告ぐる番人のやうなものがいるのが英國宮廷の風習であつた。此番人は、他の者が寝てゐるとき醒めて、宮中をめぐり、必要なだけ屢々、農家の聲を毎時間揚げて、以て牡鶏の代理をつとめるのであつた。此牡鶏に爲された人は、幼時、ドクトル・コンクエストが記述した技術の一部たる喉頭の手術を受けたものである。チャールズ二世の治下には、手術と離れない流睡でブーツニス公妃に嫌氣をさしして、冠の光輝をよごさぬやうに、其任命が控えられたが、牡鶏の代りをする無疵の者を獲ることになつた。一個の退役士官が通常此名譽な職に選ばれた。チエームス二世の治下では、此職掌はウィリアム・サムブソンが任せられて、その鳴き聲の代に年九磅二志六片を得た。

カザリン二世の日記は私共に告げる、聖彼得堡では僅に百年以來、ツアリヤツアリツアが露國王侯を御氣に召さぬと、その人は或る日敷の間、宮中のお次の間に匂ひつくばつて、猫のやうに啼いたり、牡鶏のやうにクツ／＼と言つて、牀の上から食物を喙まされたとの事だ。

斯麼風習に過ぎ去つた。けれども人が想ふ程無くなつたわけではない。今日でも廷臣共はその主人等を悦ばすが爲め、その音調を變へはしないか？一人ならば幾人も地上から——私共は——泥土からとは言ひ度くない——彼の食ふ物を拾ひ上げるのである。

主達が謬たないのは非常に幸福である。それ故に彼等の矛盾は決して私共を迷惑させない。常に褒てをれば、間違ひはない、それは愉快だ。ルイ第十四世は、ヴェルサイユに於て士官が牡鶏の代りを勤め或は王侯が吐綴鶏の役をするのを好まなかつたらう。英や露で王室、帝室の威嚴をあけたことはルイ大王には、聖ルイの王冠にそぐはぬものに見えたらう。私共は、マダム・アンリエットが、夢に一羽の牡鶏を見る程、自己を忘却して、官女たる善き作法を犯した時、王の不機嫌であつた事を知つてゐる。人が宮廷の者であるとき、宮廷のことを夢に見てはならない。ボスエはルイ第十四世と殆ど同じく感觸を害した。

四

第十七世紀の子供貿易は、既に述べた如く、一個の商賣と連絡してゐた。ムコブラチコスモコブラチコスは貿易に従事し、商賣をやつた。彼等は子供を買つて、素材に耽か加工し、後それを轉賣した。

賣り方は、貧窮な父親を始め、その奴隷を利用する主人に至るまで、あらゆる種類の人間だつた。人を賣るのは簡單な事であつた。私共の時代では此權利を維持する爲めに戦つてきた。ヘッセンの選舉侯が、米國で殺される者を求めてゐた英國王に、彼の臣下を賣り渡したのは、百年に満たぬ前だつ

たことを記憶し給へ。主は、私共が牛肉を買ひに、屠牛者に行く如く、ヘッセン侯を訪れた。侯は砲の餌食の手持があつた、そこで彼の臣下を彼の店前に吊した。「いらつしやい、お買ひなさい。是は賣り物です。」英國では、ヂェツフレ家の治下で、モンマスの悲劇の後、多くの貴族や紳士が鬻首され、禁錮された。處刑された者共は妻、娘、寡婦、孤兒等を遺し、ヂエームス第二世は、それを自分の皇后に與へた。皇后は此叔女達をウイリアム・ベンに賣つた。王は必ずや此取引で澤山の利潤を得たらう。異様なことは、ヂエームス第二世が女を賣つたことではなくて、ウイリアム・ベンがそれを買つたことである。ベンの買得は、人を播く沙漠をもつてゐるので、婦女を農耕具とする必要があつたといふ事實で、辯明せられ、或は説明せられてゐる。

皇后陛下は此叔女達で、うまい仕事をなされた。若い者は高く賣れた。私共は侮辱されたやうでもある不安な心持で、多分老ひた公妃等は二束三文に投賣されたことと想像する。

コムブラチコスCombrachicosはスチエイラスとも稱ばれた。印度の詞で、巢を掠奪する意味がある。

長い間、コムブラチコスは、ほんの一部だけがその身を隠してゐた。時には、社會の階級に、彼等が榮える、物好きな商賣に、都合の善い陰が投げられることがある。今日私共はスペインに於て、悪漢ラモン・セリエス指揮の下に、過ぐる一八三四年から一八八六年まで、ヴァレンシヤ、アリカンテ、ムウルシヤの三洲を三十ヶ年間恐怖せしめた、此種の一團を知つてゐる。

スチユアルト朝の下には、コムブラチコスは宮廷に於ける惡臭ではなかつた。時には國家の爲めであつた。ヂエームス第二世には、彼等は殆ど一個の政治機關 *Instrumentum Regni* であつた。それは家族

分散の時、又は分散しかけた時、子孫が斷絶した時、繼嗣が突然抑壓されたときであつた。時には一族が他の利益の爲めに欺き取られたこともあつた。コムブラチコスは、彼等を國家の政策に獎推せしめた不具者たらしめる天才をもつてゐた。不具者にするは殺すよりはましだ。そこで如何にも、鐵假面があつたが、それは大仕掛であつた。歐洲を鐵假面で植民することは出来なかつた、然るに、不具にされた輕業師は街路を走り廻つても人が怪まなかつた。又鐵假面は脱ぐことが出来た。肉の假面はそうはならぬ。人は永久に自己の肉で假面を着せられる。是以上の巧いことがあるか？コムブラチコスは支那人が木に細工するやうに、人間に細工した。彼等は、私共が既に言つたやうに、その秘密をもつてゐた。彼等は今では失はれた藝術たる業をもつてゐた。或る幻怪に抑壓された物が彼等の手を離れる、それは嗤ふべく、驚異すべきものだつた。彼等是一個の生物を、その父が見ても判るまい程、巧に仕上げた。時には彼等は脊柱を眞直にして、顔の造作をかへた。彼等是一個の小兒から、人が手布の商標をとるやうに、眞人間たる印を取り去つた。輕業師に仕向けられる品物は、うまい工合に其關節を脱臼させられた。斯くして輕業師が出来上つた。

コムブラチコスは常に其顔相を小兒から取り去つたのみでなく、又其記憶をも取り去つた。少くも彼等は手に及ぶ限り、悉皆取り去つた。小兒は自分に加へられる殘害に就て何も知らなかつた。此恐ろしい外科術はその痕を彼の顔に残した、併し心には残さぬ。彼が憶ひ起す精一杯のことは或る日彼が二三の大人につかまつて、次には寢入つてしまつた、それから彼が癒えた、ぐらゐのところだ。何が癒えたのか？彼は知らない。硫黄で焼かれ、鋏で切斷されたことは彼は聊も記憶しない。コムブラ

笑 人

チコスは魔術的で、一切の痛苦をおさへると信じられた魔酔濟で小兒を酔はした。此薬は太古から支那にあつたもので、其處では今日でも用ゐられてゐる。支那人は我々の發明一切に先鞭を着てゐる。印刷術、砲術、風船、クロロフォーム等。只歐洲に於て既に時代の生命をとつて、生れ、怪異、奇蹟となる發見が、支那では蛹として残り、死の状態に於て維持されるだけである。支那は胚種である。私共は支那に今居るから、其處に、特異な點をノートする間、足止めてゐるやう。支那は太古から、或る特種な工業、藝術に秀てゐた。その藝術は生きてゐる人間を鑄直す技術であつた。彼等は二三才の小兒を取り、之を陶器の瓶に入れた。瓶は頭や足の出るやうに底も蓋もない多少奇妙なものである。日中は瓶は眞直にされてゐるが、夜は、小兒を寝かす爲めに、横にされる。斯くして小兒は丈が伸びずに横に成長し、其壓搾された肉と、歪形になつた骨格とで、瓶の中の浮彫を満たす。此壺中の成育が數年間續く。或る一定期の後それが改め難くなる。彼等は之が成就したと思ふ時、怪物が出来たと思ふ時、瓶を壊す。小兒が出てくる。見よ、其處には歪形の人がゐる。是は重寶である。何時か侏儒を注文すれば、御望次第の形のものを獲られる。

五

チエームス二世は、彼がコムブラチコスを利用したといふ立派な理由で、彼等を大目に見てゐた。少くも王が之を看過したのは一再ならずであつた。私共は自分が輕侮することを利用するのを常にも輕ろんずるものではない。此賤業は時には國家政策と稱せらるゝ高等な商賣に對し一個の勝れた手

段であつたのに、好んで慙むべき状態に残されたけれど、迫害はされなかつた。監督はなかつたけれども、注意はされてゐた。是は多分必要であつたらう。法律は一眼を閉ぢ、王は他の一眼を開いてゐた。

時には王は彼の共謀者たるを誓ふことさえあつた。之が王政恐赫主義の大膽なところである。不具にされ者は百合花の印がつけられた。彼等は其者から神の記號を奪ひ、王の記號をつけた。ノーフオク縣メルトン・コンステープルの主、騎士、權男爵チエコブ・アストレーは其家内に一個の小兒をもつてゐたが、それが賣られ、其額に、商人が百合花の烙印を捺した。某る場合、何かの理由で、此小兒の爲めに出來た新位置が、王家のものたることを登録せんとするときには、彼等は斯る方法を用ゐた。英國は、その個人的の奉仕に於て、常に百合花を用ゐる光榮を私共に與へた。コムブラチコスは狂信より商賣を分つ些少な意味の相違を容赦するときは、印度の壓殺者と同類であつた。彼等は自ら群居し、大道狂言師にいくらか偽せて、その進行を容易ならしめた。彼等は其處此處に露營した、併し彼等は嚴格で、敬虔で、他の浮浪者の系統を引かず、盜みをしなかつた。人は長い間、西班牙のムーアと、支那のムーアとを謬つて混同してゐた。西班牙のムーアは偽せ金造り、支那のは盜賊であつた。コムブラチコスは毫もそんなことはなかつた。彼等は正直な人間だつた。人が彼等を何と思はふと、彼等は時としては誠實に慎み深かつた。彼等は戸を押開けて入り、小兒を買ひ、金を拂つて立去つた。一切禮儀をそなへて事をなした。彼時は諸國の集り者だつた。コムブラチコスの名の下に、英も、佛も、西も、獨も、伊も、親和し

笑 人

た。思考の一致、迷信の一致、同じ職業が斯る融合を起した。此浮浪者の團體では、地中海沿岸の者は東を、大西洋岸の者は西を代表した。多くのバスク人は多くの愛蘭土人とつきあつた。バスク人と愛蘭土人とは御互に理解した。彼は古代のビュニク語を話した。之に加ふるに加特力教の愛蘭土と加特力教の西班牙との親密な關係——殆ど愛蘭王、ケルト族の貴族ド・ブラニーを倫敦で、絞首臺に上せて梟が^{けが}ついた程の關係があつた。レイトリム洲の征服はその結果であつた。

コムブラチコス^{コムブラチコス}は種族といふよりも、寧ろ同輩であつた。それは皆宇宙のあぶれ者で、犯罪をその商賣としてゐたのだ。それは襤褸^{ぼろ}で出来た道化役者の一種であつた。人一人を入れるのは襤褸^{ぼろ}一片を縫ひ付けることだつた。

漂^{ヒラ}はコムブラチコスの生活規程であつた。隠見出没して、僅に許されてゐるものは根を張ることは難しい。彼等の商賣が宮廷の御用を勤め、時に王家の勢力の補助をする國に於てすら、彼等は時折り不意に虐待せられた。王等は彼等の技術を用ゐる、技術者等を牢へ送つた。此朝令暮改は只王様の御機嫌まかせによるのであつた。『之^{これ}朕^{わが}が意である』

轉がる石と、漂泊の職業には苦がつかぬ。コムブラチコスは貧乏だつた。此商賣でも卸問屋は富有だつたらう。二百年も経つた後ではその事を明かにするは難しい。

前にも言つた通り、之は仲間であつた。それはその法律、その誓約、その形式をもつてゐた。それは殆どその秘傳をもつてゐた。今日コムブラチコスに就て一切を知らうとする人は誰でもどスカヤ或はガリシヤに行くを要する。其處には多くのバスク人が居る、そして「千買ひ」の話が聞かれるのは、

此山中に於てとある。今日でもコムブラチコスの話はオヤルスム、ウルビストンド、レソ、アスチガ^{アスチガ}ルラガで話されてゐる。『ちやんとしな、坊や、でなけりや人買ひをつれてくるよ』といふのは、母が其國で子供を奪す叫びである。

コムブラチコスはチガンやヂブシイのやうに、定期集會の場所をきめてゐた。彼等の頭株は常に協議してゐた。第十七世紀には、彼等は四個所の主要な集合所をもつてゐた。一個處はスペインのバンコルボ^{バンコルボ}の隘路、一個處は獨乙のヂーキルシユ附近、悪女と稱ぶ森の中で、其處には、一個は首のある婦女、モ一^{モ一}つは首のない男の現はされた、謎的の浮彫があつた。他の一個所は佛蘭西の、ブルボンヌ・レ・パンの附近ボルヴォトモナの古い神苑中の丘、最後の一個處は英國、ヨークシャーア縣クリーヴランドのギスボーローの楯持、ウイリアム・チャロナーの庭園壁の背後^{うしろ}孤形の戸口より入る四角な塔と、家の大きな翼^{よく}の背後にあつた。

六

浮浪者に對する英國の法律は常に厳しかつた。英國は其ゴート式立法に於て Homo errans, fera errans, peior^{ペイオ}の原理に感奮したやうだつた。此特別法の一つは「家のない人間を猿、鼯、山猫、臭獸よりも危険」な種類に編入したことである。長い間英國は、遠に除いてしまつた狼程に、除かふと欲するジブシイについて苦勞した。其點では、英國人は、狼の健康を諸聖人に祈禱し、それを「我が代父」と稱んだ愛蘭土人とは相違してゐた。

併し英國法は（今も云つたとほり）狼を許し、馴らし、家に飼つて、犬の一種としたやうに、正札付きの浮浪者を許して、臣民の一種となした。それは香具師でも、渡り理髮師でも、山師醫者でも、行商でも、大道學者でも、彼等は生活していく職業をもつて居る間はそれにかまはなかつた。無賴漢は正しく社會の敵であつた。近代の産物たる惰け者は古代には分つてゐなかつた。只無宿者だけが分つてゐた。怪しい姿、人皆知つてはゐるが、何とも決定し難きものが、社會が一個の人の襟がみを挿へるに充分の理由であつた。「何處に貴様は住つてゐるか？どうして貴様は暮してゐる？」そして若し彼が答へが出来なかつたなら、嚴刑が彼を待ち受けてゐる。鐵火が法律中にあつた。法律は無賴の燒灼を行つた。

であるから、全英を通じて、眞の「疑惑の法律」が無宿者（容易に悪徒となる）に加へられ、特にジブシイに用ゐられた。ジブシイの追放を猶太人やムーア人をスペインから、新教徒を佛蘭西から追放したのに比較するが、之は誤りである。私共は迫害と驅り立てとを混同しない。

コムブラチコスは、ジブシイと何等共通の點なりと、私共は主張する。ジブシイは一個の國民であつた。コムブラチコスはあらゆる國民の複合であつた。汚水の滿ちた慥とする器物の渣であつた。コムブラチコスは、ジブシイのやうに彼等自分の通用語をもたなかつた。彼等の話は慣用語の雑多な蒐集であつた。あらゆる國語がこんがらがつて彼等の國語となつた。ジブシイのやうに、國民の中を迂廻し來つて、一個の人民たるべくあつた。けれども彼等を結合するものは組合であつて、種族ではなかつた。歴史の總ての時代に於ても、人間をつくる此巨大な活動體のうちに、その周圍に毒を發する

斯れの或るものが發見される。ジブシイは種族であつた。コムブラチコスは共濟組合であつた。高尚な目的はもたぬけれど、恐しい手工をもつた共濟組合であつた。最後に彼等の宗教が相違してゐる。ジブシイは異教徒であつたが、コムブラチコスはキリスト教徒であつた。更に、よしや雑多な國民から成つたとは云へ、其出生地は、敬虔なスペインであつた一團體に適はしい善良なキリスト教徒であつた。

彼等はキリスト教徒以上、加特力教徒であつた。彼等は羅馬人であつた、そして其信仰に感情的で、純潔であつたことは、彼等が双頭の塊國鷲を乗せた銀球のついた杖を笏にした老人に率ゐられ、指揮される、ベスツの匈國漂泊者と親しくすることを拒んだ。是等の匈牙利人等は、嫌ふべき八月二十七日の昇天を祝ふ點では分裂宗徒であつた。

英國では、スチュアルト家が統治してゐた間は、コムブラチコスの聯盟は、其動機は既に私共が一瞥したやうに、或る程度までは保護された。チェームス第二世は、虔敬な人で、猶太人を迫害し、ジブシイを蹂躪し去つたが、コムブラチコスには善い王様であつた。我々は其理由を見た。コムブラチコスは、王が賣方であつた人間商品の買手であつたからだ。消失といふことは屢々邦家の爲めに必要であつた。彼等が手に入れて、取扱ふ幼年の不便な繼嗣はその形を失つた。此は没收を容易ならしめた。好きなものに爵位を授け換えてやるのを容易ならしめた。なほコムブラチコスは非常に慎み深く、寡言であつた。彼等は沈黙をちかひ、其言を守つた。是は國務に必要であつた。彼等が王の秘密を裏切つたやうな例はあり得なかつた。是は正しく彼等の利益であつた。若し王が彼等に對する信任

を失くなせば、彼等は大きに危かつた。彼等は如斯く政治的に入用であつた。尙ほ是等の技術者は神父達に歌者を供給した。コムブラチコス（アレスン）は快速調の「ミゼレーレ」の歌に必要であつた。彼等殊にマリヤを信奉した。總て是はスチユアルト朝の天主教徒の氣に入つた。チエームス二世は、宦官をつくるまでに此信仰を擴張けていつた宗教家達に敵することが出来なかつた。一六八八年には英國では王朝が變つた。オレンヂ家がスチユアルト家に變つた。ウイリアム三世が、チエームス二世に代つた。

チエームス二世は追放のうちに死し、奇蹟が彼の墓上に行はれ、オータンの督濟は痔瘻を醫された。王のキリスト教的功德の尊き報酬である。

ウイリアムはチエームスとは考も習慣も異ふので、コムブラチコスに嚴しかつた。彼は虱を潰すに全力をいだ。ウイリアム及びメーリの初期に於ける法律は、子供買ひの團體を烈しく打つた。それは、その時から、コムブラチコス（アレスン）を微塵に碎いた、棍棒の打撃であつた。此法律の規定により、是等の者共は捕はれ、當然刑せられ、灼熱した鐵で、右の肩に、惡漢の惡といふ字、左手に盜賊の盜の字、右手には、人殺しの人といふ字を烙印せられた。「外見乞巧であつても、富裕と想像せられる」首領株は、架刑（首と手とを板）に處せられ、額には架の字を烙印せられ、其商品は沒收せられた。樹はその林で根拔ぎにされた。コムブラチコス（アレスン）を告發しなかつた者は、犯罪隠匿罪として、沒收及び終身禁錮に處せられた。是等の男達の仲間にある婦人達は、罰椅子（フエグス）に處せられた。此名は佛語のコキヌ（おひきすり）獨乙語のシツール（椅子）の三語から出來たものである。英國の法律は妙に長命なので、此刑罰

は今日までも、喧嘩好きの婦人の爲めに、英國の立法に存在してゐる。罰椅子は河又は小池の上に吊るされ、婦女はその上に掛けさせられる。其椅子は水の中に落され、又引き揚げられる。此間婦を水に漬けることを三度するのは「彼女の怒を冷ます」と、註釋家チャムパーン（チャンパーン）が言つてゐる。

第一卷 夜は人間程に黒くない

一、ボートランドの南端

執拗い北風が小歌なく歐洲大陸を吹き渡つた。しかも一層烈しく英國を吹き渡つたのは一六八九年の十二月中と一六九〇年の一月中とであつた。そこで倫敦のノンヂェルロールのプレスビテリアン派の教會の古い聖書の縁に「貧乏人に記念すべき」と、記るされた不幸な寒氣が起つた。公（おほやけ）の記録に用ゐられる古い王宮の羊皮紙の、丈夫な紙質のお蔭で飢寒に斃れた貧乏人の長い姓名表が今でも讀まれる。チームス河は悉皆凍り付けた。海の運動は河面の氷結を至難ならしめるので、是は百年に一度も起らぬ事であつた。馬車が凍つた河の上を通り、市場が開け、見世物小舎が建つた。牡牛一頭氷の上で丸焼にされた。此厚い結氷は二ヶ月續いた。ひどい一六九〇年は、チエームス王の藥劑官として、

倫敦市から、胸像と承足とを贈られた當人、ドクトル・ギネオン・デレーヌにより、具さに記述された

第十七世紀初頭の有名な冬よりも、酷烈であつた。

或る夕べ、一六九〇年一月の最も烈しい一日の暮れ方、ボートランド灣の無数の荒磯の一つに、何事か只ならぬことが起つて、海鷗や野雁を叫ばし、其入口に舞はし、再び入ることを敢てせしめなかつた。

此入江のうち、或る風の續く間は、入江を劃する總てのうちで、最も危険な、それ故に最も淋しい、それが非常に危険な故に、隠れてゐる船には便利な處に、一隻の小舟が、水が深いので、殆ど崖に密接して、岩の鼻つ端に繋つてゐた。私共は夜が降りるといつては誤りだ。私共は夜が上ると云ふべきである。なぜかなれば暗の來るのは地上からであるから。崖の下は既に夜であつた。頂は未だ晝であつた。船の淀泊所に近づく者は誰でも一隻のビスカヤ型の双橋船を認めたらう。

終日霧に隠れてゐた太陽はたつた今没したところだつた。深く、暗い、太陽のないが爲めの心配とも云ふべきものが感じられるやうになつた。海からは一つも風が無い、入江の水は平靜だつた。

是は、冬季に於ては特に、僥倖な例外であつた。殆ど總てのボートランドの崖は砂の瀬をもつてゐた。そして時化には浪がひどく荒く、安穩に過ぐるのは、餘程の技巧と練達とが入用だつた。此小湊は、聊かの利益になつた。入るには冒険、出るには恐ろしい。此夕方驚たことには、一つの危険もなかつた。

双橋船は舊式の、今は廢れた型のものだつた。此型の船は海軍にさえも使はれて、其舷は丈夫に出

來てゐたのだつた。大きさでは短艇、長さでは船である。之はアルマゲ艦隊で形造られた。時として双橋艦は巨大な噸數に達したことがあつた。即ち、ロベス・デ・メチーナの乗組んだグラランド・グリフオンは僅に六百五十五噸をはかり、四十門の砲を搭載した。けれども商用又は密輸入の双橋船は甚だ小弱な物だつた。海員は其眞價を知つて、此型は甚だ哀れなものだと見てゐた。双橋船の綱具は麻で出來て時には内部に針金があつた。是は恐らく、非科學的ではあるが、磁氣張力の場合に表示を得る一手段としてあつたらう。此綱具の輕さは重い帆を用ゆるを妨げなかつた。舵柄は非常に長くて、艇子の長桿の利點を有したが、努力の小孤なる不利益をも有した。舵の端の二個の滑車についた二個の輪は、此缺點を修正した、そして長さの損失を或る程度まで償つた。羅針は、正方形、箱の下に遮蔽され、カルダン燈のやうに、小さな楕の上、交互に水平に布置された鋼の框の中にちやんと均衡がとれてゐた。双橋船の構造には科學と狡慧とがあつた、併しそれは無智の科學、野蠻な狡慧であつた。双橋船はブラーム船や獨木船のやうな幼稚なものだつた。安定ではブラームに似て、速度では獨木船に似てゐた。そして海賊や漁夫の本能から生れた總ての船のやうに、それは著しく耐波性に富んでゐた。それは内海にも廣海にも等しく適した。その帆の組織は止めが非常に複雑で又非常に特異でアヌツウリヤの灣でも又海でも自由にその航海を易からしめた。それは湖を回航することも出來れば、世界を週航することも出來た。二個の目的——池によく、嵐によい——をもつた奇妙な船である。双橋船は、鵜鴎が鳥のうちであるやうに、船のうちである。最小な一つ、最も大膽なもの、一つである。鵜鴎は葦にとまつてもそれを曲げない、そして飛び去つて大洋を横斷する。

是等のビスカヤ式双楫船は、最劣等なものに至るまで渡金し、ペンキが塗つてあつた。鯨は幾介野蠻な、此魅する人民の天才の一部であつた。雪や牧場で多様になされた彼等の山々の崇高な色彩は、裝飾それ自身が有する、粗剛な魅力を彼等に顯はした。彼は貧に苛まれて、しかも堂々としてゐる。彼等は彼等の小舎に鎧を着せてある。彼等は、鈴で飾る巨大な驢馬と、羽毛の頭飾りをつける、巨大な牡牛をもつてゐる。彼等の馬車は三里の遠方から其轆轤の音を聞き分け得られるものだが、磨かされ、彫られ、リボンがかけてある。靴直しは彼の戸に浮彫をしてゐる。それは聖クリスピンと、一個の古靴である、併しそれは石に刻んである。彼等はその草のジャケットをレースで飾る。彼はその襪襦をつくらぬ、併しそれに縫箔する。深遠且つ高雅な快活！バスク人は恰も希臘人である、太陽の子である。ワールンシヤの者が朽葉色の毛氈に頭を通す穴をあけて、素裸で、悲しげにそれを着てゐるが、ガリシヤやビスカヤの土民は、露に晒した、清い麻布のシャツを愉快に着てゐる。彼等の間口や、窓は、美しい、鮮々とした顔が、玉蜀黍の花環の下に、笑ひながら並らふ。喜ばしい、驕奢は清楚が彼等の美術に、彼等の職業に、彼等の風俗は、彼等の娘達の衣裳に、彼等の歌に輝いてゐる。山、それは巨大な廢墟はビスカヤに於て總て照りかゞやく。太陽の光りはその裂目毎に出つ入りつしてゐる。粗野なジャイスキヴエルは牧歌に富んでゐる。ビスカヤはピレニー山脈の美貌たるを、サボーイのアルプス山脈に於けるが如し。危険な海灣、サン・セバスチアン・レーソフ・フォンラビニアの附近は、嵐を以て、雲を以て、岬嘴に碎ける飛沫を以て、風浪の狂暴を以て、恐怖と、喧囂を以て、女の舟子に、薔薇を冠ぶせる。バスクの國土を見た人は、も一度之れを見度いと願ふ。それは

度まれた國である。年二度の收穫がある。村はさんざめき渡つて、華やかだ。堂々たる貧乏だ。日曜はギター、舞踏、カスターネット、男女のトチ狂ふ響で満ち、家屋は清潔に、びか／＼として、鐘樓には鵲の群。

私共は、彼の山脈巍峨として海に入るポートルランドに戻らう。

ポートルランド半島は、幾何學的に見て、鳥の頭の形を呈する。其嘴は海の方に向ひ、後頂部はウエイマス、頸部は即ち地球である。

ポートルランドは其荒野の大半を犠牲にして、今日では只商賣の爲めに存在する。ポートルランドの岸は石切白亜取りの坑夫により第十七世紀の半ば頃に發見せられたのであつた。其時から、セメントと稱ふものがポートルランドの石から製造せられた。是は其土地を富まし、灣の形を壞はす有用な工業であつた。二百年以前此岸は入江として喰ひ切られ、今日は石坑として喰はれてゐる。鶴嘴はらよつびりと、浪は大々に嚙ちつてゐる。美の減耗はその故だ。海の廣大な荒掠に、人間のきちんときつた打撃が續いた。此人間の規則だつた打撃は、ビスカイ型の双楫船が繋つた崖を崩し去つた。今は失はれた其小さな淀泊所の痕跡を發見するには、半島の東岸をフォリ・ピア・ダ・ドル・ピアの向ふ、ウエカムの方、チャーチ・ホープと呼ばれる處と、サウスウエルと稱ばるゝ處との間さえも捜さねばならぬ。

幅よりもズット高い斷崖で四方圍まれた崖は刻々、夕べの陰に暗くなつてゐた。黄昏に常なる霧の暗さは、一層濃くなつた。それは井の底で、暗黒が増すのに似てゐた。崖の海に面した入口の、狭い

通路は、殆ど夜の暗さをもつた内部に、蒼白な裂目を印じて、其處には浪が揺いてゐた。岩にもやつた双楫船を認めるには、全然近く寄らなければならなかつた、それは恰も陰影の大きな外套に隠れてゐるやうだつたから。板が一枚甲板から、低い平らな岩岸に——之が唯一の上陸點であつた——架け渡され、船と陸との連絡を取つてあつた。黒い影が此危つかしい通路の上を交互に往きつ、戻りつし下、暗の中に二三の人々が船に乗込むところだつた。

灣の北に突き出た岩の御蔭で、崖のうちは沖にゐるよりは塞くなかつたが、それでも人々の戦慄を防ぎはしなかつた。彼等は急いでゐた。黄昏の効果は、恰も彼等が道具でもつて打ち出されたかのやうに、浮き上つた形に見せた。彼等の衣服にはギザ／＼が見えたそして彼等が、英國で所謂「襤褸組」といふ階級の人民に屬することを示した。

小徑の曲りくねりが、崖の隆起に隙りと分つてゐた。此小徑は曲りくねつて、殆ど垂直で、人間よりも、山羊に向いてゐた、そして板の渡してある高臺の處で終つてゐた。此小徑は概して結構な凹みをもつては居らず、それは瀧としてよりも、道たることがヨリ少かつた。彼等は傾斜するよりも寧ろ沈降した。

此一路が恐らく、上部平原の道の岐れであらう小徑は、見るも不愉快な、縦であつた。下から太は、それが九十九折になつて崖の上層に達し、其處を深い通路となり岩間を通つて、高い平原に出るのを見た。入江の舟が待つてゐるお客達は此小徑を通つてきた筈だ。

入江でやつてゐる乗船の動作を除けば、明かに脅かされた不安な動作だ。あたりは寂寥と

してゐた。登音、物の響、風の呼吸すらも聞えなかつた。道の他の側では、リングスタッド灣の入口に、鮫釣船の一隊が出てゐるのが看られた。それは明かに勘定違ひをしてゐるのだつた。是等極北の小船は、海の氣まぐれで、丁抹の海面から、英國の海面に追ひやられたのだつた。北の風は此悪戯を漁夫にやらかす。彼等はたつた今ポートランドの碇泊所に避難したところなのだつた。是に豫期された荒天と、沖に居ることの危険な證據であつた。彼等は錨を卸してゐた。旗艇は、ノルウェイ船隊古代の習慣により先頭に位置し、その總ての綱具は、海の白い平面上に黒く聳えてゐた。そして船にはいろ／＼の鮫鱈をとる鈎、鮎、網などが積れまてゐるのは見えたらう。

同じ隅に吹き寄せられた、他の二三の小舟の他、ポートランドの廣大な水平線には生きたものとは目に入らなかつた。家も、舟も、當時此海岸は無人大つた、そして其季節には路が安全ではなかつた。

空模様がどうであらうとも、ビスカヤ型の双楫船で、出帆しようとしてゐる者共は、依然として發途を急いでゐた。彼等は、忙しさうに入り亂れて、海岸を迅速に動いてゐた。一人々々を辨別するのは難しかつた。彼等が若いか年とつてゐるかを言ふべく不可能であつた。黄昏のたよりなさは、彼等を混淆し又朦かした。陰の假面が彼等の顔を覆ふた。彼等は、の布地の素描であつた。彼等は八人居た、そしてその中には女らしいものが一兩人居た、が、此連中が着てゐる襤褸衣は最早男女の區別がなくなつてゐるので、ちやんと辨別するのは難しかつた。襤褸には性がない。

大きな者の間をあちこちと飛び交ふ一個の小さな影は、侏儒でなければ、子供であることを示した。

それは一人の小兒であつた。

二、隔離

よく近寄つて観察した人が見たことは是であつたやう——

一同は、破れ、つぎはぎした、併し身を襲ふ長い外套を着て、北風と、好奇心に對して必要上から、目までそれを被つてゐた。彼等は此外套の下に安んじて動いた。大部分の者は頸のまはりに手布——スペインに於ける頭布の始まりを印する嚙矢——を捲いてゐた。此頭布は英國では見馴れぬものではなかつた。當時南は北に於て流行した。恐らく是は北が南に克つてゐたことと關係があるだらう。それは征服し、嘆美した。アルマダ艦隊敗北後、西語はエリザベス朝廷の優美な用語と思はれた。英國女皇の宮廷で英語をはなすのは殆ど無禮とせられた。私共が法を布く人間の風習を幾分か採用するのは、被征服の文明に對する征服者たる蠻人の習慣である。韃靼人は瞑想して、支那人を眞似る。そこでスペインの風俗が英國に入り込み、反對に英國の利益がスペインに忍び込んだのだ。

乗船中の仲間の一人は首領と見えた。彼は足にサンダル(皮の草履)を履き、金レースの布片と箔散しの胴着(それは恰も魚の腹のやうに、彼の外着の下から光るもの)に装はれてゐた。モ一人の方は大きな糊着布の廣縁帽子のやうに切つたものを顔の上まで引き卸してゐた。此糊着布は管を通す穴があけてないから、被り主は文人であることを示した。

一體大人のジャケットは子供の外套たる規則で、小兒は、彼の膝までとどく、水夫のジャケットを被

の襤褸の上に着てゐた。

彼の身長により、彼は十乃至十一歳の男の兒と推せられた。彼は素足だつた。

双橋船の乗組員は船長一人と、水夫二人とであつた。

双橋船は明かにスペインから來て、又そこへ歸るところだつた。其船は疑もなく、一つの岸から、

他の岸へ祕密の用に供せられるものだつた。

船に乗込む人々は、自分達同志で、私語き合つてゐた。

私語はいろんなゴチャ雑ぜの音だつた。今スペイン一語、それから獨乙語、それから佛語、それからゲーリック語、と又時にはバスク語が聞えた。それは土語か、或は卑語であつた。彼等は總ての國民から成るけれど、又同じ團體の者と見えた。乗組員は多分その仲間で、乗船は前以て打合せがしてあつたものだ。

雜然とした一群は仲間、恐らく共謀者の手合だつたらしい。

そこにも少し光明があつて、もつと注意して視察することが出来たならば、彼等の襤褸の下から、念珠や袈裟を着けてゐるのが見えたらう。群にまじつた一人の半女は、その粒の大きさに於て回教僧侶の珠數と殆ど同じ程の念珠をもつてゐて、それがラニミータフリ、又の名ラランドリファイで出来た愛蘭土製のものであることが易容に認められた。

又それ程暗くなかつたなら、双橋船の舳には、聖母とキリストの像が刻まれてあるのを認めたらう。それは多分バスクのノートルダムのもの、古代のカンタブリアのバナチャの一種だたらう。船首

像の位置を占めた此像の下に一個の洋燈があつたが、此時は灯れてゐなかつた。隠れ度いとの切望を含む、餘計な入念だつた。それが灯れてゐるときには、聖母の前に燃えたと共に、海の照した。此洋燈は明に二つの目的をもつてゐた。細蠟燭の役目をする信號燈である。

槍出しの下に、長い、灣曲した、鋭い水切りが、新月の角のやうに前方に突き出てゐた。水切りの頂邊、聖母の足下に、疊んで翼を以て、跪いた天使、その背を支柱に凭せて、水平線を眼鏡で見てるた。天使は「我が貴婦人」と同様に渡金されてゐた。水切には穴や入口があつて、浪を通し、渡金したり、唐草模様をつける時に便にしてあつた。

聖母の像の下に、金の首字で、「マツチーナ」と、書いてあつた。船名だが、只今は暗黒の爲めに讀めなかつた。

出發の混雜のうちに、旅人等が携へて行く荷物はゴタ／＼と、崖の下に抛り出され、橋に架た板片により、汀から小舟へと迅速に積まれた。ビスケットの袋、魚の樽詰、携帯肉汁各一つ宛と、三個の樽——一個は清水、一個は酢芽、一個はタール——エール四五罎、革帶でしばつた大靴、トランク、箱、炬火用の火繩の丸、信號旗等が此荷物であつた。襤褸着の御客達は小靴を抱えてゐた。それが所定めぬ生活を表示するやうに思はれた。浮浪者といふものは何かを持つてゐなければならなかつた。時には彼等は鳥のやうに飛び去るがましだと思ふが、糊口の手段を棄てずにはそうすることは出来ない。彼等はその用向きの職業が何であらうとも、きつと仕事の道具や器械の入つた箱を携へてゐる。私共が語つてゐる者共は、その荷物を身に携へてゐるが、屢々それが一個の邪魔物となつてゐた。

此動産を崖の下まで持つてくるのは容易なことではなかつた。けれどもそれをやつたところを口ば、決然とした此出發の意圖がうかゞはれた。

手間はとらなかつた。濱と舟との間には斷えず往來があつた。各自は分擔の仕事をとつた。一人が袋を荷へば、モ一人は箱を擔いだ。此雜多な人間のうち、多分婦女であるらしい者共も他と同様に働いた。彼等は小兒に背負ひ切れぬ程背負はした。

小兒の父か母かが群中に居たか疑はしい。生きてゐる證據は、小兒に保證されなかつた。彼等は彼を働かした。只それだけであつた。彼は一家の小兒ではなく、種族中の奴隸であつた。彼は誰にでも使はれた。誰一人彼に詞をかけなかつた。

併し彼は急いだ、そして此神祕な群の他の者と同じく只一つの念をもつて——及ぶ限り速に乗船しようと思つてゐるらしかつた。多分左様ではなからう。彼が急いだのは、他が急いでゐるのを見たから、器械的にやつたのだらう。

双橋船は甲板があつた。船内に荷物の積込みは早くも終り、出帆の時が來た。最後の一箱は舷門を運ばれ、今は只人が乗船するばかりになつた。群中の婦女と見える二個の人物は既に船上に在つた。

小兒をまじへた六人は未だ崖の高臺に居た。船中には出帆の動作が行はれ、船長は舵柄を取り、一人の水夫は纜を截つべく斧を取つた。截つのは急いでゐる證據であつた。暇があるなら、解くのである。

「Any one some へ行か、」と、衣服には箔がついてゐる六人のうちの首領と見える二人が、低い聲で言つた。小兒は一番駈しようと板片の方へ走つた。彼がそれに足をかけた時、二人の男が、急いで彼を

笑 追ひぬき、危く彼を水中に落すところだった。四番目の者は彼を拳で突き除け三番目の後に續いた。五番目は首領で、入るといふよりも寧ろ舟中に飛び込んだ、そして彼が跳び込むや否や、板片を蹴飛ばした。それは海に落ちた、と斧の一撃、纜はブツリと截たれ、舟は岸を離れた。小兒は陸に取り残された。

三、獨り

小兒は身動もせず、その眼を睜つて、岩の上に佇つてゐた。呼びもせず、喚びもせず、是は彼にとつて意外であつたが、彼は一言も發しなかつた。同様な沈黙が舟をも領した。小兒から大人に呼ぶ聲もなければ、大人達から小兒に告別もなかつた。兩方とも、間の遠ざかつて行くことに就て、一個の黙諾があつた。それは恰もステクス河の岸に於ける幽魂の別離のやうだつた。小兒は既に上げの満す岩の上に釘付けられた如く立つて、去り行く船を見詰めた。彼は自分の位置を知つてゐるやうだつた。何を彼は認めたか？ 暗黒。

少時の後、双橋船は灣の頸部に達し、それを入つた。晴れた空には橋頭が見えた。それは兩壁の間に縫ふが如く曲つた水路を挟む、裂け岩の上から聳えてゐた。橋冠は岩の頂にゆれて、其中に走り入るやうに見えた。するとそれがもう見えなくなつた。一切が過ぎた。船は海に出てゐたのだつた。

小兒はその消失を見守つた。彼は驚いたけれども夢心地だつた。彼の自失は生命の暗い現實感により錯雜された。其處には恰も此生の始めに於ける經驗があるやうに見えた。彼は恐らく、既にその判

斷を働かしたでらうか？ 餘りに早く來た經驗は、時として、小兒心の暗い奥底に、或る危険な秤器(はかり)共は何だか知らないが)をつくり、それでもつて此小さな、貧弱な靈が神を秤るものだ。

自ら罪無きを慰じて、彼は満足した。そこには訴えがなかつた。責めやうのなきものは責めない。こんな粗暴な排斥を受けても彼は何うしようとしなかつた。彼は胸の否へるを感じた。小兒は、彼の生命がよく發展しないうちに、早くも終局せしめると見た此運命の突然な打撃に屈しなかつた。彼は立ちながら電撃されたのだ。

誰でも彼の失望のない驚きを見た人には、彼の團體の中には、彼を愛した何物もなければ、彼が愛した何物もなかつたことが、明かに分つたらう。

思ひに耽つて、彼は寒さを忘れた。突然浪が彼の足を洗つた。潮は上げてゐた。一陣の風が彼の髪を吹き過ぎた。北風が立つてゐた。彼は身顫ひした。頭から足の先まで、目醒めの顫が來た。

彼は唄をあたりにくばつた。

彼は單獨であつた。

此の日まで彼に取つては、今双橋船の中に居る者共より外には、人はなかつた。此人々はたつた今忍び去つてしまつた。

笑 いふも奇妙と思はれることを附加しよう、則ち此人々は彼が知つてゐるだけの人々は、彼には知らぬ人々だつたことだ。

人 彼は彼等が誰であつたかを語れなかつた。彼の幼時は、彼が此人々のうちであることを悟らずし

て、彼等の間に過ぎた。彼は只彼等と並んでゐた、それだけだつた。

彼はたつた今彼等に忘られた。

彼は身に一錢を持たず、足に靴なく、辛く身を蔽ふ衣服を着け、彼のポケットには一片のパンすらなかつた。

時は冬だつた。そして夜だつた。人家には數里を歩るかねばならなかつた。

彼は自分が何處に居るのか知らなかつた。

彼は自分と共に海の縁まで来た者共が、彼を擱て去つたことより以外には、何事も知らなかつた。

彼は生命の圏外に置かれた思ひがした。

彼は人間味が失せたやうに感じた。

彼は十才であつた。

小兒は、其處に彼が夜のの上るを見た深淵と、其處に彼が浪の叫ぶを聞いた深淵との間の沙漠にをるのだつた。

彼はその小さな、瘠せた腕を伸して、欠伸した。

それから突然、決心をつけた人のやうに、大膽に、且つ李鼠の否恐らく輕業師の輕快さで、彼の麻痺を振り捨て、彼は入江を後ろにして、崖を攀ぢ始めた。彼は小徑を登り、それを去り、又それに戻つた、敏捷、且つ冒險に。彼は恰も目的地を見付け出したかの如くに、陸の方へ急いだ。けれども彼は何處へ行くのでもなかつた。

彼は目的なしに急いだ——運命の前の遁走者。

攀ぢ上るのは人間の業、匍ひ上るは動物の業、彼は兩方をやつた。ボートランドの坂は南に面し、小徑には僅かより雪がなかつた。併し烈しい寒氣は其雪を埃に凍て、歩くに非常に邪魔だつた。小兒はそれを切り抜けた。彼の着てゐる大人のジャケットは、餘り彼には大きくて、仕事を面倒ならしめ、彼の邪魔をした。折々突き出た岩や、凹んだ處に氷があつて、彼を走り落さした。すると彼は霎時懸崖にブラ下つて、枯枝や、突き出た石を掴んだ。一度彼は石磐石の脈に来て、突然それが彼の足下で崩れ、それと共に彼は落ちていつた。崩れる石磐石は不安心なものである。二三秒の間小兒は屋根の上の瓦のやうに走り落ちた。彼は傾斜の最極端まで轉がつた。彼が折善く掴んだ一叢の草が彼を救つた。彼は人前での如く、深淵の前でも啞の如くであつた。彼は身繕ひして、無言で再び上つていつた。傾斜は險しかつた。彼は上るのに幾度も失策つた。懸崖は暗さが一層ひどくなつた。此直立した岩は終端があつた。それは小兒の前、その遙に高いところで和いでいつた。小兒が昂るにつけて、頂も上つてゆくやうだつた。彼は昇るかたに、彼と天との間に横木の如く置かれた、暗い長押を見上げた。遂に彼は頂に達した。

彼は平地に跳び上つた、否寧ろ上陸した。何ぜといへば彼は懸崖から上つたのだから。

彼が懸崖を離れるや否や、彼は震ひ出した。彼は其顔に夜が刺すのを感じた。それは北風だつた。身を切る北西の風が吹いてゐた。彼は粗末なその水夫服を胸のあたりに、縫りと捲き付けた。

それは舟乗仲間、シユロワと稱ぶ、善い上着で、此服地は南西の雨の浸み透るのを妨げたからで

あつた。

小兒は高臺に着いて、立止まり、彼の露き出しの足をしつかりと凍つた地に置いて、あたりを見廻した。

彼の背後には海、前には陸があつた。上には空があつたが、空には星はなかつた。不透明な霧が天心をかくしてゐた。

岩壁の頂に達して、彼は陸の方に向ひ、注意してそれを見た。それは彼の前に天際まで坦々として、凍て、雪におほはれた。ヘズ草の二三が風に顛へてゐた。道といふものは見えなかつた。無一物。羊飼の小舎すらない。只其處此處に、蒼白い螺旋形の渦巻きが見えた。之は風に吹きまぐられる細かい雪の龍巻であつた。起伏した丘は、突然霧がかゝつて、地平線に浪うつた。ものうい大平原は白い霧の裡に掻き消された。深い沈黙。それは無限の如く廣がり、墓の如く寂としてゐた。

小兒は海の方に向つた。

海も陸のやうに白かつた。是は雪で、彼は泡で。此二重の白を爲す光り程、憂愁なものはない。夜間の或る光輝は非常に美しい硬さをもつ。海は鋼鏡の、崖は黒檀のやうだ。小兒が居る高みから、ボートランド灣は丘のその半圓に於て、殆ど地圖の上にあるやうに見えた。此夜景には夢のやうなものがあつた。それは暗い半月形に帯せられた蒼白い、起伏する平原であつた。月は時に斯る光景を呈する。一の岬から他の岬に、此岸全體に、爐の燃える火光、燈明のついた窓、人の住ふ家を表示する只一つの閃きだに認められなかつた。光りの地上に無きは天上と同一であつた。一個の洋燈も地にな

く、一個の星も天になかつた。灣内の大きな潮流は、其處に不意に高まつた。風が此水層を案じた。双楫船は未だ灣内にあつて逃げてゆくのが見られた。

是は鉛色の水面を滑り行く一個の黒三角であつた。

遙に、水原は無氣味な巨大な明暗をつくつてゴチャ／＼に動揺してゐた。マツウチーナは迅に駛つてゐた。それは一分毎に小さくなつた。大洋の沖遙にの去る程迅速なものは世にな

突然それは船首の燈明をつけた。恐らく舟の周圍に落つる暗黒が、船上の者を不安ならしめ、水先案内は、水面に光りを投げるのを必要と思つたのであらう。此光點、遠方から見えた火花は恰も鬼火のやうに、高い、長い黒影に縋り付いてゐた。それは捲り上げられ、海の中央に動いてゐる棺布で、誰か其下で手に星をもつて、さ迷ふてゐると言へたらう。

嵐が空に萌してゐた。小兒はそんなことは意としなかつたが、水夫は戰いた。それは自然が正に人に化せんとし、人は、風が風の神に神祕的に變形をするのを見やうとするかの如く思はれた時の、取越苦勞の瞬間であつた。海は大洋となる。その力は、意志となつて現はれ、物質と思はれるものが、靈となる。それは眼に見えてくる。だから恐いのだ。人間の靈魂は斯く、自然の靈と對立することを恐れる。

笑 人 渾沌が正に出現せんとしてゐた。風は霧を拂ひ去り、雲の舞臺を背後に作つて、吹雪と稱ばるゝ風と浪との恐ろしい一幕の背景を置いた。引き歸す舟は、視界に來た。二三の間は道路は最早無人ではなかつた。刻々、懐む小舟は岬の背後に見える碇泊所に向つて急いだ。或る舟はボートランドの鼻

をめぐり、他のものはセント・アルバンの岬をまはつた。遠くの方から舟は駛つて、入港してゐた。それは避難競走だつた。南には暗黒が濃くなつて、夜色の満ちた雲は海の上に縁取つた。頭上に懸る暴風の重みで、浪は物凄く鎮まつた。確に出帆する時機ではなかつた、けれども双橋船は出帆してゐたのだつた。

舟は岬の南を指した。モウ灣を出て、外洋に居た。突然一陣の風が起つた。マツウチーナはなほ見える處に居たが、恰も颶風を利用すべく決したらしく、總帆をあけた。それは北西だつた、狂暴な風だつた。その重みは直に感じられた。双橋船は、片舷に之を受けて、よろけたが、立ち直つて、外洋へ航路を保つた。是は航海といふよりも逃走たるを示した。陸程に海を恐れず、風に追はれるよりも、人に追はれるのを要心したのだ。

双橋船は段々と小さくなつて、水平線に沈んだ。舟が携へた小さな星は、陰の中に蒼白くなつた。愈々双橋船は夜の暗に混じて、消失した。

今度は永久にだつた。

少くも小兒はそう解したやうだつた。彼は海を詠めるのを止した。彼の眼は、平原、水面、丘陵、生きたものには會ひ難い空間に向けられた、そして彼は此不可知界に向け出發した。

四、疑問

逃げるのに小兒を置き去りにした團體はどんな種類のものだつたか？

それは落ち行くコムブラチコスであつたか？

私共は既にウイリアム第三世がとつた、又議會が通過した、コムブラチコス、或はコムブラベケニヨス或はチエイラスと稱ぶ、男女不良の徒に對する取締方針の詳細を知つた。

世には放逐する法律がある。コムブラチコスに對する法律は、常にコムブラチコスのみならず、一般のあらゆる浮浪者を追拂ふことをきめた。そこで急いで逃げて、乗船となつたのだ。多くの者は、私共が云つたやうにバスク人だつたから、コムブラチコスの大部分はスペインに歸つた。

小兒保護の法律は最初はこんな妙な結果を來した。それで澤山の小兒が遺棄された。

刑法直接の効果は、見付けられた、否寧ろ失はれた小兒の群を生じた。是程分り易いものはない。一人の小兒を携へた、浪との團體は嫌疑をかけられた。只小兒が居るといふ事實だけで、一個の告發となつた。

『あいつらはどうもコムブラチコスのやうだ』之が知事の、検事の、警官の第一の想念であつた。そこで拘引、訊問となる。ホンノ運の悪い、漂泊ふて、物を乞ふ人々は、自分等がそうではないのに、コムブラチコスと見られるのを恐れた。けれども弱い者共は、若しや官憲が間違ひはしまいかと、安心がならなかつた。其他、此浮浪の家族等は普通びく／＼してゐた。コムブラチコスを責めるのは、彼等が他人の小兒を取引したといふにあつた。併し貧困により惹き起された難箱は、時としては、父母が、どれが自分の子であるかを知ることが困難な程だつた。どこでお前等は此子を手に入れたか？それを神から授かつたとして證明するか？小兒は危険になつた。彼等はそれを除いた。邪魔な

しに逃げるのはズツト容易しかつた。両親はそれを棄てることにきめた。森の中、岸の上、井戸の中に。

水溜みづたまりの中に死んでゐる子供が見付かることがあつた。

附け足して置くが、全歐洲は、英國に倣つて、コムブラチコスコムブラチコスを狩り立てた。追蹶熱は高まつた。猫に(鼠が)鈴をつけにいくやうな困難はなかつた。此時から彼等カスを捕へる冀望は、各國警官の間に、反目と競争とを惹起し、アルガシール(スペインの警官)は英國の巡查に劣らず注意してゐた。

二十三年前、人はなほオチーロの門の石に、翻譯し難い銘を讀み得たものである。風儀を案す法文の詞である。併し其中に、小兒の賣り手と、盗人との間に存する微細な相違が、非常に力強く記してある。その銘の一部は 稍粗硬にカステラニア語で次の如くである。

Aqui qued'n las orejas de los comprachicos, Y las bolsitas de los robanos, mientras que se van sillos al trabajo de mar (コムブラチコスの耳朶、盜賊の陰囊は、彼等が有害な職を爲す間は、取り置くべきものとす)「譯者」

即ち漕刑罪人の耳朶や何かを沒收することは妨げなかつたことが分る。そこで總ての浮浪者の一般的の敗亡が惹き起された。彼等は慌てゝ出發した。彼等は顛へて到着した。歐洲の何れの岸にも彼等の落ちてくるのが看守された。子供をつれて舟を出るのが危険であつたから、斯る團體が子供をつれて舟に乗ることは不可能かだつた。

小兒を置き去りにするのは最も容易なわざであつた。

そこで私共がボートランドの寂寥たる陰にちらりと見た小兒は、誰に棄てられたのだつたらうか？ どうしても、コムブラチコスによつてだ。

五、人間發明の木

夕方の七時頃だつたらう。風は今ないできた。けれども烈しく吹き戻す微候があつた。小兒はボートランドの最南端の高臺に居た。

ボートランドは半島だ。併し小兒は半島の何たるかを知らなかつた、又ボートランドの名すら辨へなかつた。彼は只一事を知つてゐた。それは人は仆れるまで歩くことが出来るといふことだ。想念が道案内だ、併し彼は想念かんがへをもたなかつた。彼等は彼を其處につれて来て、其處に置き去りにした。彼等と其處。此二つの謎が彼の運命を表示した。彼等は人間だつた。そこは宇宙だつた。彼に取つては、窮天極地、彼が踵をつけた小さな土片つちくれ以外には、憩ふべき土臺が絶對になかつた。彼の跣足に觸れた土は硬く冷たかつた。大きな黄昏の、四方吹きつばなしの世界に、小兒にとつて何があつたか？ 無一物。

彼は此無に向つて進んだ。彼の周圍には、人氣のない曠野があつた。

彼は第一の高野を斜に横切り、次で第二、第三の高野を過ぎた。各高野の端で、小兒は地の裂目に遭過した。傾斜は時としては險しかつたけれど、いつも短かゝつた、高く、禿けたボートランドの平原は重り合つた石板石に類似する。南側は突出した平面磐の下に入り込み、北側は次の者の上に聳え

笑 人

る。是が、小兒が輕捷に上つてゐる時をなしてゐた。始終彼は止まつて、自分に相談するやうだつた。夜は非常に暗くなつてきた。彼の眼界の半徑は縮少した。彼は今は僅かに數歩の前を見るに過ぎなかつた。

突然彼は止つた、瞬時耳を傾けた、そして殆ど分ぬくらゐに、満足の領きを以て、速に回轉し、彼の歩みを、崖に最も近い平原の一端、彼の右方にあたる高みに向つて進めた。高みの上には、霧の裡に一本の樹木のやうな影があつた。小兒はたつた今その方から物音を聞いた。風でもなく、浪でもなく、動物の聲でもなかつた。彼は誰かそこに居たのだと思つた。そして二三歩にして彼は其丘の麓に來た。

事實、誰かが其處に居た。

丘の頂にほんやりとしてゐたものは、今や明瞭と見えた。それは地から直出した大きな腕のやうなものだつた。腕の上端に、下から拇指に支えられた、人指のやうなものが水平に指し示してゐた。腕、拇指及び人指は空に對して四角を描いた。此妙な指と拇指との接合點に一本の線があつて、それから何やら黒い、形のないものが下つてゐた。風に揺ぐ線は、鎖のやうに鳴つた。是が小兒が聞いた音だつた。よく見ると此線は、音を立てるもので、鎖だつた。長圓形の環で出來た鎖であつた。

自然に於て現實を大きく見せる自然の神祕な混合の法則により、場所、時間、霧、哀しい海、遠い水平線の雲が此影に効果を添へて、それを巨大なものに見せた。

鎖につながれた物は、鞘のやうなものだつた。それは小兒のやうにくるまれ、丈は大人のやうだつ

た。その頂邊には一個の圓い塊型があつて、それから鎖が伸びてゐた。鞘は下の方で裂けて、肉のきれが、裂目から外に垂れてゐた。

弱い風が鎖を動かし、垂れたものを柔かに揺がした。受態の塊型は、空間の微かな運動に任せてゐた。それは名狀し難き恐怖を與へるものだつた。總ての物を不均衡ならしめる戰慄が、その面積を模糊たらしめて、一方にその輪廓を保つた。それは一個の定形をもつた暗黒の凝縮であつた。夜はその幽靈の上にも又内部にもあつた。それは幽靈的誇張の餌食であつた。薄暗、昇る月、崖の背後に入る星、空間に漂ふもの、雲、四方からの風は、此の世の虚無の成分にまで透入してそれきり行衛をくりました。風の裡に吊された丸太の一種は遙かの海や空に涵されて、非人格となつた、そして暗黒が、嘗ては一個の人であつた物の此形を完成した。

それは最中現に存在するものではなかつた。

一個の殘骸！之は詞の及ばぬものである。最早存在せないが、なほ固執する。深淵の中にある、なほその外に出る。死を超絶して、恰も不溶解なるが如く再現する——斯る現實と混合した或る定量の不可能がある。それだから名狀し難い。此生物——それは生物だつたらうか？——此黒い證據は一個の殘物だつた、しかも畏怖すべき殘骸だつた。何の殘骸か？先づ自然の、次に社會の。無にして而して

笑 人

全。狂暴な天候は我意を通した。寂寥の深い忘却がそれを取りまいた。それは不可知な機會に、かされた。何でも好きに振舞ふ暗黒に對しては施すべき術がなかつた。それは永久に忍耐であつた。それは

服従した。風と物凄く闘ふ風がそれを襲つた。

幽霊は掠奪にまかされた。それは晒しものになつて打ち果てる恐ろしい暴虐にあつた。それは墓の追放者だつた。讖滅してすらそれには平安がなかつた。夏は埃のうちに仆れ、冬は泥の中に。死は覆面し、墓はその禮讓をもつ。此處には面紗も、禮讓もない、只皮肉な、又是認された腐敗がある。その働を見せびらかすのは死といふものの厚顔である。死は、その工場たる墳墓の外で、その休事をするとき陰の一切の靜寂を侮辱する。

此死者は裸にされてゐたのだつた。剥がれ者を剥ぐのは無慈悲だ。彼の髓は最早骨中にはなかつた。彼の臟腑は最早彼の體內にはなかつた。彼の聲は最早彼の咽喉にはなつた。屍は死が裏返して、空けてしまつたポケットだ。若し彼が嘗て「私」を有つてゐたなら、その「私」は何處にあつたらう。なほ其處にあつたらう。之は思ふも恐ろしい。或る物が鎖につながれた或る物のあたりをうろつく、——人は暗黒のうちにヨリ以上哀しい相貌を想像することが出来るか？

現實は此處の下に成立して、思索の發現を容観ならしめる、又これに憶説が襲ひかゝる不可知の結果となる。推測はその *Compelle intrare* (強制) をもつ。一定の場處を過ぐるに當り、又一定の物體の前に、人は休止せねばならぬ、夢の餌食、されば魂をして其欲する入口を見出さしめよ。不可見のうちに、其處に暗い戸口が僅に開く。誰も、瞑想なしには此死者と會へるものぢやない。

廣大な分離が暗黙のうちに段々彼を毀損していつた。彼は血をもつてゐたがそれは飲まれてしまつた。皮をもつてゐたが喰はれてしまつた、肉をもつてゐたが盜まれてしまつた。何物も彼から何かを

取らずしては過ぎなかつた。十二月は彼から寒さを借りた。夜半は、戰慄を、鐵は錆を、疾病は、傳染毒を、花は、香氣を。彼の分割は一切に對して支拂ふ關稅であつた。嵐に對し、風に對し、露に對し、蛇に對し、鳥に對する屍體の關稅だ。夜の暗黒な連中は皆死者を銃撃した。

彼は實に名狀し難き奇怪な住者——暗黒の住者であつた。彼は平原の上、丘の上に居た、そして又彼は居なかつた。彼は觸知し得られた、しかも消え失せた。暗を一層濃くした一個の影だつた。日が暗黙たる廣漠の裡に消え去つた後、彼はあたりの者と共に凄愴な階和をつくつた。彼が居るだけで、彼は嵐の暗鬱と星の靜寂とを増した。沙漠にある無言は彼に於て凝固した。不可知な運命の漂浪兒として、彼は夜の荒い總ての沈黙につらなつた。彼の神祕に於て、總ての謎の漠たる反響があつた。

彼のまはりには、生命が、そのドン底まで沈んでゆくやうに見えた。確實と、信用とは彼の周圍に減耗するやうだつた。藪や草のそよぎ、荒涼たる憂愁、良心の潜在してゐるらしい配慮が、悲劇的な力を以て、鎖に吊られた彼の黒い影に對する、全風景にしつくりと當てはまつた。地平線に幽霊の出現は、寂寞加重であつた。

彼は一個の看板だつた。宥められぬ風を四方に受けて、彼は頑然としてゐた。不斷の身慄ひが彼を恐怖せしめた。言ふも恐ろしいことは、彼は空間の中點で、何か無限のものが彼に倚りかゝつてゐるやうなことだつた。誰か知らう？恐らく半は見え、且つ無視された人間の正義を超越する彼の平衡であつたらう。彼の葬られずに残ることゝに於て人の復讐と、彼自身の復讐とがあつた。彼は薄暗と荒野の證人であつた。彼は彼自身に於て不安な物質であつた、私共は魂の荒廢した住家たる物質の前に震

ふのだから。死んだ物體が私共を困らせるのは、それが一度は精靈の宿るところであつた筈なからだ。彼は天の法律の爲め地の法律に背いた。人によつて其處に置かれ、彼は其處で神を待った。彼の頭上には雲と浪との漠然たる曲線が交錯して、陰の無限な夢が漂ふた。

誰か知らうぞ此まぼろし幻の後に如何なる不幸な祕密の潜伏したかを？ 虚無に取りまかれた無限は——木も、屋根も、通行人もなく——死人の周圍にあつた。不變が私共の上を覆ふ時、天、淵、生命、墓、及び永却が啓示さるとき、そのとき私共は、萬事は近寄り難く、禁じられ、封緘せられてゐることを感ずる。無限が私共に開けると、背後の門の閉ざるゝるのは眞個恐ろしい。

六、死と夜との間の闘ひ

小兒は此物の前に居て、無言で、怪みながら、目を睜つた。

大人にはそれが紋架であつた。小兒にはそれはまぼろし幻であつた。

大人なら屍を見るところに、子供は幽靈を見た。

又彼はわけが分らなかつた。

暗點の引力は様々である。その丘の上の一つがあつた。小兒は一步進めた、又一步。彼は下りよう／＼と思ひながらも登つていつた。そして、退かう／＼と思ひながら、近寄つた。

大膽に、併し悸きながら、彼は幽靈を測量すべく接近した。

彼が紋架の下に近寄つたとき、彼は見上げて、それを極めた。

幽靈は止まつてゐた。其處此處が光つた。小兒は顔を辨別けた。それは瀝清れいせいが塗つてあつた。毒々しく、粘々して見えた此の假面は夜の陰かげにつれて、其相すがたが變つた。小兒は一個の穴になつた其口一個の穴になつた鼻を欠た。二つの穴となつた其眼を見た。身體は包まれて、大方ナブタリンに浸した粗布の上を繩でグル／＼と巻いてあつたらう。粗布は皺が生えて、裂けてゐた。膝ひざがそれから喰み出してゐた。一個の破れ目から肋骨が見えた。半分は屍體、半分は骸骨であつた。顔は土色だつた。その上を匍つて通つた蛭蟪むしが幾條かの銀線を曳いてゐた。齒はまだ人間だつた、笑ひをもつてゐたから。呼聲の残りがその開いた口に呟くやうに見えた。頬には髪が二三本あつた。首をかしけたところは何か思つてゐるやうだつた。

近頃いくらか手入れがせられた。顔には新にタールが塗られた、粗布から出た肋たもと、膝にも同様に塗られた。足はダラリと垂れ下つた。

眞下の草の上には二つの靴があつたが、それは雨雪うきゆきでとほに臺なしになつてゐた。此靴は死者から落ちたものだつた。

跣足の小兒はその靴に眼をつけた。

愈々吹き募つてゐた風は、時々歇んでは、嵐の近づく豫表を爲した。此二三分間は全然歇んでゐた。屍體は最早揺れなかつた。鎖は鉛垂線の如く不動であつた。

新らしく世に來た者のやうに、又彼の運命の特異な勢力を考えつゝ、惱なやみを聞かうとする又卵の内うちで雛の喙くちばしに似た少年に特有な想念が、自身のうちに起るを感じたにちがひはない。けれども彼の小さ

な意識にあつた一切のことは、たつた今痴呆にまで溶解した。激昂の過度は、餘りに油の乗り過ぎた結果を來して、思想を外にしてしまふ。大人なら自身に疑問を呈したらうが、小兒は自身に何にも與へなかつた。彼は單に詠めた。

タールは其顔を濕つてみせた。瀝青の雫は、嘗て眼であつたところに凝つて、涙の効果を生じた。併し、瀝青の御陰で、死の荒手では、全然拭ひ去られないまでも、明に緩和せられ、最少の腐敗にとまつた。小兒の前なるものは注意を惹くものであつた。人は確に尊いものだつた。彼等は彼を生かして取つて置く氣はなかつたが、殺して取つて置く氣であつた。

絞架は古く、蟲食んでゐた、尤も丈夫ではあつた、そしてモウ永時使用されてゐた。

英國で密賣者にタールを塗るのは何時頃からのことかわからぬ。彼等は海岸に架けられて、瀝青を塗られ、揺れるまゝに抛棄された。一般のみしめだ、タール塗りの標本は最も久きに耐えた。タールは慈悲だつた。新たに之をするのに、彼等は餘りに多くの標本を作るのを借まれた。彼等は岸に沿ふていろ／＼な點に絞架を建てた、丁度今日鹽肉をつくるやうに。架けられた者は提燈の御用をつとめた。彼ののみなりで、彼の仲間たる密商を手引した。密商は沖合遙より絞架を認めた。其處に一個、第一の警告、其一個、第二の警告。それは密商を防がなかつた。けれども社會の秩序とかふものは斯るもので出來上つてゐる。此風習は英國では今世紀の始で終熄した。一八二二年には三人の者が猶ほドヴァ城の前面に架けられてゐるのが見られた。けれども其事の爲めに此屍體を保存して置くことは獨り密商にのみに用ゐられたのではなかつた。英國は盜賊、放火、犯殺人に同様な勅定を拂つた。ポーツ

マスの官有倉庫に放火したチャック・ペーシターは絞罪に處せられ、一七七六年にタールを塗られた。彼をジャン・ス・ルバトルと記載するラベ・コワイエは彼を一七七七年に再び見た。チャック・ペーシターは彼が放火した後には架けられ、時々タールを塗られた。彼の屍體は殆ど十四年間あつた。私は寧ろ生きてゐたと云ふ。それは一七八八年に猶ほ立派に御用を勤めてゐた。併し一七九〇年に、彼等はそれを一個の者に代えるべく餘儀なくされた。埃及人は王の木伊乃を珍重するならひだつた。平民の木伊乃も又用に立つものらしい。

丘の上に大勢力をもつた風は、その一切の雪を掃き去つた。草がその上に再び現れた。其處此處には二三の薊が交つた。丘は海際に生えて、崖の上を碧の布に似せる、短かい、密な草で覆はれてゐた。絞架の下、處刑せられた罪人の足の眞下の局處に、斯る瘡地に例ならぬ、長い、茂つた叢があつた。幾百年の過去、其處に朽ちた死體が、此草の美しさの原因だつた。土は人を喰ふ。

凍愴な恍惚が小兒をとらへた。彼は其處に口を開いて佇んだ。彼が一寸と頭を垂れた時、蟲のやうなものを感じた、大薊が彼の脚を刺した。そこで彼は再び頭を上げた。彼は自分を見下す頭上の顔を見上げた。それは眼がないので、一層しつかりと彼を見据えるやうだつた。それは、光りと暗とを共にもち、頭蓋と齒と、眉隆からも發する、記述し難き、定着をもつた、廣汎な瞥見であつた。死人の頭全體は幻影をもつてゐるやうだ。之が畏ろしい。眼球がない、けれども私共は見てをられると感ずる。長蟲の戦慄。

段々小兒は恐ろしくなり出した。彼は最早動かなかつた。喪神が彼に來つゝあつた。彼は意識を失

ひつゝあることを悟らなかつた。彼は痺れて、生命がないやうになつた。冬は無言で彼を夜に渡した。骨に滲み通りつゝあつた。暗、彼の蛇は、彼の上に匂ひかゝつてきた。雪から来る鮮氣は、潮の如く人をおそふ。小兒は屍體に似た一種の停滞に、徐々と侵されてゐた。彼は睡におちつゝあつた。睡りの掌上には死の指がある。小兒はその手に捕らはれたことを感じた。彼は正に絞架の下に仆れやうとした。彼は自分が立つてゐるやも最早知らなかつた。

終局は常に迫つてゐる、生きるも、生きまいとの間に推移はない、増鍋へ戻る、迂り込むのは何時でも可能である——之が創造たるころの懸崖だ。

次の瞬間小兒と死、素描の生と、廢墟の生とは、同じ頽廢に混淆せられたのだつたらう。

幽霊は知つてゐて、それを好まんやうだつた。突然それが動いた。それが小兒を警戒したと言ふべきであらう。それは再び吹き始めた風であつた。此死人が動くよりも奇怪なものはない。

鎖の瑞の屍體は、見えぬ風に押されて、斜に構へた。左の方の上つて、元へ戻り、右へ上つた。鈍く、哀しい正確さを以て騰つたり降りたりした。氣味悪いシーソーの遊戯。恰の暗のうちに永却の時計の歯子が動くのを見るやうだつた。

是は少時續いた、小兒は死を見て目醒めたやうに感じた。彼の増して行く麻痺により、彼は恐怖のきつぱりした心持を経験した。

鎖は一揺り毎に、凄い正確を以て、軋む音をたてた。軋む音は蟋蟀の鳴く音に似てゐた。

近寄る暴風雨は、突然な一陣の風に前觸せられた。急に輕風が疾風に増加した。屍體はその陰凄な波動を強めた。それは最早揺れなかつた、跳ね上つた。軋んでゐた鎖は、今や喚び出した。その喚びは聞えるやうだつた。若しそれが訴えならば、それは聞き届けられた。地平線の底から、烈しい音が出て來た。

それは翼の音であつた。

一個の事件が出来た。墳墓と寂寥とに特殊な、嵐の事件が起つた。それは一群の大鴉の到着であつた。雲に點綴する、黒色の飛班は霧を貫き、大さを増して近づき來り、混淆し、濃密となり、聲を發して、丘の方に急いだ。それは羅馬軍の近接に似てゐた。暗黒の翼をもつた風共は絞架の上に降りた。小兒は驚いて、後退りした。

群は命令の辭に従ふ。鳥は絞架に聚つた。一羽も屍體の上には居なかつた。鳴く聲は擾々しかつた。彼奴等は仲間同志で語つてゐた。吁鳴る、嘯く、吼えるのは生きてゐる印だ。鴉の啼くは腐敗の満足した承諾である。それに於て諸君は破れた墳墓の寂寞を聞くと想像するだらう。鴉の啼くはそれ自身に夜の如きものがある。

小兒は寒さよりも恐怖に凍えさせられた。

鴉が其時黙つた。うち一羽は屍體に止つた。之が合圖だつた。彼等は一齊にそれに飛びかゝつた。其處に翼の雲があつた、次に彼等の羽は曇られた、そして架つた人は、暗に争ふ、黒い水泡の一簇の下に消え去つた。丁度その時屍體が動いた。それは屍體だつたか？それは風だつたか？それは驚くべ

き跳踊をなした。増大しつゝあつた颯風は、その助けに走せ参じた。幻影は混亂に陥つた。暴風は既に、肺全體を以て吹き、それを捕へ、それを八方に動かした。

それは恐ろしくなつた。それは悶き始めた。絞架の鎖を締にした恐怖すべき傀儡。夜の或るおどけ者は絲を取つて、木伊乃を玩具にしてゐたのだらう。それはひつくり返り、自ら關節を外づすのを悦ぶやうに跳ねまはつた。鳥共は驚いて、飛び去つた。それは恰もその不潔の動物共の爆發のやうだつた。すると又彼奴等は歸つて、闘ひが始まつた。

死人は忌はしい生氣をもつてゐるやうに見えた。風は恰も彼を運び去らうとするかの如くに彼を騰けた。彼は逃げ去らうと、もがき争ふやうに見えた、併し彼の鐵の首環が彼を引き戻した。鳥共は彼の總ての運動に適順した、退却したり、又打撃したり、脅かされるが、自暴になつて。一方には妙な飛翔を試みられ、他方には鎖につながれた人の追跡が行はれた。屍體は風の發作毎に、激動し、飛び立ち、怒り狂つた。それは行き、それは來り、それは騰り、それは落ち、散らばつた鳥群を追ひ戻した。死人は棍棒で、鳥群は埃であつた。猛猛な、攻撃軍はその獲物を放さうとはせず、頑冥になつた。死人は、嘔の束に猛り立ち、彼の盲人滅法な懲罰を倍加した。それは恰も石段にかけた石の投下せるが如くであつた。時には屍體は爪牙や翼で覆はれ、すると又解放された。居なくなるかと思はば、又烈しく歸つてきた。生の後に續く、驚くべき苦痛は過ぎ去つてゐる。鳥共は發狂した。地獄の風穴は正しく斯る鳥に通路を與へるだらう。爪をさし、嘴をさし、啼く、最早肉ならぬものを片々に裂く、絞架の軋み、骸骨の身震ひ、鎖のチン／＼、嵐と喧囂の聲、何の争闘が世に之れ以上に恐ろし

いか？ 魔物が惡魔と闘ふのだ！ 幽霊の戦争だ！

時には嵐がその烈しさを倍加してぐる／＼廻りながら、突然鳥群に向つて、恰もそれを追ひかけようとするかの如く、自分の樞軸の上に廻轉した。彼の齒は鳥共に噛み付かうとしてゐるやうだつた。風は彼の味方で、鎖は彼の敵だつた。それは恰も黒神が亂戰の裡にまじつてゐるやうだつた。嵐は闘つてゐた。死人が向き直ると、鳥群は彼のまはりに螺旋形を描いた。それは旋風裡の渦卷であつた。大きな吼え聲が下から聞えた、それは海だつた。

小兒は此夢魔を見た。突然彼は全身を顫はした。戦慄が彼の骨格を震はした。彼はヨロ／＼として危く仆れるところで、踏みこたへ恰も頭を支えるやうに、兩手で、額を押へた。次にけつそりとして、彼の髪を風に靡かせながら、眼を閉ぢ、大跨に丘を降りていつた。彼自身が一個の幻影で、彼は夜の呵責を後に残して、遁けていつた。

七 ポートランドの北端

彼は呼吸がきれるまで、處定めず、夢中で野に、雪に、空間に走つた。彼の遁走は彼を暖めた。彼はそれを要した。駆けず驚かなければ彼は死んでゐたのだ。

呼吸がきれた時、彼は止まつた。併し彼は振り返らなかつた。彼は鳥が自己を追つかけると想つた、死人が鎖を斷つて、恐らく彼の後を追ふてゐる、又疑ひもなく絞架が丘を降りて、死人の後を追ひかけてゐると想つた。彼は若しや斯處ものが眼につきはしまいかと、後を振り向かなかつた。

稍や呼吸をついたとき、彼は再び遁走を始めた。

事實を記するは小兒の爲すところではない。彼は恐怖に擴大された印象を受けた。併し彼はそれを心で組合せなかつたし、又それについて何等の結論をもつけなかつた。彼は何事だか、何處だか、おかまひなしで走つてゐた。彼は夢みる人のやうに、苦悶し、困難して走つた。彼が置き去りを喰つてから、三時間ばかりの間に、彼の前進はなほ漠としてゐたのが、その目的を變更した。最初は搜索であつたが、それは今遁走となつた。彼は最早飢も寒さも感じなかつた。彼は恐怖を感じた。一つの本能がも一つのに場處を譲つた。遁走が今や彼の全思想であつた。何から遁けるか？あらゆる物から。四方から世は、恐ろしい壁のやうに彼を閉ざすやうに見へた。若し彼が一切から脱れ得るものとしたならば、彼はそう爲たゞらう。けれども小兒は自殺と稱ふる、牢破りを知らなかつた。彼は走りつゞけた。彼は或る不定の時間を走つた。併し恐怖は呼吸の出来ないので歇んだ。

突然、恰も精力と智恵との不意な増加に捕はれたかの如く、彼は止まつた。人は彼が逃げるを恥ぢたと言ふだらう。彼は身を引き延ばし、足を踏んぱり、首を眞直にして、四邊を見廻した、其處には最早丘も、絞架も、鴉の群もなかつた。霧は再び地平線を占領した。小兒は彼の道を辿つた。彼は最早走らずに、歩いた。屍體と遇つたので、彼が大人になつたといふのは、彼を捕らへた難多、混亂した印象を限るものであらう。彼の印象には遙に多いものと、遙に少ないものがあつた。彼の心に生れ立ての幼稚な理解には巨きな困難たる絞架は彼には依然幻影と見えた。けれども困難は打ち克たれて、力が獲られた。そして彼は自らヨリ強く感じた。彼が自身を探ぐる年頃であつたなら、彼はそ

のうちに、幾千の他の瞑想の芽萌を發見したゞらう。けれども小兒の反省は形がない、そして其が感ずるせいゝのところが、彼等には澁晦な、大人が憤怒と稱へる、苦き後味である。舊共は小兒が感情の結局を迅速に承け入れる能力をもつてゐるを附言し度い。痛ましき物を擴充する、遙かな、清え行く境界は彼を通がれる。餘りに複雑な感動に對して、弱さに限度がある爲め小兒は助かるのだ。彼は事實を見て、その傍のものを見るのが少ない。半端な想念により満足せしめられる困難は彼にない。後になつて、經驗がその要領書類を以て來るとき、生の裁判が起るのである。其時彼は、彼の踏を横切つた事實に逢着する。培養せられ、擴張せられた理解が比較をもたらず。幼年の記憶が、情熱の下に再現すること、恰も消した羊皮紙の痕のやうだ。此記憶が論理の基礎を作る、そして小兒の腦隨に幻影であつたものが、大人のそれに於ては推測式となる。併し經驗は種々で、其性質により善とも悪ともなる。善と共にそれは成熟し、悪と共にそれは朽つる。

小兒は四分の一リグ(一リグ)を走つたそして更に四分の一を歩いたとき、突然彼は空腹を感ずるを感じた。丘上の醜惡な幻影を蝕する一個の想念が、力強く彼に起つた——それは彼が食はねばならんといふことだつた。幸に人のうちには、彼を現實に曳き戻すべく用立つ、一個の靈がある。併し何を喰ひ、何處で喰ひ、如何にして喰ふのか？

彼は空虚とは知りつゝ、機械的に彼のポケットに觸つた。がそれから彼は歩度を早めた、何處にゆくとも知らずに。彼はあり得べき陰の方へ急いだ。此宿のあるを信する念は、人のうちに神によつて根ざされた確信である。頼む陰ありと信するは、則ち神を信するのである。

併し其空漠たる雪の野には屋根のやうなものはなかつた。小兒は進んだ、そして曠野は目路の限り、裸であつた。此高臺の上には人家のあつたことが嘗てなかつたのだ。崖下の、岩穴の中にこそ、その身の爲めに建てるべき小屋の木材がないから、遙か昔、武器として石投器を有ち、火を焚く爲めに、乾燥した鳥の糞をもち、ドルチエスターの林中に立つ偶像ハイルを神にもち、ヌゴール人がブリムと稱び、希臘人だインシチス・ブラカモスと稱んだ彼の偽物の灰色珊瑚を取るのを商賣にした原住民が棲つてゐたのだつた。

小兒は出来る限り最善に、彼の路を發見した。運命は十字路をつくつた。徑の任意選擇は危険である。此小さな生物は、早くも疑はしき機會といふものを選ばされた。

彼は進むべく續けた。併し彼の股の筋は鋼で出来てゐるべく見えただけで、彼は疲勞し始めた。平原には足跡がなかつた、若しあつたとしても雪が隠してしまつてゐた。本能的に彼は東に向つてまはつた。鋭い石が彼の踵を傷けた。それが日中であつたなら、彼の血によつて印せられた石竹色の汚點が、雪の上に残した彼の足跡に見られたらう。

彼は何物をも認めなかつた。彼はボートランド平原を南から北へ横断しつゝあつた。そして彼を連れてきた團體は誰にも行き逢はぬやうに、恐らくはそれを東から西に越えたらしい。彼等はどうしても或る漁船乃至は密輸出入船に乗り、ウツグスカム岸の一點から、ボートランドに向け、彼等を待ち合はしてゐた彼の双楫船を見出すべく、帆走つたに違ひない。それからウエストン入江の一つに上陸したとらう、そしてイーストンの入江の一つから再び乗船したのだ。其者共に交叉された方向を小兒

は今躡ふてゐるのだつた。彼は道路を辨別することが難しかつた。

ボートランド平原には、其處此處に、不意に海岸に終り、錐直に海にまで切られた陸片が隆起してゐる。迷ひありく小兒は、此頂邊の一つに達して、其上に佇まつた、廣く見渡したらモット何か見えるだらうと思つて。彼はあたりを見廻した。彼の前に、全地平線は一個の宏大な、鉛色の曇りであつた。彼は之を一心に購めた。そして彼の睜つた眼にはそれが稍不明瞭でなくなつた。其の鉛色の曇りの深みに、東の方陸地の遠い巖の附根に——夜の懸崖に似た一個の動く、蒼白な峻坂の——或る模糊たる黒き裂目、ある漠然たる蒸氣の裂片が、棚引いた。蒼白の曇りは霧で、黒い裂片は煙であつた。人の居る處には煙がある。小兒は其方向に足をむけた。

彼は或る距離をおいて、一つの坂を見た、又その坂の麓、岩の形なき集積のうち、霧にほかされ、砂洲とも、又彼がたつた今横切つた高臺が、恐らく地平線の平原に連なる陸地の突端ともおほしきものを見た。彼はその道を取らねばならぬことが明瞭だつた。

事實彼はボートランドの地峽に着いてゐたのだつた、此處はチエス・ヒルと稱ばれる洪積上の沖積層である。

彼は高原の側面を下り始めた。

下りは困難で、險阻だつた。併しそれは凹凸が少なかつたが、彼が入江を離れて上つたとは反對であつた。上りは毎時も、下りで平均されてゐた。攀ぢ上つた後では、彼は匍ひ下りた。彼は骨折の危険を冒し、下なるほんやりした深味へ墜つる危険を冒して、彼は一つの岩から、他の岩へ跳ねた。彼

が岩や氷の上で滑つたとき、彼自身を救ふには、彼は一握の草、棘のみつしり生えて、彼の指をチカ／＼と刺したはりえにしだを捕へた。時には彼は容易な凹みへ来て、下るとき呼吸を吐いた、すると又もや峻坂で、一步毎に工夫をしなければならなかつた。懸崖を降るにも、一動き毎に一問題を解釋する。人は死の苦痛に對して、巧みでなければならぬ。此問題を小兒は解決した。それは猿がやつただらうところの本能、香具師が賞讀しただらう科學であつた。降りには險峻で長かつた。併し彼はその端に来つゝあつた。

少し宛彼は、チラ／＼と瞥てゐた地峽に上陸すべき時が近寄つた。彼が岩から岩を跳んだり、落ちたりしてゐた其合間々々には、彼は聴く鹿のやうに、耳を聳て、頭を擡げた。彼は角笛の音のやうに、遙か左に、かすかに響き渡る騒音に耳を傾けた。それは喇叭の侵入の如く極から襲到するものが聞える恐るべき朔北の嵐に先だつ、風の騒ぎであつた。同時に小兒は時折、その頬、その眼、その額に、冷たい手を自分の顔に押し付けられたやうな何者かを感じた。是は大きな凍つた雪片で、最初は空間に播かれ、次には渦を巻いて、風雪の襲來を豫報するのであつた。小兒はそれと共に恢復した。最近數時間は海上にあつた風雪は、今や陸上に及んだ。それは徐々と平原を侵掠しつゝあつた。それは北西の風で、ポートランド高原に斜に入り込みつゝあつた。

第二卷 上の双橋船

一、超人間の法則

雪嵐は大洋の祕密の一個である。氣象學上の最も澁晦なものである。あらゆる言葉の意味に於て澁晦である。それは霧と嵐との混淆である。今日でさえも其現象がよく分らない。それ故に多くの遺難がある。

私共は總ての物を風と浪との運動で説明する。けれども空中に於て、風ならぬ一勢力があり、水中に浪ならぬ一勢力がある。空と水とに於ける其兩勢力が微分子流である。空氣も水も殆ど同じ液體で、凝縮、膨脹により相互の成分に入り込む、それ故に呼吸するは則ち飲むことである。微分子流は又液體である。風と浪とは單に衝動である。微分子流は一個の流れである。風は雲中にあつて見え、浪の泡の中にあつて見えない。併しそれは不斷に言ふ「俺は此處に居るぞ」と。「俺は此處に居るぞ」は雷鳴である。

雪嵐は乾いた霧と同様の問題を呈出する。若しスペイン人の *Comilla* 又エチオピア人の *Comilla* が可能であるなら、確にその解決は磁流の精透な觀察によりて得らるべきものである。

微分子流なくしては、事情の集合は謎として残るだらう。嚴格に言へば、一秒二十呎より二百呎の間を上下する風速の變化は、平穩な海上に於て二吋より荒海に於て三十六呎に達する浪の變化の原因となるだらう。嚴格に言へば、水の平面的方向は、嵐に於てさえ、如何にして、三十呎の高さある浪が百呎の長さであり得るかを、私共に理解せしめる。併し何故太平洋の浪は、亞細亞に近くよりも亞米利加に近くで四倍の高さであるだらう？即ち西に於けるよりも東に於て何ぜ高いか？何ぜ大西洋に於ては其反對が事實であるか？何ぜ赤道に於ては海の中央に於て最も高いか？此大洋のうねりの相違は何の爲か？地球の回轉、星辰の引力と結合して磁流のみが説明し得るのである。

此神祕な復合こそ、風向變化の波動を説明するに必要である。例せば、南東から北東をさす西風が、卒然同じ大きな曲線に於て北東から南東に引き返へし、此處に三十六時間内に五百六十度の、驚くべき循環を爲すかといふやうなことだ。一八六七年三月十七日の雪嵐の觸れ出しは斯うであつた。

濠洲の激浪は八十呎の高さに達する。此事實は極に近いことに關係がある。此緯度に於ける嵐は、海底の放電よりも風の混亂に結果することが尠ない。一八六六年大西洋海底電信は、正午から二時まで、二十四時間内に二時間、規則程に間をおいて、一種の間歇熱により、其働きを邪魔された。勢力の或る結合、分離は現象を惹起し、海員の推算に自身を押し付け、破船の憂き目を見せる。今お定りのものが後には數學となる日、私共が例せば、何ぜ私共の地方では、時折熱風が北から、寒風が南からくるかを知らうと求める日、私共が温度の下降は海岸の深さに比例することを理解するの日、地球は二個の軸をもつて——一個は廻轉、其一個は流出——地球の中心に於て互に交錯する、無限に極を

置く一大磁石たることを認める日、生命を堵する人々が生命を科學的に堵するの日、人が研究した確實に安んじて航海するの日、船長が氣象學者たるの日、水先案内が化學者たるの日、其時多くの遭難が避け得られる。海は水なると同じく磁石である。不可知の勢力の大洋が、浪に於て、否寧ろ水面に漂ふ。海中に只水だけを見るのは、海を少しも見てゐるのではない。海は液體の流、逆流であると同程度に於て流動物の干満である。それは恐らく颶風よりも引力により餘計に錯雜せられるだらう。顯微鏡的であるが、毛細管引力により、他の現象のうちに示された分子凝集力は、大洋に於ては無限の壯大に其位置を占める。而して流出の浪は空氣の浪を又水の浪を時としては加へ、時としては逆行せしめる。電氣の法則を知らぬ者は、水の法則をも知らぬ。之は彼の中にあるのだから。ヨリ困難で、ヨリ澁晦な研究のないのは眞實である。それは丁度星學が占星學に近似するやうに、經驗論に近似する。けれども此研究なくしては航海は無い。此事を澤山話したから、次に移らう。

海の最も危険な分子の一は雪嵐である。雪嵐は何よりも磁力的である。極はそれが極光を發する如く、磁力を發する。一方が霧の中にある如く、モ一方は光の中にある。そして雪片の中に於ても、煙の中に於けるが如く、微分子流出は認められる。

嵐は海の神經質な攻撃、熱に浮かされた狂氣である。海には疾病がある。嵐は病氣のやうなものだ。或るものは死病、他のものはさうでない。或るものは遁れ得られる、他のものはさうでない。雪嵐は普通死病と思はれる。マゼランの水先案内の一人、ホアラビホアは之を名付けて「悪魔の傷いた脇腹から出た雲」(und nube del malo lado del diablo)と云つた。シユルコフは「あの嵐に虎疫菌がある」と

云つた。

古のスペインの航海者は此種の嵐が雪を伴ふときを *lanovada* (雪白の意味)と云ひ、霰を伴ふときを *la helada* (霰のあるの意味)と云つた。彼等によれば、雪と共に空から蝙蝠が墜ちた。

雪嵐は、極地の特質である。併し時には私共の氣候に迂り込む、殆どよろけ込むと云つてもいいだらう。空氣のまはり合はせて、エライ荒廢が雜えられる。

マツウチ號は、私共が見たやうに、夜の大冒険に突入した。差通つた嵐により増加された冒險である。船は、悲壯な大膽を以つてその脅威に立ち向つた。併し適當な警戒を與へられてをつたは記憶して置かねばならぬ。

二、私共の最初の輪廓は出來た

双橋船がボートランド灣に居る間は、海は僅よりなかつた。大洋は、よし暗黒なりとも、なほ霧であつて、空は明かだつた。風は此船に影響すること少かつた。双橋船は及ぶ限り懸崖に密接した。それは舟には屏風の役目をした。

此小さなビスカヤ船に十人の者が乗組んだ。三人が船員、七人が乗客、うち二人が婦人だつた。大洋の光で(それは黄昏を日中にした)船上の總てのものは明確と見えた。その外、彼等は今匿れてゐないで、皆安易にしてゐた。各打寛いで、自分／＼の口調で話し、顔を顯はしてゐた。出發は彼等に救出であつた。

群の雜粕な性質はさらけ出された。婦女は何れも妙齡ではなかつた。漂泊の生活、早老を來し、赤貧は皺で出來上がる。彼等は一人はドライボートのバスク人であつた。他の大きな球數をもつたのは、愛蘭士の婦人であつた。彼等は落魄者に普通な冷淡な風をしてゐた。彼等は船に乗つたとき、櫓の下の箱に、互に密接してドカリと腰を据えた。彼等は互に語つた。アイランド人と、バスク人とは親族的語であるとは私共が既に言つた。バスク婦の髪は玉葱と蘿勒とで臭かつた。双橋船の船長はギブスコアのバスク人だつた。一人の水夫はビレニー山北側のバスク人、他は南側の者だつた。別言すれば彼等は、生れは前者は佛蘭西、後者はスペインであつても、共に同じ國民であつたのだ。バスク人は、公けの國といふものを認めない。 *Mi madre se llama montaña* (私の母は山といひます)と、驢馬曳のサラレウスはいつも言つた。二人の婦女と一語に居た五人の男は、一人はランゲトックの佛人、一人はプロヴァンスの佛人、一人はゼノアル、一人は老人で、廣縁帽を被つたのは日耳曼人らしかつた。五人目の首領はビスカヤ地方のバスク人だつた。此男が、小兒が舟に乗らうとしたとき、板を壁で蹴つて海中に墜したのだ。此男は頑丈づくりで、いろ／＼の飾りでおはれてゐるが、ちつと坐つてをれなかつた。彼は踞んだり、立ち上つたり、絶えず船の一方から他方へ歩いて、恰もやつてしまつたことや、之から起ることを不安さうに議論してゐるやうだつた。

此首領、船長、他の二人の船員、四人のバスク人は皆時にはバスク語、時にはスペイン語、時には佛語を話した。此三國語はビレニー山脈の兩側では普通である。併し一般に話すのには、婦人の外は、彼等の土語の基礎たる佛語のやうなものを話した。此時の佛語は、此人民によつて、北方の子音過多

と、南方の母音過多との中間物として擇ばれるやうにかりかけてゐた。歐洲では佛語は商業語であり、又悪黨連の用語であつた。ロンドンの強盗ギツビイはカルツウシユを解したことは記憶されるだらう。

双橋船は、よい帆船で、迅く駛つてゐた。斯る軽い船には、その手荷物以外に、十人の者は重荷であつた。

船が團體の遁走を助けた事實は、強ちに、船員が共謀者たることを意味しなかつた。船長は一個のワスコングード(ビスカイ地方の意)であつたことと、首領は別な地方の者だつたといふだけで澤山だ。此民族の間では、相互扶助は一個の義務で、一つの例外も容れなかつた。バスク人は私共が言つたやうに、スペイン人でもフランス人でもない。彼はバスク人で、何時でも、何處でもバスク人を助けねばならぬ。之がピレネー式の友情だつた。

船が灣内に居た間は、空は幾分險惡だつたが、落人を不完ならしめる程曇つてはゐなかつた。彼等は走りつゝあつた、彼等は脱れつゝあつた、彼等は馬鹿にはしやいでゐた。一人が笑へば、其一人は歌つた。笑ひは乾いてゐたが、自由であつた、歌は低いが、心配がなかつた。

ランゲドックの男は叫んだ「カウカニヨ」と。是はナルボンヌで満足の最高調を示すものだ。

彼は濱邊に水夫、クラップの南側グルイスの水郷の生れで、海員といふよりも、舟子であつたが、ペーヂの入江の岸に仕事するには馴れてゐた。魚の満ちに曳綱をセント・ルシーの砂濱に引き上げるのは御手のものだつた。彼は赤帽を被る種族の出で、スペイン流に、複雑な十字を描き、山羊皮の

囊から葡萄酒を飲み、剥ぎ落した燻肉を喰ひ、冒瀆すべく跪き、脅嚇以て彼等の守護聖人に懇願した。「大なる聖人よ私が求むるものを授け給へ、然らざれば貴方の頭に石を抛り付くべし。」彼は必要の際には船員によい助であつたらう。船厨に居るプロヴァンス人は、鉄鍋の下に、泥炭の火を吹き起して、羹を煮てゐた。羹は肉の代りに魚を入れたブウチエロの一種で、プロヴァンス人は其中に碗豆、角切りにした鹽肉、蒲桃の莢を入れた Bouillabaise を喰ふ人が olla podrida を喰ふ者に譲歩したのだ。彼の傍には、解どいた一個の食糧品入りの囊があつた。彼は頭上の鉄洋燈に點火した。それは雲母が嵌つて、天井の鉤にかゝつてゐた。その傍にはも一つ鉤があつて、風見のかはせみが懸てあつた。當時は死んだかはせみを鉤にかけて置けば、それが風の吹く方に胸を向けると一般に信じられたのだ。羹を作るかたで、プロヴァンス人は、瓢の口をくはえて、時折 aguardiente (火酒) を嚙み込んだ。それは柳の枝で外覆した、廣い、平太い、紐で腰に下けるやうに柄のついた瓢の一つで、そんなのは腰瓢といふ名がついてゐた。一口ゴツクリとやつては、何を題に詠じたでもない鄙歌の一つを彼は唸つた。「窪んだ道、生垣、藪の隙から野を見れば、春く日あしに伸びてゐる馬や車の影。生垣の上からは、絶えず、乾草をつけた又の端が見えつ、隠れつする」之だけが歌なんだ。

氣の向いたまゝに出發することは安心であるか、或は氣の滅入ることである。皆心が軽々としてゐた、只例の管の穴のない帽子を被つた老人を除いては。

何よりも日耳曼人と見えた此老人は、國籍の消え失せた、不可測の顔をしてゐたけれど、頭が禿けて、しかも其禿が理髪したとらうと思はれる程にきちんとしてゐた。船首の聖母像の前を通る毎に、

帽子を脱ぐので、彼の頭の膨らんだ、老衰の筋が見られた。褐色のドルチェスター色の糸目のすれた、破れた大廣衣が、びたりと身についた外衣を半ば隠し、丁度袈裟のやうに彼の頸まで鈎どめせられてゐた。彼の手はやゝもすれば交叉せられて、習慣的な祈禱の器械的結合をもつた。彼は蒼白とも云ふべき顔色をしてゐた。顔色は何よりも心の反映である、想念に色なしと信ずるは誤りである。彼の顔色は明かに變な心の表面で、或は善に漂ひ行き、或は悪となり、且つ視察者には、人間よりも、以上か又以下である——虎たるべき標準以下か、乃至は人間たるべき標準以上——かの示顯たる、相反の合成した結果であつた。斯髮渾沌とした靈魂もあるものである、その顔には或る不可解なものがあつた。その祕密は抽象にまで達した。諸君は人は推算である悪の前味を知つてゐた、しかもその後味は零であることを感じた。恐らくそれは單に表面にのみあつたらしい冷靜に、二個の石化が印せられてゐた。船手に固有な心の石化と、支那官吏の心に固有な石化である。人は言つてもよかつたらう（何ぜかなれば怪物は完全なるべきその様式をもつものであるから）總てのもの、感情ですら、彼に可能であつたと。學者には皆、屍體の如き或る物がある、此人は學者であつた。一寸と彼を見たゞけで彼の身のこなし、彼の衣服の襞に印じた學問が知れた。それは殆ど顰面に近い多國語の皺寄つた動により打ち消された一個の化石面であつた。彼は又嚴格な人、偽善ならず、皮肉ならず、悲壯な夢想家であつた。罪を憂愁に残す者の一人であつた。彼は大監督の眼によつて和けられた放火犯の眉をもつてゐた。彼の薄い灰色の毛は、彼の蜂谷のあたりで白くなつてゐた。土耳古人の運命主義を以て復合されて、彼のクリスチャンは彼の中に明かに存した。瘦せてバラ／＼となり、白墨石が彼の指を

畸形にした。彼の高い骨格は奇怪であつた。彼は「海脚」をもつてゐた。彼は悠々と甲板を歩るき、決然とした、蒼凄な風貌をして、誰にも眼を呉れなかつた。彼の眼玉は、暗をうかゞい、良心の再現に苦む魂の光りに淡として満ちた。

不斷に首領は、急に又敏捷に、不意に船中を電光形に歩るいて彼に来て、何やらその耳に囁いた。老人の頷いた。それは夜をはかる稻妻のことであつたらう。

三、不安な海上の不安な人々

船上二人の者は思案に耽つた。老人と、船長——船長を此團體の首領と誤つてはならぬ。船長の眼は海に、老人の眼は空にこびり付いた。前者はそれを水から離さず、後者は空を眺めて止まなかつた。船長の心配は海の模様だつた。老人は空を氣遣ふやうだつた。彼は雲の裂目毎に星を注意した。時はまだ日が残つてゐるうちであつたが、薄暗を通して二三の星がかすかにひらめき出し水平線は奇妙であつた。霧がそれを變化させた。薄い霧が陸上に、雲が空に漫つた。

船長は浪の高まるを見て、ボートランド灣を出ない前から、あらゆる悪罵を抛り付けた。彼は岬を通過するまでは、そうするかたでも愚圖々々しなかつた。彼は網具を綿密に検め、下の横橋索がしつかりとしてゐるのに満足し、肋材の横橋索を堅くしめ付けた。あらゆる危険に對して、帆の壓迫をもちこたへようとする者の注意である。

双橋船は船尾より船首が二呎程沈んでゐた。これがその弱點だつた。

船長は常に羅針箱から原基羅針に行き、海岸の物を此二つで測り、それにこたへる風の模様を見た。風は最初は逆風だった、尤も舟はその針路の五點内に入ることは出来なかつたけれども。船長は誰をも信ぜず及ぶ限り屢々自身に舵柄を取つた。風下に流されて、舵が運轉通路によつて影響せられるを防ぐ爲めだった。

眞と假定の航路の差が、船の針路に關するので、双楫船は、それが實際よりか、風に密接してあるやうに見えた。風は正横ではなく舟も總帆ではなかつた。併し人は風が後である時の外、眞にとつてゐる航路を確められなかつた。諸君が水平線の一點に會ふ雲の長いきれを認めるときには、風はその方向であることを知るだらう。併し此夕べ、風は變り易かつた。針は波動した。船長は船の不規則な運動に信用をおかなかつた。彼は注意しつゝも、決然として、風に向けて操縦し、船の動搖に細心の注意を拂つた。事變の發生を恐れて、船長は陸から寄せる嵐を監視し、又何よりも船を一ばいに保つやうに注意した。風向は羅針が小さい爲めに確には分らなかつた。船長の眼は屢々低められ、浪の變化を視察した。

併し一度彼は空の方を見た、そしてオリオン帯の三宿を見出さうとした。此星は三人の博士と呼ばひ、古代スペインの諺に「三人の博士を見る者は救世主を去る遠からず」と言はれてある。

船長の眼は此時、老人が船の他端から唸つた傍白によつて、轉じた『北斗の劍尖すら見えない、紅いだけれどアンタレスも見えない。一つだつて明瞭しない』
他の落人共は平氣だった。

彼等の遁走の最初の喜悅が過ぎ去つてもなほ彼等は一月の海上にあつて、風が身を切るやうに冷たいといふことを憶ひ起さぬわけにいかなかつた。彼等が船室に落着いてゐるのは不可能だった。それは餘りに狭く、餘りに荷物や柵で一ぱいだった。荷物は旅客のもの、柵は船員のものでした。船は快遊船でなく、密輸出入の用であつたから。客は仕方なしに甲板に陣取つた。之は斯る漂泊者が容易に承服する状態である。戶外生活は漂泊者が夜を過すを容易ならしめる。温順な星は彼に親み、寒氣は彼の眠りを助ける、時には殺しまでする。

此夜は既に言つた如く、一個の温順な星もなかつた。

ランゲドック人とゼノア人とは夕餐を待つた、婦女たちの傍に轉がつて、櫓の下で、水夫共が授けてくれた防水布にくるまつてゐた。

老人のみは舳に身動きもせず止まつて、明かに寒さをさとらぬのだった。

船長は舵柄をとりながら、エクスクレーマーと呼ぶ或る亞米利加島のやうな喉音を發した。彼の聲に團の首領は近寄つてきた。すると船長が斯う呼びかけた――

『Etcheo hauna』

此二語は「山の稼ぎ人」の意味で、此老いたカンタブリ人には、注意すべき何かの事に、嚴かな序を爲すものである。

それから船長は老人を、首領に指して、對話がスペイン語で行はれた。それは眞個、その山地の土語なので、正しい方語ではなかつた。その問答は次の如くである。

『Echeico hauna, que este hombre? (山の稼ぎ人、あの人は何だ?)』

『Un hombre (人だ)』

『Que leguas habia? (何語を話すかね?)』

『Todas. (皆)』

『Que cosas sabe? (何を知つてゐるか?)』

『Todas. (何でも)』

『Qual pais? (どの國の者か?)』

『Ningun y todos. (どの國でもない、萬國の者だ)』

『Qual dios? (何の神を信ずるか?)』

『Dios. (神を)』

『Como le llamas. (人はあの者を何といふか?)』

『El tonto. (狂者)』

『Como dices que le llamas? (お前はあれを呼ぶのに何といふか?)』

『El sabio (學者)』

『En vuestra tropa, que esta? (お前達の仲間では何か?)』

『Esta lo que estat. (あれはあれだ)』

『El cefe? (親分?)』

『No. (こゝろ)』

『Pues que esta? (ちやあれは何だ)』

『La alma. (靈魂)』

首領と船長とは各自その瞑想をおふて分れた。それから少時後マツウチーナ號は灣を出た。

今や大海のウネリが来た。水泡の空き間に見えた大洋は、外觀滑かだつた。薄暗を通して見える浪は、朦朧たる輪廓を描いて、稍胆汁の溜りのやうだつた。其處此處には、平らに流れる浪が、雲の裂目や星を、石で割られた硝子板のやうに見せた。此群星の中央に、回轉する穴の中に、燐光が、丁度、鼻の眼玉に光る、消え失せた光の、猫眼的の反射のやうに顫へてゐた。

大膽な游泳者のやうに、マツウチーナ號は危険なシヤムブル淺瀬を通過した。此海盤はポートランド入口の隠れた障害で、門形でなく、演技場形をなした。海の下の砂の演技場は、その腰掛を、浪の循環により丸刻りにされてゐた。舞臺面は圓く均整で、ユングフラウ山(アルプスの最高峰)の高さがあつたが、只水をかぶつてゐた。それは只潜水者を呑み込む幻の如き透明に於て、彼が見る大洋のシリゼーム(古代羅馬の演技場)であつた。シヤムブル淺瀬は斯の如くであつた。其處に水蛇が闘ひ、レビアタン(舊約聖書に出る海中の怪物)が争ふ。物語は傳ふ、巨大な堅坑たる其處なる奥深くには、クラークン、又魚山と稱ばるゝ大きな蜘蛛に捕はれ、沈められた破船があると。斯るものが海の恐ろしい蔭に在る。

此の人には知られぬ幽靈的な實在は表面に於て微かな顫動によつてあらはされる。十九世紀の今日シヤムブル淺瀬は廢類してゐる。近頃出來た防波堤はその白浪の勢で其高い海中の

建築物を倒し、傷けた、恰も一七六年クロワジックに築かれた突堤が十五分時間に潮流の道筋をかへたやうに。併し潮流は永劫である。只永劫は人が想像する以上に人に服従するものである。

四、他と同様でない雲が場面に入る

首領が初め狂者、次に學者と稱んだ老人は今決して船尾樓を去らなかつた。彼等がシャムブル淺瀬を横断して以來、彼の注意は天と水との間に分れた。彼は見上げ、見下ろし、殊に北東に氣を付けた。

船長は水夫に舵をまかせ、後ろの船口に行き、舷門を通つて、船尾樓に上つた。彼は老人に近寄つた、けれども前面からではなかつた。彼は背後に一寸と立ち止り、眩を彼の腰に、手を伸ばし、頭を傾け、眼を見開き、眉を釣つた。微笑が彼の口邊に漂ふた。嘲笑と尊敬との間に躊躇する態度である。老人は、獨り言するのが其癖であるか、それとも、背後に話をすゝむる人ありと知つてか、空間を眺める傍で、獨言を始めた。

『昇登を算定する子午圈は、此世紀は四個の星で劃せられる、極星、カプシオベイアの椅子、アンドローメダの首、天馬宮にあるアルゼニブだが、一つも見えない。』

是等の詞は何れも器械的に、混亂して、彼がそれを發音するを欲しないかのやうに、辛く發音された。それは彼の口から浮み出ると消散した。獨言は靈の内火から放散する煙だ。

船長は「閣下」と呼んで、遮つた。

老人は、すつかり思ひに沈んだといふより寧ろ豊であつたらう、依然詞を續けた。

『餘り星が少く、餘り風が多い。風が斷えず方向を變へる。そして濱に吹き入れて、それから眞直に上つていく。これは陸が海よりも暖かいせいだ。陸の大氣の方が軽いのだ。寒く、濃密な海風がそれに代らうと突進するのだ。此理由から、上の地方では風がいろんな方から陸に向つて吹くのだ。眞と假定との併行線の間針路をとるがいゝ。若し觀測した緯度が目算した緯度よりも、世哩で三分以上或は六十哩で四分以上違はぬ時は、我々は眞の航路に在る』

船長は頭を下けたが、老人は彼を見なかつた。老人はオックスフォード又はギョツチンゲン大學の寬衣に似たものを着て、彼の傲然とした、儼然たる態度を弛めなかつた。彼は浪と人との批評家の如く水面を視察した。彼は浪頭を研究した、併し殆ど彼は、その喧囂裡には彼の順番を求め、浪に何かを教へようとするかの如くであつた。彼のうちには教育家と占卜者とが在つた。彼は深海の託宣のやうだつた。

彼は彼の獨言を續けた、それは恐らく聞いて貰ふ積だつたらう。

『若し私共が舵の代りに車輪をもつてゐたら、私共は競ふたゞらう。一時間十二哩の速度で、車の上二十封度の力を働かせれば、其路に三萬封度の効果を生ずる。又それ以上にもなる。即ち或る時には二重働機で、もつと多く廻轉する。』

船長はも一度頭を下けて『閣下よ』を繰り返して。

老人の眼は彼の上にとまつた。老人は身を動かさずに、頭をめぐらした。

「俺を先生と呼びなさい」

「先生、私は船長です。」

「その通りぢや」と、先生が言つた。

先生、——私共も今後斯う稱ばふ——は會話が好きと見えた。

「船長、貴下は英國の六分儀をお持ちか？」

「いゝえ」

「英場の六分儀がなければ、高度は少しもとれない」

「バスク人は」と、船長が答へた「英國のがない以前に高度をとりました」

「逆戻りしないよう氣を付けなさい。」

「必要の時には私が舵をとります」

「幾節走つてゐるかみたかね？」

「はい」

「何時？」

「只今」

「どういふ風に？」

「測程儀で」

「貴君は三角を觀測する手數を見たのか？」

「はい」

「砂は、確に三十秒で硝子の中を落ちるか？」

「はい」

「砂が西方の球の間で確に耗つていかないか？」

「はい」

「彈子の振動で砂時計を試験したのか？」

「濕した麻繩の巻き束の上から曳き出した綱につるした彈子かつて？えゝさうですとも？」

「綱が伸びぬやうに、蠟を塗つたか？」

「はい」

「六分儀を試したか？」

「砂時計を彈子で試し、測程儀を圓彈でとめました。」

「彈の大きさはどのくらゐか？」

「直徑一呎」

「充分に重いか？」

「軍艦ラ・カッセ・デ・バルグランド號の舊式圓彈です。」

「アルマダ艦隊の艦だな？」

「はい」

『そして乗組兵員六百、水夫五十、砲二十五門を搭載した？』

『破船がそれを知つてをります』

『どうして弾に對する水の抵抗を算定したのかね？』

『日耳曼尺で』

『浪に對して弾砲を支持する綱の抵抗の計算に入れたのか？』

『はい』

『その結果はどうだ？』

『水の抵抗は百七十封度ありました』

『では舟は一時間に四フランス・リーグを走つてゐるのぢやな？』

『三和蘭リーグ』

『併しそりや只船の道と、海の流れる速度との差だらうが？』

『相違ありません』

『何方へ駛つてゐるのか？』

『ロヨロとサン・セバスチャンとの間にある私の知つてゐる入江へ』

『出来るだけ早く、港口の緯度と併行しなさい』

『出来るだけ近くします』

『風と海流なれとに氣を付けなさい。第一のものが第二のものを起すのだ。』

『反逆者トライベレスです』

『悪口しなさんな。海はわかつてゐる。何物も侮辱しなさんな。氣をつけるだけにしなさい』

『氣を付けてゐました、又氣を付けもします。只今は潮が風に逆です。程なくそれが變はると。順

になります』

『海圖はおもちか？』

『いゝえ、此海峡のはありません』

『では手索りで航海してゐるのだね？』

『そうでは有りません。羅針コンパスをもつてゐます』

『羅針コンパスは一方の眼なら、海圖はもう一方の眼だ』

『一つ眼の人は見えます』

『どうして貴下は眞と假の針路コースとの差を測るか？』

『私は原基羅針ももつてゐます、それに推測します』

『推測するものは大變いゝ。確に知るのは、なほ宜しい』

『クリストフは推測したのでした』

『霧がかゝつて、針が定まらぬとき、何方の方に嵐を警戒するか分りはしない。そして推算したのも、修正したのも持たないで終つてしまふ。海圖をもつた驢馬は、その託宣をもつて魔法遣よりも善くやつていく』

『未だ風の中に霧はありません、私は警戒するわけが分りません。』

『舟は海の蜘蛛の網にかゝつた蠅のやうなものだ』

『今のところは風も浪も稍順です』

『白波の上に震へる黒點、之が大洋に浮ぶ人間だ』

『今夜何の過ちもないことを私は断言します』

『貴君は、脱れるのが難しい厄介なことに引羅つちまふだらうと』

『今ぢや萬事好都合です』

先生の眼は北東に定着した。船長は續けた。

『ガスコニー灣に着きさえすれば、私は自分達の安全を保証します。噫、私は其處ではすつかり打寛ろけると云ひませう！私はそれをよく知つてゐます。我がガスコニー灣。それは小さな水盤で、よく荒れます。けれども其處では、私はどの音でも聞き分け、海底の性質を知つてゐます。サンシブリアノ對岸の泥、シサルケの向ふ貝床、ベニヤス岬沖の砂洲、ボンコ・ド・ミミザン沖の丸石、又私は石の色を一々知つてゐます』

船長はフツと止めた。先生はもう聽いてゐなかつた。

先生は北東を見入つた。その氷の面に一個の異様な表情が通り過ぎた。石の面に可能な恐怖のあらゆる苦惱が其處に描かれた。彼の口から「よし」といふ一語が漏れ出た。

彼の眼球はまるで梟の眼のやうに圓くなつてゐたのが、水平線に一點を發見して、痴呆と見開いた。

彼は附け足した。

『これでよし。俺は満足する』

船長は彼を見た。先生は獨言を續けた、といふよりも海底の何者にか語るやうに――

『俺は、左様と云ふのだ』

それから彼は黙つて、彼が見守つてゐるものうへに、新な注意を以て唇一層廣く眼を見開いた。そして言つた。

『遠くから来る、けれどもそれが来るのが確でなくはない』

眼に映じた水平線の弧形と、先生の思想とは、西に向つて相對し、恰も日中の如き、大きな夕映によつて、照らし出された。此弧形は長さは限られ、灰色な水蒸汽の線に圍まれ、一樣に青かつた。併も天色といふよりは寧ろ鉛色をしてゐた。先生は悉皆海の瞑想から歸つて、此大氣中の弧形を指して言つた――

『船長、御覽かね？』

『何を？』

『あれを』

『何を？』

『あすこにあるものを』

『青い局處？ええ』

『ありや何か？』

『天の籠籠』

『天に行く者の爲め、其他の處に行く者の爲め——そりや別なことだ』

老人は此謎めいた詞を特に力を入れて言ひ、恐ろしい顔をしたがそれは暗にかくれて見えなかつた。沈黙が次いだ。船長は此老人に首領が與へた二つの名を憶ひ起して、自身に問ふた。

『此男は狂者か、それとも學者か？』

硬い骨節の立つた老人の指は、恰も看板のやうに、空の曇つた青い局所を、搖ぎもせず指してゐた。

船長は其處を見た。

『本當に』と彼は唸つた『あれは空でなく雲だ』

『青い雲は黒い雲よりも悪い』と、先生が言つた『そして』と、つゞけた『それは雪雲だ』

『La nube de le nieve (雪雲)』と、船長はそれを翻譯して、一層よく理解せんと努めるやうに。

『雪雲とは何か御存じか？』と、先生が訊いた。

『いゝえ』

『今に分る』

船長は彼の注意を水平線に向けた。

雲の觀察を続けながら、彼は彼の齒の間で呟いた。

『嵐一月、濕り一月。一月は風、二月は風、それが私等、アスツウリヤ人の冬です。私等の雨は暖くさえあります。私等は山より外には雪をもちません。そう／＼雪崩に氣をつけるのです。雪崩は狂獸です』

『それから龍巻は怪物ぢや』と、先生は言つて、少し間を置いて、附け加へた『此處にそれが来る』と、彼が続けた『二三の風が一緒になつてゐる。強い風が西から、柔かいやつが東から』

『そのあとの奴は横着者です』と、船長が言つた。

青い雲は大きくなつてきた。

『若し雪が山を迂り落るとき、恐いなら、それが極から降るときはどんなだか考へてみなさい』彼の眼は硝子のやうだつた。雲は彼の顔の上に、同時に又地平線が廣がつた。彼は考へてゐる調子で續けた。

『一分毎に時が近寄る。天の意志が今や示されやうとしてゐる』

船長は自分に問ふた。

『此人は狂者か？』

『船長』と、老人は眼を雲から離さずに言つた『貴下は屢々海峡を横断したか？』

『是が初めです』

先生は青い雲に見入り、海綿が或る一定量の水を吸収し得るやうに、只一定の心配をもつてゐるが、此船長の答に對して、僅かに眉を揺つたきりで、何の感銘をも示さなかつた。

『どうしてそうなのです？』
 『先生、私の普通の航海は愛蘭土です。私はフォンタラビアからブラツクハーボアに又はアチル群島に航海するのです。私は時にはブライキフウル（ウエルスの岸です）に参りますが、此海は少しも存じません』

『それは大事だ。大洋に馴れない人は災難だ。人は海峡チャネルに熟通してをるべき筈だ。海峡チャネルはスフィンクスぢや。淺瀬を氣を付けなさい』

『此處は二十五尋あります』

『西の方五十五尋に出て、東の方の二十尋さえ避けなければならん』

『進むかたで鉛測鉛測します』

『海峡チャネルは普通の海ではない。春潮の時は、水は五十呎に上り、小潮の時には二十五呎になる。私等われらは此處弛緩な水に居るのだ。貴君は驚いてゐるやうだな』

『今夜鉛測鉛測しませう』

『鉛測には停止しなけりやならん。貴君はそれが出来ない』

『何せ出来ません？』

『風の爲めぢや』

『やつてみます』

『狂風メッサイムが近づいてゐる』

『鉛測鉛測しますよ、先生』

『横にだつて出来はしない』

『神を御信じなさい』

『氣を付けて口をききなさい。畏れ多い名を輕々しく言ひなさらな』

『きつと鉛測鉛測してみせます』

『賢くおなり、追付け風だ』

『鉛測をやつてみようと言つてゐるんです私は』

『水の抵抗が、測鉛測鉛の沈下を妨げ、綱が断れてしまふ。噫、貴下は此海面にはそれぢや始めてなんだな？』

『始めてとす』

『よし／＼、ではお聴なさい、船長』

『お聴き』といふ語調は船長がお辭宜を一つした程、命令的だつた。

『先生、よし承はりませう』

『とり舵にして、右舷に轉針針なさい。』

『何を仰しやる？』

『西に針路コースを取りなさい』

『Caramba？（へえ驚きの間投詞）』

『西へ針路を取りなさい』

『出来ません』

『勝手にしなさい。私が言つてゐるのは他の人達の爲めだ。自分のことは俺はどうでもいゝ』

『併し、先生、西に向けますと？』

『左様ぢや、船長』

『先は風がなくなります』

『左様ぢや、船長』

『舟は悪魔のやうに、縦揺しませうよ』

『詞を擇びなさい。左様ぢや、船長』

『船はウネリの上に居ます』

『左様ぢや、船長』

『そしたら櫓が折れませう』

『折れるだらう』

『西に向へと御望みですか？』

『左様』

『出来ません私は』

『それなら、貴下は自分の勘定を海との間で始末をつけなさい』

『風は變る筈です』

『夜中變らない』

『何ぜ？』

『長さ千二百リーグの風だから』

『そんな風に逆航するんですか？出来ません』

『西へ、と俺は言ふのだ』

『やつてはみませうが、どうしたつて、舟は流されますよ』

『それは危険ぢや』

『風は私共を東へやります』

『東へ行きなざるな』

『なぜ？』

『船長、俺等にとつて死の詞が何だか御存じか？』

『否』

『死は東ぢや』

『西へ参りませう』

今度は先生は、廻れ右をして、船長の顔を真正面に見た。そしてその眼を船長の上に据えて、その頭に想念を植え付けるかの如く、徐ろに、一綴の此詞を言つた。

『若し此夜海に出て、鐘の音を俺等が聞いたら、船は失くなるのだ』

『何を仰るのですか？』

先生は答へなかつた。彼の顔色は、一時は動いたが、今は落着いた。彼の眼は空虚になつた。彼は驚いた船長の間を聞いてゐるやうではなかつた。彼は今は自分の獨言に注意を取られてゐた。彼の唇からは、殆ど器械的に、低い呟きのやうに斯麼詞が出た。

『汚れた魂は自分を潔める時が来た』

船長は鼻の方に腮が上る、彼の強い鞏め面をした。

『こいつは學者よりは、狂者だ』と、唸つて、立ち去つた。併し彼は西に向けて舵を取つた。

風と、浪とが立つてきた。

五、アルカノンヌ

霧は、地平線のあらゆる點から、恰も見えない口が風袋を吹き出すのに忙しいかの如く、様々な膨腫で、形を壊された。雲の形は不穩になつた。

青い雲は天際全部に擴がつた。それは今や東にある如く西にもあつた。それは風に逆つて進んだ。

此反抗は風により區々にせられた。

海は最初鱗をもつてゐたのが、今は皮をもつてゐる。此龍は斯の如くであつた。之は最早鰐でなく、蟒蛇だ。此鉛色の汚れた皮は厚ほつたく、くちやく／＼に皺が寄つてゐた。表面には離れ／＼に水

泡が立ち、膿疱のやうで、一ヶ所に寄るかと思れば、直ぐ破れた。泡は癩病患者に似てゐた。

此時だつた、双楫船が、置き去りを喰つた小兒により、その船燈が點れるのが見られたのは、十五分経つてゐた。

船長は先生の眼を捜した。彼は最早船橋に居なかつた。

船長が彼を去るや否や、先生は、その頭布を被つて、稍不自由な身をかゞめて、船室へ這入つた。其處に暖爐近く、滑車の上に彼は腰を据えた。彼は其ポケットから鮫皮のインキ壺とスペイン革の手帳を取り出した。彼は手帳の中から四ツ折にした古い、黄色になつた羊皮紙を抜き出し、その紙を延ばしインキ壺の筒から驚ペンを取り、膝の上の手帳の上に擴け、その羊皮紙の裏に、厨房を照す洋燈をたよりに何やら書き始めた。船の動搖が彼を妨げた。先生は長いこと書いてゐた。

書くうちに先生は、彼のプロヴァンス人が、お加減を試みるかの如く、蒲桃を料理(料理の名)の中に加へる度に、飲んでゐた火酒の瓶に眼を止めた。

先生が此瓶に眼を止めたのは、それが酒瓶であつたが故ではなく、白い枝の中に、赤いのゝ雜つた、柳の枝の編籠に入れてある姓名の故であつた。船室の中は此名を讀み得る程明るかつた。

先生は手をとめて、低聲で、此名を讀んだ。

『アルカノンヌ』

それから厨に話しかけた、

『俺は未だ此瓶に氣が付かんでゐるが、是はアルカノンヌのものぢやな？』

『私共の哀れな仲間アルカノンヌのものです』と厨夫が言つた。先生は續けた。

『アルカノンヌのか、あのフランドルのフラマン人？』

『え』

『牢に入つた？』

『え』

『チャサムの土牢に？』

『それは彼の男の瓶です——と厨夫が言つた——そして彼は私の友達なんです。私は之をあれの遺物と思つてゐます。何時又逢へませうか？え、これは彼の男の腰瓢です』

先生は再びペンを取り、羊皮紙の上に、稍々歪んだ字を、精々と書き始めた。彼は明かに其字のよく分るやうにと苦心してゐるのだつた。舟の動揺と、年齢のせいで震へるので困難しながらも、遂にその思ふところを書き終つた。

それは丁度時機を得たものだつた。突然浪が寄せてきたから。

一つの巨濤が双槽船を襲ふた、そして人々は船が嵐と共に行かれる彼の恐ろしい舞踏のうちに、其船は壊れるかと思つた。

先生は立ち上り、その曲つた膝で巧みに船の動揺に適應しながら、鍋のかゝつてゐるストーブの火で、出来る限り善く其書いた文字を乾かし、元の通り羊皮紙を畳み、手帳に納め、手帳とインキ壺と

をポケットに入れた。

ストーブは双槽船の内部に最も不適當なものではなかつた。それは充分に隔離せられてあつた。一方鍋は動揺してゐた。プロヴァンス人はそれを見守つた。

『魚の蓋』と、彼が言つた。

『魚にやる』と、先生が答へた。それから彼は再び甲板に上つた。

六、彼等は救はると信ずる

いろいろ先から考へてゐるのが増してくるので先生は一種の現狀視察を行つた。傍に居たなら、彼の唇から、こんな詞の漏れるのを聞き得たらう。

『横揺が過ぎる又縦揺が充分でない』

それから先生は、その心の底の働きに呼び戻され、恰も坑夫が坑の中に降りるやうに、再び自分の考へに降りていつた。

此冥想は、聊かも海の觀測を妨げなかつた。海の觀測は一つの恍惚である。

永切に呵れる水の苦惱が始つた。全海面から一種の悲鳴が聞えた。紛亂して、うら悲しい準備が大海に起つた。先生は眼前の事象を觀測して、毫も見脱がさなかつた。併し彼の眼には何の冥想もなかつた。人は地獄を冥想することは出来ない。

未だ半ば潛んではゐるが、既に海面に歴々たる、大きな騒擾は、愈々、風、水蒸汽、浪を強め、焦

たせた。何物も大洋程理論的で、何物もそれ程馬鹿けて見えるものはない。

自家分散はその主權の繼承で、その過多、要素の一である。海は永久に味方となり、敵となる。それは只解くところを結ぶ。その一面は攻撃し、他面は救ふ。浪程に奇怪な幻影はない。誰か交互する洞穴、岬、谷、溶ける湖を描くことが出来るか？如何にして泡の藪、山と夢との混淆を寫し出せるか？記述し難きものは到る處にある。裂けること、撃むこと、心配、不斷の矛盾、光と陰、雲の懸垂、永久に開かれた蒼空の鍵、切れ目のない分解、その狂亂に於て惹起された、葬式の混亂？

風は丁度正北になつた。その狂暴は、英國を去るには、マツウチーナ號の船長が總帆を用ゆべく決心した程都合よく、又必要であつた。双橋船は駈足で、泡を突切つて進んだ。風は眞後より來て、船は浪から浪を狂喜して跳び越した。落人等は、樂み興じた。彼等は拍手して、白濤を、海を、風を、帆を、速い進行を、飛翔を喝采した、皆未來を思つて、先生は彼等に氣が付かぬやうで、依然として夢をつゞけた。

日の痕跡は悉皆消え去つてゐた。此時は小兒が遠くの崖の上で船を見てゐたが、その影を見失つたときだつた。それ迄は彼の眼はしかりと船にコビリ付いて、その上に頼つてゐるやうだつた。その眼は運命の何れの部分を占めるのか？双橋船の影が消え、小兒が最早それを見なくなつた時、小兒は北に去り、船は南に行いた。

一切が夜に呑み込まれた。

七、神聖な恐怖

此方では又、船上の者は、喜び、燥いで、敵地の影が遠ざかり、その背後に小さくなるのを眺めてゐた。段々大洋の暗い環が高まりポートランド、バーベック、タイナム、キムマーブリヂ、マトレーヴア、ほんやりした懸崖の長い條、燈臺の非々立つた海岸が夕暗のうちに小さくなつていつた。

英國は消え失せた。落人等は今や自分等の周圍に只海ばかりを見た。突然夜が恐ろしくなつた。

最早擴がりも、空間もなくなつた。空は黒くなつて、船のまわりに密接してきた。雪がそろ／＼と降り始めた。二三の雪片が現はれた。それは幽靈だつたらう。風の道筋にはその他は何物も見えなかつた。彼等は恰も裏切られたやうに感じた。畏が仕掛てあるやうだつた。

此洞穴の暗黒に於てこそ、私共の氣候に、極の龍卷が現はれるのである。大きな泥雲の、水魔の臟腑にもたとへらるべきやつが、大洋の上に垂れて、處々その鉛色を浪にこびつかせた。此粘り付いたうちの或るものは、穴のあいた囊のやうに、海を吸ひ込み、蒸気を吐き、又それを水で膨らますやうだつた。其處此處に此ボムブは海上に泡の圓い丘を吸ひ上げた。

極の嵐は双橋船を襲ふた。船は之と合ふべく突進した。嵐と船とは互に侮辱し合ふ如くに見えた。最初の狂的震動で、一つの帆も引き上げられず、一つの三角帆も下げられず、一つの縮帆も取り入れられなかつた、突進はそれ程惱亂してゐた。櫓はギイ／＼鳴つて、恐れるやうに反つた。

颶風は我々の半球では左から右へ廻る。丁度時計の針の方向と同一で、其速度は時には一時間六十哩に達する。舟は全然渦巻く勢力の御情にまかされたが、まるで穩かな氣中にあるもの、如く、只船首を大うねむりに向け、風を真正面に受けて、正横をやらぬやうにするより外には別に多く氣を付けることもなく進んだ。此半端な用心は、風が變つて、船の背後から來るときには何の役にも立たなかつたらう。

遠くには底鳴りが醸された。深淵の怒號は何物も之に比すべきものがない、それは宇宙の默的咆哮だ。我等が物質と稱ぶもの、彼の搜し難き有機體、往々そのうちに、我々を戰慄せしめる、或る感知し難き程度の計畫を發見する、不盡の精力の混合、彼の盲目的、暗黒な宇宙、彼の謎めいた牧神の叫び聲、變な叫び聲、長引いて、執拗で、連續して、説話といふ日は足らず、怒號といふは過ぎたりとも稱すべきものを持つ。その叫びが即ち颶風だ。他の聲、歌、旋律、喧騒が、巢から、抱卵から、交尾から、結婚から、家庭から出てくる。此者は一つの喇叭で、それが全である無から出る。他の聲々は宇宙の靈の發想であるが、是は怪物の發想である。それは無形の咆哮だ。それは不定と暗啞な發聲だ。それは悲痛と恐怖に満ちたものだ。此喧囂は人間の上にも人間の外にも話す。それは昇り、降り、波動して、音波を波定し、心にあらゆる驚きを起す。今喇叭の鋭き叫喚を以て、近く耳を勞き、今遠くに驗はしい噴聲で我々を震ふ。眩暈を起す喧囂は詞に似てゐる、又實際一個の語である。それは世界が爲させる努力である。それは驚異の片言である。此悲泣に於て、大きな暗い動悸が耐え忍び、苦み、承服し、跳ね付けることが朦朧に示される。大部分それは無茶を言ふ。それは痼疾の來るに似て

ゐる。又寧ろ、用ゐられた力よりも、傳播された癲癡である。我々は無限に、至高の惡魔が墮ち行、のを見るやうに想像する。時に我等は原素の請求に逢ふ、我等は、創造に於ける渾沌の再生を想ふ。時に之が哀求である。虚無は啼いて、自らを辯護する。それは世界の原因が訴えるやうだ。我々は宇宙が訴訟を提起してゐるやうに想ふ。我々は耳を傾ける、我々は述べられる理由を掴ふとする。大膽に敵味方かと。影の斯る呻吟は推測式の執拗さをもつ。此處に思想に對する大きな困難がある。此處に神話學と多神教存在の理由がある。是等の大きな眩きの恐怖に、搗て、加へて、現はれるがまゝに消え失する超人間的輪廓がある、殆ど明瞭なエウメニデース(溫和を代表する女神)、雲の形になつたフューリーズ(復讐の)の咽喉、殆ど劃然たるブラト(冥府)的獲が附加せられる。此欲泣、此洪笑、此騷擾の詐術、此不可解な問答、此不可知の助けに對する求めに比備すべき戰慄が有り得ない。人はその畏怖すべき呪詛の前に、何を爲すべきかを知らぬ。彼は此ドラコの(非道苛酷の意)吟詠の謎語の前に額くのである。何の潜める意味を彼等はずもつか？何を彼等は意味するか？何を、等は脅かすのか？何を彼等は切求するのか？總ての縛めはとかれたやうに見える。懸崖から懸崖への、空氣より水への、風より浪への、雨より岩への、天心より天低點への、星より泡への怒號、——深淵は響を外づされた——之ぞ惡心との神祕、争鬪により複雑化した彼の喧囂である。

夜の鏡舌はその沈黙程に物凄くない。人はそれに於て不可知の憤怒を感知する。夜は一個の現在だ。何の現在？その事では、我々は夜と暗黒とを區別せねばならぬ。夜には絶對がある。暗黒には多數がある。文

法は、理論であり乍ら、暗黒に單數を許さぬ。夜は一つ、暗黒は多くである。夜の此神祕の霧、是は消散、逃走、崩壊、死亡である。人は最早や地のあるを思はぬ。人は他の實在を感ずる。

無限、無定限の影の裡には或る物、又は或る者を有つ。併し其處に生きてゐるものは我々の死の一部を爲す。世の旅果て、此影が我等に對して光りとなる時、我等の生以上の生が我等を捕へる。一方にそれは我等にふれるやうに見える。暗黒は一個の壓迫だ。夜は我等の魂の上に置かれた手のやうだ。或る怖ろしい、嚴肅な時、我等は憤慕の壁の背後に、我等を侵す者のあるを感ずる。

海上の嵐に於てよりも更に此不可知の接近が逼つてゐるらしく見えることは無い。戰慄すべきものは幻怪なものと結び付く。人間の働の妨害者、舊き「雲伯」は、不定の原素、無限の滅裂、目的のきまらぬ分布した力を、糞ふがまゝの形に、鑄上げる力をそのうちにもつてゐる。その神祕たる嵐は、刻々に、表面の或は眞實の意志の或る不可知な變化を承認し且つ行ふものである。詩人はいつも是を波の出來心と稱し來つた。けれども出來心として斯る事があるのではない。自然に於て我々が出來心と稱び自然に於て機會と稱ぶ不協和な謎は、ちらりと我々に示された法則の斷片である。

八、雪と夜

雪嵐の特點はその暗黒にある。嵐の裡の自然の常習的光景は、地と海とは黒く、空は蒼白いと反對に、空が黒く、洋が白い。泡は下に、暗は上に、地平線は煙で圍まれ、天心は布で覆はれる。天は

喪に垂項れる本寺のやうだが、その本寺には光りがない、浪の頂にはサン・エルモの燈が無く、閃光がなく、燐光がなく、巨大な影の外何にもない。極の旋風は、熱帯の旋風とは異なる。一方あらゆる光りに點火し、他はそれを總て消す。宇宙は悠忽と、一個の窪形の洞穴に化す。夜の中から蒼白な斑點の塵が墜ちて、空と海との間にたゆたふ。雪片の如き是等の斑點は、滑り、彷彿、且つ漂ふ。それは生命狀の運動にまで自身を置くところの經帷衣の涙に似てゐる。狂ひ風が此傳播と混淆する。白にまで崩れる暗、晦冥にまで至る烈しさ、憤慕の可能なあらゆる喧囂、葬籠の下の渦卷、是が雪嵐である。大洋は、不氣味な、不可測の深底の上に作りつ又作りかへしつ、顫動する。

電氣を帯ぶる極風に、雪片は忽然霰變る。そして空氣は抛射物に滿され、水は爆せて、葡萄彈を射る。

雷鳴はない。極流の稻妻が沈黙する。猫に就いて、「彼は誓ふ」と云はれることは、此稻妻に應用せられるだらう。それは半ば開かれた口から出る威嚇で、奇妙に頑固である。雪嵐は、盲目で啞の嵐である。それが過ぎてしまふと、舟も亦履目が見えず、水夫は啞となる。

斯る深淵から免れるのは困難である。

併し破船は絶対に避け難いと信ずるは誤りだ。デスコやバレシンの、黒鯨を捜す漁夫ハーンはコッパーマイン河口、ハドソン、マッケンジー、ヴァンリウバー、ロツス、デユモン、デアヴィル等を發見すべく、ベーリング海峡に向つて進航し、北極に於て皆猛烈極まる颶風に遭ひ、しかもそれを脱れ出た。

笑 人

双橋船が、意氣揚々として、總帆をあけて、乗り込んだのは此種の嵐の裡であつた。ルウ・レから逃れたモントゴメリイが、その軍舟を、撓の力を盡して、ラ・ブイユにセイヌ河を鎖す瀬に突進せしめたとき、彼が同様な横着を示した。

マツウチーナ號は迅速に駛つた。舟は海と十五度の危い角度を時にはとつた程、その帆の爲めに傾斜した。けれども其の巧みに置かれた龍骨は、まるで膠着にしたやうに、水に密着してゐた。龍骨は颯風の把握に抵抗した。船首燈は前方を照した。

雲は風に滿ち、深底の上にその腫脹を引摺り、舟のまわりの海に、愈々しかみ付き、喰ひ入つた。一羽の海鷗も、一羽の信天翁も見えない、雪の外何物もない。浪の野は縮まり、恐ろしくなつた、只三四の巨大な濤のみが見えた。

時折、銅色の素敵な閃光が水平線と天心との晦暝の背後から發した。その突然な朱色の火焰を雲の恐怖を啓し、その深淵の大火災は、一瞬の間、雲の第一階と、渾沌たる天空の遠き境界とに關着するやうで、深淵を配景に描き出した。此火の地に雪片は黒く現はれた。それは竈の前を黒い蝶々飛びまはるに比すべきである。すると一切が消えた。

第一の破裂が濟み、嵐はなほも舟を追撃して、胴廩聲に怒鳴つた。此黒圖つく一段は喧囂の危険な縮少である。此嵐の獨白程恐ろしいものはない。此暗鬱な吟詠は、神祕な闘争の休憩時の用を爲すものらしい、そして不可知に保たれる歩哨の一種たるを示す。

双橋船は猛進をつゞけた。その二つの主帆は特に恐ろしい働を爲してゐた。空と海とはインキで出

笑 人

皆頭をふり向けた。暗は濃く、先生が櫓に凭れてゐるのが、暗の一部を爲してゐるやうだつた、それで彼等はその姿を認め得なかつた。

其聲は再び語つた。

『あれを聴け』

來てゐるやうに、櫓よりも高く走る泡の黒點であつた。刻々水の塊りは、洪水のやうに甲板を洗ひ、舟の一揺れ毎に、錨鎖孔は今右舷に、今左舷に、多くの開いた口のやうに、海にまで泡を吐き戻した。婦女達は船室に逃けてゐた、けれども男子達は甲板に残つた。目も開けられぬ雪は、あたりに渦を巻き、唾する白浪はそれに雜つた。總てが怒り狂つた。

其時片手に帆索をとり、他の手で、頸から襟巻を外つし、之を舷燈の光に打振つて、船尾框に立ち乍ら、快樂に、傲然と、その顔に矜りの色を浮べてゐたが、暗に酔つて、叫んだ。

『俺達は自由だ』

『自由だ、自由だ、自由だ』と、落人共が叫び出した、そして其集團は綱具を掴んで、甲板に上つた。

『萬才』と、首領が叫んだ。

すると仲間が嵐の裡に聲をあけた。

『萬歳！』

丁度此喧騒が暴風に消えた刹那、高い嚴かな聲が、船の他の端から聞えた。

『黙れ！』

一同黙つた。
その時彼等は暗を通して、徐かに鳴る鐘の音を明確はつきりと聞いた。

九、荒るゝ海に任せた務

舵をとつてゐた船長は噴き出した。

『鐘だ、結構。舟は左舷ひだり間切まきりにある。何を鐘が示すのか？左舷に陸があるといふとぢやないか？』
確りと、間をおいた先生の聲が答えた。

『左舷に陸があるんぢやない』

『それでも有るんだ』と、船長が叫んだ。

『いゝえ！』

『でも鐘が陸の方から鳴ります』

『鐘は海から鳴つてゐるのだ』と、先生が言つた。

是等の荒くれ男共もぞつとした。二個、瘦せた女の顔が、恰も妖鬼の祈り出されたやうに仲間の頭上に現はれた。先生は彼の丈高な姿をマストから離して、一步進んだ。夜の暗い底から、そろ／＼と鐘の響がきた。

先生は詞をつゞけた。

『海の中、ボートランドと、チャンネル群島チャンネル諸島の中間に、警戒の浮標が置いてある。その浮標は、鎖

で淺瀬につないである、そして水の上に浮いてゐるのだ。浮標には鐵の柵木が固定して、その柵木のうちに鐘が吊つてある。天氣が悪い時には、海が浮標を揺る、そこで鐘が鳴る。それがお前達の聞くあの鐘ぢや』

先生は、度外れに烈しい風の吹き去るのを許すべく一服して、鐘が再び鳴るのを待つた、それから又話を進めた。

『北西きたにしが吹く時、嵐の中であの鐘を聞けば救たすからない。何ぜかつて？それは斯たうぢや。若し鐘が聞えるなら、それは風が音を持つてくるからぢや。併し風が北西でそしてアリニーの暗礁は東にある。鐘の聞えるのは暗礁と浮標との仲間に私共が居るからだ。私共が追ひやられてゐるのは此暗礁へぢや。私共は浮標の間違まちがつた側に居る。若し正しい側に居るなら、安全な水路で、海に出てゐるのだらう、そこで鐘は聞えなからう。風はその音を私共に傳へないだらう。私共は浮標の近くを、それを知らずに過るだらう。私共は針路を外れてゐる。あの鐘こそ破船の警鐘ぢや。サア氣を付けて御覽！』
先生が語つたとき、鐘は嵐の鎮しずまつた間に、一打々々いちうち徐々そとくと鳴つた。そしてその間歇的な響は老人の詞の眞なるを證明した。それは深淵の弔鐘だつた。

一同は息を殺して聞き入つた。今老人の聲に、今鐘の音に。

一〇、巨大な野蠻人、嵐

そのうち船長は擴音喇叭ノックホーンを取り上げてゐた。

『Carigate tudo Lombres! 皆しつかりやれ、帆脚索を放せ。帆桁に就け、帆を絞れ。西へ進まふ、沖へ出よう。浮標に船首を向け、鐘に向けて進まふ。そこに出口がある。まだ機会がある』
『やつてみなさい』と、先生が言った。

此處で序ながら述べる。此鳴る浮標を、則ち海上の鐘樓は一八〇二年に取り除かれた。非常に年とつた海員で、それを聞いた記憶のある者もある。それは警戒を加へたが、餘りに遅かつた。

船長の命令は行はれた。ランゲドック人は第三の水夫になつた。總員一手となつた。嘗に帆索を引くに満足せず、彼等は帆を絞つた、櫓をつないだ、船窓、艀口をとざした。船は赤裸にされてしまつた。併しあらゆる帆を疊むにつれて、船は一層頼りなくなつた。風と浪との荒廢は増加してきた。海は山と高く奔つた。旋風は劊手が處刑者に馳せかゝるやうに、小舟を撈り始めた。一瞬のうちに凄まじい破碎が來た。頂帆は索ぐるみ吹きちぎれ、帆桁は裂けた、甲板は跡方もなく洗ひ去られ、横櫓索は持ち去られ、櫓は甲板のところから折れ、破船の材木は顛へながらけし飛んだ。

雪嵐に共通な磁流は綱具の破壊を急いだ。それは風の狂暴からと同じく、微分子流の結果からであつた。鎖齒車の多くは、障害を受けて、用を爲さなくなつた。舳から艀に至るまで恐ろしい震動の下にふるふ。一個の浪は羅針と原基とを海中に洗ひ去つた。次のはボートを運び去つた。それは箱のやうにボート架の下に釣つて、奇怪なアスツウリヤの風俗により、槍出に縛り付けてあつたのだ。三度目の白浪は斜桁を捻ぢきつた、四度目の浪は船首像と、信號燈を掃き去つた。只舵のみが残つた。船首燈の代りに、彼等は、填架とタールを被せた大きな丸太を支柱にブラ下けて、點火した。

二つに折れた櫓は、木片や、繩や、プロックや桁などが逆立ち、甲板に邪魔をした。仆れる途端、右舷の船側板に孔をあけた。船長はなほ舵に取り付いて、叫んだ。

『舵がとれるうちは、また機会がある。下の板はまだ丈夫だ。斧々！櫓を海に投げ込め！甲板をあけろ！』

船員も旅客も絶望で興奮した。斧の二三撃でそれは爲された。彼等は側をこえて櫓をつき落した。――甲板はあいた。

『サア』と船長が續けた『繩でもつて、私を舵に縛り付けろ』
彼等は船長を舵柄に縛り付けた。

縛られるかたで、船長は哄つて、叫んだ。

『吹け、老ひた友よ、吼えろ！俺はお前と同じものをマチチャコ岬で見た』
そして確りと身がなると、彼は、危険が醒ます彼の異様な快活を以て舵柄を握つた。

『うまいいけど、若い者！ブグロースの聖母萬歳！西へ進まふ』

巨大な濤が真横から來て、船尾を襲つた。嵐のうちには、常に虎の如き浪、瘳猛で、きびくとし、或る高さに達すると、一時水面に平らに匍ふが、又昇つて、吼え、猛り、困難する舟に乗しかゝり、それを手に手に引き裂いてしまふ。

泡の雪がマツウチーナ號の全船尾樓を覆ふた。

暗と水との混亂の裡に碎ける音が聞えた。

飛沫が晴れた時、船尾が再び現れたとき、船長も、舵柄も姿を匿してゐた。兩個とも浪に没はれたのだつた。

舵柄も、彼等がたつた今縛り付けた人も、颶風の叱聲のうちに浪と共に去つた。仲間の首領は、思ひありけに、暗の中を見入りながら叫んだ。

『*The furias de nosotros* 貴様は俺等を馬鹿にするか』

此挑戦的の叫びに、も一つの叫びがつかつた。

『錨を卸せ！舟を救へ！』

彼等は揚錨機に走つた、そして錨を下した。

双橋船は只一個しか錨をもたぬ。此時錨は海底に達した、併し只失くなるだけのことだつた。海底も又最も岩石だつた。溝は小欵なく荒れてゐた。錨綱は絲のやうに切断した。

その錨は海底に落ちついた。

水切には、錨孔から突き出た綱の端が残つた。

此時からマツウチーナ號は一個の破船となつた。舟は恢復し難き不具となつた。只今まで全帆をあけてゐた船、其速力殆ど畏怖すべきものがあつた船は、今は頼りなくなつた。その總ての發展は不確實で、亂雑に行はれた。舟は受動的だつた、そして海の我儘な怒りに丸太のやうだつた。二三分後には、驚の代りに、用のない不具がある。之は只海に於てのみ見られるものである。

風の咆哮は層一層烈しくなつた。颶風は恐るべき肺をもつ。それは濃密となし難き暗黒に不斷の物

衰しき繼ぎ足しをする。海上の鐘は魔の手に撞かるゝかの如く、自暴に鳴つた。

マツウチーナ號は浪のまにまに塞子の如く漂ふた。舟は最早駛らず、只浮いてゐた。刻々にそれは、死魚の如く仰向に覆らうとするらしく見えた。舷の良好な状態と、完全な防水のみが、舟を災難から救つた。水線以下では、一個の船材も外れなかつた。一つの穴、一つの隙、一つの裂目もなかつた。一滴の水も裂目には入らなかつた。之は僥倖であつた、仰筒は狂ひを生じて用に立たなかつたのだから。

双橋船は、沸える狂瀾の中に、死の如く、前後左右に揺れた。舟は病床最後の惱を受けて、不幸な船員を吐き出さうとしてゐるらしかつた。

彼等は綱具に、破片の木材に、釘に、あらゆる手がりのあるものを掴んで身を支え絶えず耳を澄ました。緩徐な鐘の響は水を越えて微かにただえ來た。それも困つてゐると想はれるのだつた。その鳴るのは、間歇的ながうに過ぎなかつた。聽て此がうかがふが歎んだ。彼等の居るところは？浮標からどれだけ距つてゐるか？鐘の音は彼等を驚かしたが、その沈黙は彼等を恐怖せしめた。北西は恐らく彼等を死の航路に追ひやつたらう。彼等は狂して、愈々募る風に吹きとばされてゐるのを感じた。破船は暗の夜に前進した。目ぼしされて、追ひ立てられる程恐ろしいことはない。彼等は前にも、上にも、下にも深淵を感知した。それは最早起るのではなく、突撃であつた。

突然、雪風の脅かす運命を通じて、赤い光りがあらはれた。

『燈臺！』と、水夫が叫んだ。

一一、カスケット岩

それは如何にもカスケットの燈臺であつた。

第十九世紀の燈臺は高い、圓筒形の、圓錐形に近い石造である、そして光りを放射するに、科學的に造られた機械により取り圍まれる。カスケットの燈臺は特に、三個の燈室を有する三重の白色燈である。此三室は時計仕掛の輪の上に廻轉する。その正確なことは、海上から之を見る番人が、其燈光の間に十歩、その減してゐる間に二十五歩を必ずとれる程である。總ての物は焦點的計畫を基礎として、又八個の廣い、單鏡の並列して、その上と下とに、二個の曲折環の二聯をもつ、八角な太鼓の廻轉を基礎として出来てゐる。此環は一個、代數的齒車になつてゐて、風や浪に打たれぬやうに、一ミリメートルの厚さある硝子の中に入れてある。併し時に此硝子は、大な蛾の如く、此巨大な松明に突進してくる、海鷲の爲めに破こぼれることがある。此器械を圍み、保管する建物と、その中にあるものは、又數理的に出来てゐる。それに關するものは皆平明で、きちんとして、露はで、正確で、整つてゐる。燈臺は數學的のものだ。

第十七世紀に於ては燈臺は、海岸に於ける陸地の裝飾はしらの一種であつた。燈臺の建築は立派で、贅澤だつた。それは露臺、欄干、宿舍、四阿舎などで覆はれた。假面、像、技葉形、渦形、浮彫、大小の模様、銘のうつた牌の外には何物もなかつた。"Spas in bello" (戦に平和あれ)とエッガイストンの燈臺は言つた。我等は、序に、此平和の宣告が常に海の武装解除を爲さなかつたことを言ひ得られる。

ウインスタンレーは、自費で以て、ブリヘス附近の荒地に建てた燈臺にそれを繰り返した。燈臺が竣工すると、彼は之れを嵐が試験すべく、自分其中に立て籠つた。嵐が来て、燈臺を持ち去つた。而してウインスタンレーは其中に居た。斯る餘計な裝飾は風當りを強くした。餘り金光の軍裝をして戰場に出た將軍等が敵火を蒙ると同様である。石にきざんだ氣儘な意匠の外、鐵、銅、木に刻まれた氣儘な意匠も荷つてゐた。鍍細工は刻まれ、木細工は浮き出しになつて、唐草模様、必用な又不必要な各種の器械、轆轤、滑車、分銅、繩梯子、扛重機、鈎鎖などの間々の壁についてゐた。光りの周圍の項には、巧者につくつた鐵細工が大きな鐵の燭臺をもつて、其中には、木脂に浸した細片せんぺいが入れてあつた。之が不斷に點れる心で、如何なる風も之を消さなかつた。上から下まで塔は、いろくの形、色、模様のある旗、幟などが一ぱいにかけつらね、嵐の裡に、きらびやかに火のまはりに翻つた。その深淵の縁に立つた無禮な光りは一つの挑戦であつた、そして難船の人心を鼓舞し、勇氣を起さした。併しカスケットの光は此様式に従つてゐなかつた。

その時分のは、恰もヘンリー第一世が、その「白船」の踪失した後に建てたものと同じ野蠻なものだつた。木の岩角の上鐵格子の下に積み上げ、焔は風に翻つてゐるが如き燈臺であつた。

第十二世紀以降、此燈臺に爲された唯一の改良は、一個の齒の出た振子と、石の重錘とによつて働く一對の輪で、之は一六一〇年に光室に附加せられたものだつた。

此舊式な燈臺に偶然衝突した海鳥の運命は、今日のものに對するよりも悲惨なものだつた。鳥は光りに誘れてそれに衝突し、燈の中に墜ちる。其處で、恰も地獄の中の罪ある魂のやうに悶いてゐるの

が見られた。又時としては櫓の間を脱けて、丁度洋燈の中から半分焼けて出る蠅のやうに、赤く、燻りながら、跛になり、盲目になつて、岩の上に引き返すものもあつた。

充分に綱具をよそふて、容易に水先案内者の操縦にまかされる船に取つては、カスケット燈臺は必要であつた。それは叫ぶ『氣を付ッ！』それは船に淺瀬を警める。それは不能となつた船には單に恐ろしい。萎縮した舷側、嵐の衝動又は、浪の狂起に無抵抗、無防禦な、——鱈ウナギのない魚、翼のない鳥——ものは、只風の心のままにより行かれない。燈臺は終點を示す、それが消失すべく宣告された點を示し、葬式に光を投げる、それは墓場の炬火たきまである。

避け難きの坑かを輝し、免れ難きものに對する警戒とは、何物がよく此悲壯なる嘲りにまさるべき！

一一、岩と顔突き合せ

マツウチーナ號に乗つて困つてゐる哀れな人々は直に、彼等の破船を嘲弄する神祕な嗤笑わらわを理解した。燈臺の出現は先づ彼等の意氣を揚らしめ、次に彼等を壓仆した。何にも爲し得られず、何にも企て得られなかつた。王に就て語られたことは、我等は浪に就いても言へる「我等は彼等の民、我等は彼等の餌食である」。浪の憤りは悉く忍ばねばならぬ。北西ホクシは双橋船をカスケットに追ひやつてゐた。彼等はそれに近寄りつゝあつた。逃避は不可能だつた。彼等は迅速に列礁に向け漂流した。彼等は淺い水に入り込んでゐることを悟つた。若し彼等が鉛測し得たならば、それは二三尋以上を示さなかつた。破船の者共は、峻たけしい岩石の海底の洞窟に吸ひ込まると、鈍い音を聞いた。彼等は、燈臺

の下、花剛の二枚板の間にある暗い裂目の如く、その中には人の骸骨や、船の屍體で満ちてゐると想像される、醜い、荒れた小さな入江の、狭い水路を発見した。それは港の入口と云はふより、寧ろ洞穴の口と見られた。彼等は既に高處に、鐵格子の中に爆ぜる薪の音を聞いた。ほんやりと紫が嵐を照した。雨と霞の衝突が霧の邪魔をした。黒い雲と、紅い焰とが、龍と龍と闘つた。熱灰が、風に飛散して、火から飛んだ。火花が卒然強襲するのが、その前の雲片を追ひ捲くるやうに見えた。岩礁は、最初外形がほかさされたのが、今はクツキリと浮き上つた。峰、冠、背柱をもつ岩の錯雜。劃然と引かれた赤線によりて角と血のやうな光りの流れにより傾斜した平面が出来た。使等がそれに近寄つたとき、列礁の外形は増大して、陰險に聳えた。

婦人の一人、愛蘭土の者は、夢中で神を祈つた。

水先案内であつた船長の代りに、船長であつた首領が残つた。バスク人等は山も海も知つてゐた。彼等は懸崖を恐れず、危難に臨んで發明だつた。

彼等は懸崖に近寄つた。彼等は正に衝突せんとした。突然彼等はカスケットの大きな北岩に、それが彼等から燈臺を遮つた程間近く来た。彼等は岩と、その裏の赤き光りの外何物をも見なかつた。霧中に直立する巨岩は、恰も火の頭巾を被つた、巨大な黒い婦人のやうに見えた。

その悪名高い岩はビブレと稱された。それは列礁の北側に面した。列礁の南側はも一つの峰シタツユギルメに面してゐた。首領はビブレを見て、叫んだ——

『意氣地のある者は、あの岩に綱をかける！泳げるか？』

答がなかつた。

船上の誰もどうして泳ぐか知らなかつた、水夫ですらも、——海員に稀ならぬ不知。

その紐から殆ど解けた梁木が、ダラリと垂れてゐた。首領はそれを両手に抱えて、叫んだ。

『俺に手傳へ！』

彼等は梁木を解いた。彼等は今や實際に必要なものを手に入れた。彼は防禦から攻撃を始めた。

それは怪の心の長めな梁木で、丈夫で、しつかりとして支障としても、攻撃の道具としても——重荷に挺子、塔に装甲車としても——有用なものだつた。

『用意』と、船長が叫んだ。

總勢六人は、マストの株に足を踏張り、舷側に懸崖の鼻に向け槍の如く突き出た横木に、彼等の全重量を乗しかけた。

それは危険な操作であつた。山に衝突するのは實以て大膽である。六人は震動により、水中に跳ね落された。うらう。

嵐との争闘には種々ある——颶風の後は淺瀬、風の後は、岩。窺知し難くもあれば不動でもある。數分間過ぎた。髪を白くするやうな數分間。

岩と舟とは正に衝突せんとした。岩は穩しく其打撃を待ち受けた。

荒ぶる浪は奔入した。それは睨み合ひを終らした。それは舟を下から持ち上げ、石投器が石を振るやうに一揺りそれを揺つた。

『しつかり！』と、首領が叫んだ『先方は只一個の岩、此方は澤山な人間だ』

梁木は止まつた。六人の者はそれにより一體となつた。その鋭い棒は彼等の腋を裂いたが、彼等はそれを感じなかつた。

浪が舟を岩に打ち付けた。

そこで激動が起つた。

それは常に斯る災禍を匿す泡の形ない雲の下に起つた。

○此雲が海に落ちたとき、浪が岩から捲き去つた時、六人の者は甲板を振りまはされた。併しマツウチーナ號は岩と離れた、それに横付けになつて浮いてゐた。梁木は持ち堪えて、船をかへした。海は非常に早く流れて、舟は數分の後には早くもカスケットを後にした。

斯慶事が時には起るものだ。タイ河口でウツト・オヴ・ラルゴ號を救つたのは槍出の正面衝撃であつた。ウインタートン岬の荒磯で、カブテン・ハミルトン指揮下に、蘇國建造のフリゲート型艦に過ぎないローヤル・メーリー號を破船から救つたのは、此挺子を危険なブランノウムの岩に突き當てたことだつた。浪の力は、方向の變換は、容易に行はれるが、或は最も烈しい衝突に於てすら、少くとも可能である程、不意に崩れ得るものだ。嵐の中には獸が居る。颶風は牡牛だ、向き變へさせることが出来る。

破船を避ける全秘訣は正劃から切線に移らんと努むるにある。

梁材が船に與へた用は斯如くであつた。それは撓の仕事を爲し、舵の役目をした。併し一度やつた

操縦は繰り返されない。梁材は海に墜ちた。衝突の震動はそれを人の手が捻ぢ取つた、そしてそれは浪の中に見えずなつた。モ一本の梁材を解くのは、船を解くことであるだらう。

颶風はマツウチーナ號を運び去つた。間もなくカスケットは水平線上の無害の支障として現はれた。斯る状態の下に於ける列礁程、面目を失ふものがない。自然には、可見が不可見に難るその暗い表想のうち、或る動きなき、濛い横顔がある、それは餌を取り逃がした表情のやうに見える。

斯くカスケットは、マツウチーナ號が逃げる間蓋面してゐた。

燈臺は遠くに蒼白くなり、薄れ行き、遂に消滅した。

その消滅に或る哀しいものがあつた。霧の層は今や不確なその光りの上に沈淪した。その光線は水の荒野に死し、焰は浮び、もがき、沈み、遂にその形を失つた。それは一個の溺れる動物であつたらう。火籠は蠟燭の心切りと縮り、次には貝弱い、不確な、ちらめきより他には何物もなくなつた。その周囲には溢れ出た煌きが擴がつた。それは恰も夜の坑内に光りの消ゆるが如くであつた。

脊で脅かした鐘はおし黙つた。脅かした燈臺は溶け去つた。けれども脅さなくなつたのが一層畏ろしくなつた。一個は聲で、他は炬火であつた。彼等の周囲に何かしら人間らしいものがあつた。それは去つた、そして貝深淵より外には何にも残さない。

一三、夜と顔合はせて

又双楫船は影をのせて、不可測の暗に走つてゐた。

マツウチーナ號はカスケットを免れ、浪から浪へと沈みつ浮きつした。休憩、されど渾沌の裡に。風にぐるぐると廻はされ、浪の百千の運動に揺られ、舟は海の狂的波動毎に跳ね返つた。舟は殆ど少しも縦に揺られなかつた。船難の恐ろしい徴候だ。破船は横にばかり揺れる。縦揺は争闘の身震ひである。舵のみが獨り船を風に逆はし得られる。

嵐、殊に雪の隕石に於ては、海と夜とは混淆して、只一抹の煙となつて渦巻く。霧、旋風、疾風、八方の運動、基礎なく、遮掩物なく、停止なく、不斷の再開、一の灣が他の灣に次ぎ、地平線は見えず、背後には稠密な暗黒——斯るもの皆を通して双楫船は漂流した。

カスケットを離れたこと、岩を免れたことは、破船の人々には勝利であつた。併しそれは彼等を知呆に残した勝利であつた。彼等は歡喜の聲を揚げなかつた。海上で、斯る不謹慎は二度とは繰り返されない。鉛垂を投下されない處で、挑戦をなすは、餘りに眞面目な戯れであつただらう。

岩の撃退は不可能の成就であつた。彼等はそれに化石せられた。併し段々彼等は再び希望をもち出した。魂の沈淪し得ざる辰氣樓はこんなものだ！最も危険な場合に於てすら希望の説明し難き日の出がその奥底に見られる事の他に、それ程完き辛慘はあり得ない。此哀れな奴等は、自分は救はれたのだと自分を納得させようとした。それは彼等の唇に出かゝつた。

併し卒然恐ろしいものが暗のうちに、彼等に現れた。

右舷正面に、霧の背景の上に、壘と立つ、模糊とした、直角な塊型、深淵の塔が聳へた。彼等は口をあけてそれを見守つた。

嵐は彼等を其方へ驅り立てた。彼等はそれが何であるかを知つてゐた。それはオルターシユ岩であつた。

一四、オルターシユ岩

列礁が再び現出した。カスケットの後にはオルターシユが来る。嵐は藝術家ではない。獸的に、非常に強力で、それは決してその適用を變更しない。暗黒は消し難い。其詭計と悖戻とは決して歇まない。人間に至つては、其手段の底を程なく傾け盡す。人間は其力を費消するが、深淵はそんなことなし。

破船の人々は彼等の希望のかゝる首領に向つた。彼は、自分の無能を知る者の悲しい苦笑を漏して、只肩を聳かすのみだつた。

洋中の鋪石、オルターシユ岩はそれであつた。オルターシユは全部一塊で、狂瀾の裡に轟りと八十呎の高さに聳えた。浪と船とがそれに當つて碎ける、一個不動の立體、それは直線的平面の峰を、淺の無数な大蛇的曲線中に抛り込んだ。

夜間は、それが巨きな黒い布の皺襞の上に素敵な障害を爲してゐる。嵐の時にはそれは斧の打撃を待つ、それが雷鳴だ。

けれども雪嵐の間には決して雷鳴はない。眞個舟は目匿されてゐるのだ。暗が其周圍に結ばれる。船は斷首臺に上されんとしてゐるやうだ。斷末魔を速に終らせる電撃を受けることは、望みがない。

マツウチーナ號は今水上の丸太に過ぎずも一つの岩に向つたと同様に、此岩に向つて漂流した。一瞬の先には救はれたと思つた船上の哀れな者共は、又苦惱した。彼等が後に残した破壊は、再び彼等に面した。海の底から列礁は再び現はれた。彼等は何物も獲てゐたのではなかつたのだ。

カスケツト岩は千の部屋をもつた鑄型であつた。オルターシユは壁だ。カスケツトで破船すればズタ／＼に裂かれ、オルターシユに衝突すれば粉微塵になる。

併し其處に一個の機會があつた。

オルターシユの如き眞正面には、浪も大砲弾もとべり、うつ。動作は簡單だ。先づ寄せて、次に返す。浪が進み濤が歸る。

斯る場合には生死の問題は斯の如く兼ね合ひだ。若し浪が船を岩に持ち行くなら、船はその上で破れて失はれる。若し濤が、舟の觸れないうちに引くなら、舟は引き戻されて、救はれる。

それは大なる憂慮の一瞬であつた。船上の者共は暗を通して、大きな決定的の浪が彼等を擔ぎ去るのを見た。何處までそれは彼等を曳摺るのだらう？若し浪が舟の上に當れば彼等は岩に持て行かれ、微塵に碎ける。若し舟の下を通れば――

は下を通つた。

彼等は又ホット一息ついた。

けれども戻りは？白濤は彼等をどうするか？白濤は彼等をつれ戻つた。二三分後マツウチーナ號は碎波から脱出した。オルターシユはカスケツトがやつた如くに、彼等の眼から消え去つた。

それは彼等が第二の勝利であつた。双楫船は又もや滅亡に瀕してゐたのを、適當な時機に引き戻した。

一五 魔マジック海シー

一方濃霧は漂流者達の上に降りつゝあつた。彼等は自分の居所を知らず、彼等は一ケーブルの周囲をも見るを得なかつた。電の烈しい嵐が、彼等の頭を吹き曲けたけれど、彼女どもは、再び下に行くを肯じなかつた。併し一人として、絶望ながら、若し破船が免れないならば、大氣の下でそれに遭ひ度いだけのことを冀つた。斯程死に近い時、人の頭上の天井は棺の外廓と見えるのだ。

彼等は今は、短かい、小刻みの海に居た。膨脹した海はその制約を表示する。霧の中ですら、海峡への入口は、浪の煮えかへる外觀によつて知られるものだ。その通りであつた。彼等は不知不覺にオーリニイの岸を辿つてゐたのだから。オルタールユ及びカスツケットの西とオーリニイの東との中間に海は曇み込まれ、減茶々々にされ、そして此不安な位は局所的に嵐の状態を決定した。海は他のものゝやうに苦む、又それが苦むときは、それは、怒りつほい。かの海峡は恐いものだ。

ワウチーナ號はそのうちに居た。

想つてみ給へ、龜の甲羅のハイドハーク又はシャンゼリ程の大きがあつて、その線條は淺瀬でその隆起は岩礁である海底を、海は此破船に用ゐる道具を覆ひ隠してゐる。海底の此背甲の上に裂けた浪が跳び、且つ泡立つ。風ぎの日には、小刻みの海。嵐には渾沌。

破船の者共は、それを自分等に説明することを努めないで此新な併發症を眺めてゐた。突然彼等はそれを理解した。蒼白な遠景は天心に於て廣がった。蒼い色は海に漫つた。鉛色の光りは、烈風の勢が舟を其方に向けて驅り立てる東に延びる長い潮を右舷の方に示した。潮はオーリニイであつた。

その潮は何だつたか？彼等は身顛した。若し一つの聲が彼等に「オーリニイ」と答へたなら、猶更彼等は顛へたであらう。

オーリニイ程、よく人間の近寄るを防いでゐる島はない。水の上にも下にもそれは野蠻な護衛兵で守られてゐる。その外哨はオルターシユだ。西にはブルウ、ソーテリオー、アンフロク、ニアングル、フォンデコクタク、レ・ジュメル、ラ・ダロス、ラクランク、レ・ゼギユイヨン、ル・ウラク、ラ・フォスマリエール、東にはソーテ、オムモー・フロロー、ラ・ブリヌブテ、ラ・ケスリング、クロケリウ、ラ・フウルシユ、ル・ソー、ノワル・ピユト、クウビー、オルピユ。之が岩礁の水魔である。

是等の列礁の一つはラ・ピユ（終局）と、いふ名が付いてゐる。恰も各航海が其處で終るかの如く。此岩の障害は夜と浪とに簡單化せられて、破船の人々には、一條の單なる帯の形に見えた。地平線上の汚點。

破船は無援の理想である。陸に近く、そしてそれに達し得ない。浮んでゐる。併し歎する方向には進めない、堅いと思つたものを踏めば、脆い。死に影さゝれてゐる時、生命に満ちてゐる。空間の俘虜たるべく、天と大洋との間に閉ぢ込めらるべく、無限を土牢の如く頭上に頂き、風と浪との手にとまらぬ要素に圍まるべく、捕はれ、縛され、萎なやされべく——斯る不運の重荷は、我等を痴呆にし、我

等を碎く。我等手の届かぬところに居る敵の嗤笑をそのうちに認ると想ふ。君を確りと捕へるものは鳥を放し、魚を逃がすものである。それは何物とも見えす、又總ての物である。我々は口で波立たせる空気に頼む、我々は手の掌に掬ふ水により頼む。嵐から一盃を汲め、それは苦味一碗に過ぎない。一口嘔吐を催し、一波殲滅だ。砂漠の砂粒、海上の泡は恐ろしい徴候だ。全能はその原子を匿さうと欲しない、それは弱きを力に變じ、無を全に充たす。無限の大海が君を粉碎することは無限の小を以てする。大洋が諸君を溶解するにはその水滴を以てする。諸君は自ら玩具たるを感ずる。玩具、凄い通り名だ！

マツウチーナ號は稍オーリニーの上手に居た。それは好い位置であつた。併し舟は今その北側に流れていつた。それは死であつた。張つた弓が矢を放つやうに、北西は、舟を北岬の方へ射つゝあつたその鼻の沖コルブレの港の少しむかふには、ノルマンの多島海の舟子どもが、サンジュと稱ぶものがある。

サンジュは即ちスウインヂあちこち揺れると同義で一種の激流である。淺瀬に於ける風坑の花冠は浪に於ては渦卷花冠を爲す。一を避けて、他に陥る。シンヂ風に捕はれた船はグル／＼まはされて、或はその船殻を或る鋭い岩に裂かれる、それから破れた船は止まり、其船尾は浪から上り、其船首は深淵に渦をまわし、船尾が沈み、全體が吸ひ込まれる。泡の環は擴がり、漂ひ、浪の上には、只其處此處にブク／＼と下なる塞がれた空氣から立ち昇る泡の外、何物も見られない。

全海峡中最も危険な急潮は、一つは有名なガアドラー砂洲に近く、一つはビニヨネとノワルモン岬

との間のヂエルシイに於て、モ一つはオーリニーである。

地方の水先案内者がマツウチーナ號に乗つてゐたならば、彼等の新たな危険を警戒し得たであらう。非常に危険な場合には、人は第二の視覚を有するものである。泡の高い反轉は風の狂的突撃につれて岸に沿ふて飛んだ。それは急潮の飛ばつちりだつた。多数の小舟はその良に陥た。何が彼女を待つてゐるかを知らずに、彼女は身の毛を逆立てながら、其場所に近づいた。

どうして其岬をまはらうが？之を爲すべき手段はなかつた。

丁度彼等が第一にカスケット、次にオルターシユを見たやうに、彼等は今や、全體險しい岩石より成るオーリニーの岬を見た。それは巨人が一つ／＼立てゐるやうだつた。恐ろしい決闘を爲してゐる一個の群集！

チャリブデとスキラは只二個。カスケット、オルターシユ、オーリニーは三個である。

岩に侵入された地平線の現象は、深淵の壯大な單調を以て繰り返された。大洋の戦は、ホーニーの戦闘と同じき、崇高な重疊語をもつ。

各々の浪は、それに近づくまゝに、怖ろしく霧に擴大されて、岬に二十キュービットを附け加へた距離の迅速に減するのは、それ以上に不可避であつた。彼等は早朝の裙に觸れつゝあつたのだ！彼等捕へる最初の、一掴みは彼等を引摺り込むであらう、次には浪が被せ、萬事休してしまふだらう。

突然双橋船はチタンの舉に打たれたかの如く、突き戻された。浪は船の下から持ち上げた、そしてその泡の蓋に此漂着に、物をのせて、引歸した。マツウチーナ號は斯く押されて、オーリニーから漂

ひ去つた。

船は再び大海に出た。

何處から救ひが来たのか？ 嵐から。嵐の呼吸の方向が變つてゐたのだ。

浪は彼等を相手の一役を終つたので、今度は風の番になつた。彼等はカスケットから自分を救つたオルターシユから去つたのは彼等の友たる浪の力であつた。今はそれが風である。風は突然北から南に變つた。南西が北西を承継いだ。

海流は水に於ける風である。風は空中の海流である。此二勢力は丁度反對してゐた。流れからその餌食を奪ふのが風の考であつた。

洋の突然な幻想は朦朧したものだ。彼等は不斷の恐らくはである。その御慈悲に任されてゐる時には人は、希望もなければ絶望もない。彼等が爲し、又彼等が爲さぬ。大洋は戯れてゐる。荒い野性はヂャン・バルが「巨獣」と稱んだ此廣大、横着な海にある。その爪牙と、迸出に、天鷲絨の前足の柔かい間歇がある。時としては嵐が破船を追ひ立て、又他の時には注意して之を細工する。その犠牲を愛撫してやると言つてもよからう。海は時間をもつ。苦しむ者はそれを悟る。

折々、我々は、此呵責の緩められたのは解放の報知であることを認める。斯る場合は稀だ。是があつても、非常な危険に際會してゐる人は救ひを信ずることが速い。嵐の脅威が聊かでもゆるむので澤山だ。彼等は危険を去つたと自身に語り聞かせる。葬られたと信じた後、彼等は復活を公言する。彼等は未だ手に入れないものを熱狂して抱擁する。悪いめがひつくり返つたことは明かだ。彼等は自ら

満足したといふ。彼等は救はれてゐる彼等は神が去つたと思ふ。大急ぎで、不可知に受取書を差出すのは善くない。

南西は旋風を伴つた。破船の者共は、荒つほい救助者以外には救助者を決してもたなかつた。

マツウチーナ號、まるで死んだ婦人が髪の毛を以て引き摺られるやうに、その残つた綱具で急速に海へと引き出された。それは暴行を代償として、テベリウスが許した自由と似通つた。風はそれが救つた者を手荒く取扱つた、それは烈しい業や、容赦ない救けを與へた。

破船はその救出者の嚴酷の手で、破壊されつゝあつた。

廣口銃に裝填するに足る程の大きな硬い霰が船を打つた。浪の一回轉毎に、此霰は石投戯の如く甲板を轉けまはつた。殆ど水でダブんの甲板をした双橋船は、捲く水と、その飛沫とで形を失ふやうになつた。船上では、人は各自のことより外には氣をつけなかつた。

彼等は、及ぶ限りしつかりと縦り付いた。浪が一つ彼等の上を越す毎に、皆がまだ描つてゐることを驚いた。二三の者は木片で其顔を傷けた。

幸にも絶望は丈夫な手を持つ。恐怖の時、小兒の手は巨人の緊握をもつ。苦惱は婦女の指をとらばさみにする。驚いた娘ツ子はその薔薇色の指を鐵片に殆ど埋める。彼等は互にひつしと寄り合つた。彼等は自身を浪に對して、縦り付き、支えた。けれども一浪毎に持ち去られる恐れがあつた。

突然彼等は解放された。

颶風は歇んだばかりだった。空にはモウ北西も南西もなかつた。烈しい空間の喇叭は沈黙した。龍巻の全部は、何等縮少の警報なしに、恰も下なる灣に垂直に迂り下りたかの如く空から注いだ。誰もそれがどうなつたかを知らなかつた。雪片は霰に代つた。雪は徐に降り出した。最早うねりはなかつた。海は平べつたくなつた。

斯る卒然の推譲は雪嵐の特色である。放電は盡きた。皆静かになつた。普通の嵐になら屢々永い間騒ぎ立つて残る浪すらも。雪嵐ではさうでない。深味には延ばされた怒りはない。疲れきつた勞働者のやうに、それは直に眠むたがる、斯くして殆ど統計の法則を偽りにする、併し海は豫期しない驚異に満つるを知る老ひたる海員を驚かさない。

同一の現象が、非常に稀ではあるが、普通の嵐にも起る。されば我等の時代では一八六七年七月二十七日ヂェルシイに起つた記憶すべき颶風の際、風は十四時間荒れた後、卒然静まつた。二三分の後双橋船は睡つた水の上に浮いてゐた。

同時に（斯る嵐の終局は初めに類似する）彼等は何者をも識別し得なかつた。流星狀の雲の顫動に於て見えてゐたものは皆今や再び眞暗くなつた。蒼白な輪廓は、模糊として霧に冥合した、そして無限の空間は暗鬱は舟のあたりを閉じた。夜の壁、直径が一分毎に縮まる、圓筒内部の、彼の圓い閉込みが、マツウチーナ號を覆ふた。そして踞んでゐる氷山の氣味悪い沈着を以て、危険な吸込をやつてゐた。天心には何物もなかつた。霧の蓋が降りつゝあつた。双橋船は、深淵の壁の底に居る様に見えた。

其壁に海はドロ／＼した鉛の溜であつた。水はちつとも動かぬ。薄氣味悪い不動だ。洋はそれがなは一個の水溜りであるときよりも決してヨリ少く馴れては居らぬ。

總てはシンとして、靜かで盲目だつた。恐らく無生物の沈黙は無口であらう。

最後の眩きは舷側を過ぎ去つた。甲板は微かに側に傾いて水平となつた。或る碎けた木片がゴロゴロとしてゐた。信號燈の代りに彼等がタールに涵した繩を灯したブロックは最早船首に下つてゐなかつた、最早や雫を海に滴らさなかつた雲に残つた微風は音がなかつた。雪は濃密に、柔かく、僅かの傾斜を以て降つた。

浪の泡の音が聞えなかつた。總てに夜の平和があつた。

此の過去のあらゆる焦慮と發作とに續いた休憩は、長いこと揺りまはされた哀れな者共には、言ひ知らぬ慰藉であつた。それは拷問が歇んだやうな氣がした。彼等は自分の周圍に、自分等の上に、彼等が救はるべしとの承諾のやうな或るものをチラリと瞥た。彼等は信頼を恢復した。烈しかつた物皆が今は靜まつてゐる。それは彼等に平和の保障と見えた。彼等の沮喪した心が緊張した。彼等は縋つてゐた綱の端を又は梁材を放し、立ち上り、眞直になり、立つて、歩き、動きまわることが出來た、彼等は名狀し難き程沈着いた。暗の深淵には斯る樂園の面影がある、他の物に對する準備である。彼等が嵐から、泡から、風から、喧囂から救ひ出されたことは明かである。今後總ての機會は彼等に有利である。三四時間すれば日が出るだらう。彼等は通りがりの船に見付けられるだらう。助けられ

るだらう。最も悪いことは過ぎ去つた。彼等は再び生命に入りつゝあつた。肝要なことは嵐の風ぐま
で浮んでゐるやうにすることだつた。彼等は自身に言つた『今度は一切が終つた。』

突然彼等は一切が眞個終つたことを見出した。

水夫の一人、バスク人ガルデアズンといふ者が繩を捜しに船内に降りたが、再び上つて来て云つた。

『内いに充満みだ』

『何が！』と、首領が訊いた。

『水が』と、水夫が答へた。

首領が叫んだ――

『それが何うしたのだ？』

『それは』と、ガルデアズンが答へた『三十分後には私等は沈没するつてことでさあ』

一七 最後の手段

龍骨に穴が一つあいた。水が漏つてゐた。何時それが起つたか誰も知らなかつた。カステットに接
觸したときだつたらうか？オルターシユの沖でだつたらうか？オーリニイの西の浅瀬でまわされたと
きだつたらうか？どうしても其處である岩に觸れたのだつたらう。彼等が風の騒しさに氣付かなかつ
たうちに、或る暗礁に觸れたに相違ない。強直症の発作してゐるとき、誰か針で刺されて感じがあら
いか？

他の水夫、南バスク人で、其名をアヴェマリヤと稱ぶ男も船内に行つて、歸つて來た。

『船の内にニワラスの水が入つてゐる』と、言つた。六呎の深さである。

アヴェ・マリヤは附け加へた――

『四十分経たぬうち俺等は沈む』

何處に漏るところがあるのだつたらうか？彼等はそれを發見し得なかつた。それは船内に満ちてあ
つた水に隠されてゐた。船は何處か水線下、龍骨の前端に穴をあけられてゐたゞらう。それを發見す
るのは不可能であつた。それを塞ぐのは不可能であつた。彼等は血止めの出來ない傷をもつてゐるの
だつた。併し水は急速には上らなかつた。

首領は言つた。

『唧筒を働かせなけりや』

ガルデアズンが答へた。

『唧筒は残つてゐません』

『では』と、首領が言つた『陸に向けやう』

『陸は何處ですか？』

『知らない』

『私も』

『だが何處にある筈だ』

『眞個』

『誰かそつちに舵をとらせやう』と、首領が答へた。

『水先がるません』

『お前前舵につきなさい』

『舵の柄が失くなつてゐます』

『何かで柄をつけな。釘だ！金槌だ！早く何か道具を！』

『大工道具は海に投げ込みました。道具はありません』

『それでも何處かへ行ける。何處だつて關やしない』

『舵が失くなりました』

『ボートは何處にある。それに乗つて漕がふ』

『ボートは失くなりました』

『皆で此破船を漕がふ』

『櫓がありません』

『帆をあけやう』

『帆も櫓もありません』

『竿に綱を張つて、櫓を立て防水布を帆の代りに張らう。此場を切り抜けて、風任せにしよう』

『風はありません』

眞個風は彼等を置いて行つた。嵐は逃げてしまつた。安全と思つた嵐の退去が其實破滅であつた。

南西が吹き續けてゐたなら、多分彼等は猛然或る濱に吹き寄せられ、速力で漏水を打負かしたとらう。恐らく或る幸ひな砂濱に、船の沈没しないうちに運び去つたらう。嵐の速度は彼等を陸に達せしめたとらう。彼等は嵐が静まつたが故に、死ぬところだつた。終りが近づいた。

風、霰、颯風、旋風、是等に打克ち得られる荒い闘士である。嵐は其鎧の弱點に付け込まれる。絶えず開けつ放しで、隙を見せ、滅多打を往々やる暴行に對しては手段がある。併し靜穩には施す術がない。それは擱へどころがない。

風はゴサツク兵の襲撃だ。此方が立ち佇れば敵は分散する。靜穩は剛手の釘抜きだ。

水は悠々、徐々、排し難く、強く船内に昇り、それが昇るにつれて、船は沈んだ。それは非常に徐々と沈んだ。

マツウチーナ號に乗つてゐる者共は最も望まない災厄、手の付けられない災厄が彼等の足下を掘つてゐることを感じた。彼等の運命の靜かに、悲しい確實が彼等を化石した。空氣に微動もなく、浪に小波もない。不動は刻薄である。吸收は黙々として彼等を吸ひ込みつゝあつた。啞の水の深味を通して、怒もなく、慾情もなく、好まず、悟らず、憂もせず、地球の中心は彼等を下方に引きつゝあつた。沈黙した戦慄が彼等をそれ自身に混淆しつゝあつた。それは最早大にあげた海の喉ではなかつた。恐ろしく脅かす風と浪の二重、龍卷の齒を露いたので、白濤の泡立つ食欲でもなかつた。それは恰も哀れな人間共がその下に無限の黒い欠伸をもつてゐるやうだつた。

彼等は死の静寂な淵に沈みつゝあるを感じた。船と水との間の高さは減じつゝあつた。それだけ。彼等は舟の消失を分秒と算へてゐた。それは上げ潮に涵さるゝことは正しく逆であつた。水は彼等の方の上つてくるのではなく、彼等が水の方へ沈みつゝあつた。彼等は自らの墓を掘りつゝあつた。彼等自身の重さが墓掘り人だつた。

彼等は人の法律によらず、物の法律によつて處刑せられた。

雪は降り續いた。破船は今や揺かなかつた。此白い綿花は布となつて、甲板を覆ひ、經帷衣のやうに船をくるんだ。

船内は愈々満ち、愈々深くなつた。漏孔にとゞく方法はなかつた。彼等は燈をともし、手の及ぶ限り穴に三四本の炬火をつけた。ガルデアズンは或る古びた革のバスケットを持って來た、そして彼等はそれを手渡しするより列をつくり、船内の水を汲み出さうとした。併しバスケットは用に立たなかつた。或る物の皮ははぐれて、或るものゝ底には穴があいてゐた。バケツトは途中獨りで空になつた。浸入する水と、海に戻さるゝ水との量の差はお可笑い程だつた。一斗入つて一盃撒い出された。彼等は、その状態を改良し得なかつた。それは吝嗇家の金遣でのやうだつた。百萬を費すに一錢宛つかつてゐる。首領が言つた『船脚を軽くしよう』

嵐の間彼等は甲板の上にあつた二三の箱を一つに縛り付けた。之れはマストの折れに結へられて残つてゐた。彼等は紐を解き、箱を舷側の破れ目から、海の中へ轉がし込んだ。此トランクの二個はバスタ婦人のものだつたので、彼女は嘆息せずには居れなかつた。

『噫！赤い裏の付いた私の新しい外套だ！噫！棒色レースの靴下！噫、五月一日に私がかける銀の耳環！』

甲板は一掃された。それは大變混雑してゐた。そこには我等が覚えてゐる通り、旅客等の荷物、船員の柵などがあつた。彼等は荷物を取つて、それを船外に抛つた。彼等は柵をかついで海へ投げた。斯くして彼等は船室を空にした。提燈、帽子、樽、桶、柵、水樽、肉汁鍋等皆浪にやられた。

彼等は鐵ストローヴの捻を抜きとつた。その中の火は速に消えてゐた。彼等はそれを引き出し、甲板に上げ、舷側に引すり、船の外に抛つた。

彼等は板から手まかせにあらゆるものを海に投げた。鎖、帆綱、綱具。

しよつちう首領は炬火をとつて、吃水を示す船首の數字を照し、破船がどの位沈下したかを檢めてゐた。

一八 最後の手段

破船は、軽くせられたので、一層悠々と沈んだ、併しより少く確實にはなかつた。

彼等の状態の頼りなさは手段がなく、緩和がなかつた。彼等はその最後の手段を竭してしまつた。

『他に何か投げるものはないか？』

皆その在所を忘れてゐた先生が、明窓のうちから立つて言つた。

『ある』

『何ですか』と、首領が訊いた。

先生は答へた——

『俺等の罪をぢや』

彼等は身震した、皆叫び出した——

『アーメン』

先生は蒼白い顔して立ち乍ら、その手を天にあけて行つた——

『跪け』

彼等は逡巡とした、逡巡するは跪くに先だつ。

先生は續けた——

『俺等の罪を海に抛てよう。それは重しになつてゐる。それが船を沈めるぢや。もう身の安全を思ふな。只御救ひを思ひなさい。俺等が最後の罪、就中俺等が犯した、いや寧ろ只今成就した罪——噫俺の話すことを聽いてゐるあはれな人達、俺等を捲き込むものは正しくそれぢや！その背後に、殺人の企圖を置いて來た者共には、深淵を試むるは不敬な所業であるぞ。小兒に對する罪は神に對する罪ぢや。眞個、俺等は止むなく海に出た、がそれは確な滅亡だつた。俺等が罪の影に警められた嵐がやつて來た。併し何にも口惜むな。そこに暗のうちに遠くないところにヴォーヴィルの砂洲とラ・オーグの岬とがある。それが佛蘭西ぢや。俺等に只一つ可能な隠れ家があつた。それはスペインだつた。佛蘭西は英國にも劣らず危ない。俺等は海から救はれて、絞首臺につれて行かれる。絞られるか、溺れ

るか、他には仕方はない。神は俺等に擇んで下さつた。俺等は神に感謝しよう。神は俺等に慕を保障し給はつた。それは清める。兄弟よ、免れ難き手がそのうちにある。たつた今高く彼の小兒を送るに全力を盡したのは俺等だつた。此今の瞬間、俺が話してゐる時、恐らく俺等の頭上に、眼もて俺等を見給ふ裁判官の御前に、俺等を訴えてゐる一個の魂があることを記憶しなさい。此最後の休憩を最も善く利用しよう。若し俺等がなほ爲すことができれば、俺等が爲した悪を出来るだけ償ふより努めよう。若し小兒が俺等の後に生き残るなら、俺等はその扶けとなり。若し彼が死んでゐるなら、その宥しを願はふ。俺等の罪を身から棄てよう。その重しから、俺等の良心を安らかにしよう。俺等の魂が神の御前で嘸み込まれてしまはぬようにしよう、それは畏ろしい破船だ！身體は魚に、魂は惡魔に行く。自身をあはれみなさい。跪けと、俺は言ふぢや。悔改めは決して沈没しない小舟だ。お前達は羅針を失くしたか？お前等は間違つてゐる！お前達は未だ祈禱をもつてゐる』

狼は仔羊となつた——斯る變化は最後の苦痛に起るものだ。虎が十字架を甜める。暗い門が少しく開けるとき、信仰は困難で、不信は不可能である。人により試みらるゝ宗教の様々な概説が不完全であるにもせよ、彼の信仰が形を爲さぬ時すらも、獨斷説の概要が、彼が豫見の外形に適合しない時ですらも、彼の最後の時には魂の悸きがくるものである。生命が終るときに始まるものがある。此考が最後の苦惱に印象する。

人の死に行く苦惱は、一期間の終了である。その死する瞬間彼は、充實した責任の自身の上に重なつてゐるるを感ずる。今まであつたものは、今後あるべきものを復雜にする。過去は歸つて來て、未來

のうちに入る。知れてゐることは、知られぬ事と同じだけ一個の淵を爲す。二個の坑、一つには彼の過ちが満ち、他の一つには期待が満ちて、その反響が交錯する。死に行く人を恐れしめるのは、此二つの淵の混亂である。

彼等は生命の方向への最後の希望の粒を失つた。それ故に彼等は他の方に向つた。彼等の残る機會はその暗い影のうちにあつた。彼等はそれを理解した。それは彼等の上に蒼棲な閃光の如く来て、恐れ再起が續いた。死に行く人に分らぬことは電光に於て認められることの如くである。一切にして、無。即ち一切が盲目だ。死後眼は再び開く、そして閃きであつたものが太陽となる。

彼等は先生に言つた――

「お前様、お前様、お前様より外にはない。俺等はお前様に従ひます。俺等何を致しませうか？言つて下さい」

先生は答へた――

「問題は今未知の懸崖を越して、墓の彼方にある生命の彼岸に着くことにある。一番物を諷つてゐるが故に、俺の危険はお前達よりは大きい。お前達はその負ひ目最も重い者に橋の選擇を任かせるがよい」

彼は附け足した――

「智恵は良心に附加した重しだ」

彼は續けた――

「まだどれだけ時間があるか？」

ガルデアズンは水標を見て、答へた――

「十五分と少し」

「宜しい」と、先生が言つた。

彼が腕を凭せてゐた明窓の低い覆ひは一種のテーブルを爲した。先生はポケットからインキ瓶、ペン、手帳を出して、それから羊皮紙を取つた。それは二三時間前に彼がその裏に二十ばかりのクチャ／＼の曲つた行を書いたものだった。

「燈光を」と、彼が言つた。

籠の飛沫のやうに降つた雪は炬火を消して、モウ只一つだけ残つてゐた。アヴェ・マリヤは挿してあつたところからそれを取り、手にもつて来て、先生の傍に立つた。

先生は手帳をポケットに納めて、ペンと、インキ壺を明窓の覆の上に卸し、羊皮紙を擴げて言つた――

「お聴き！」

その時海の中、低くなり行く此橋、墓の上に震つてゐる板の如きものゝ上で、先生は嚴かに朗讀を始めた、總ての影がそれに耳を傾けるやうに見えた。咀はれた人々は先生の周圍に首を垂れた。炬火の焰は彼等の蒼白さを一層濃厚にした。先生の讀んだのは英語で書いてあつた。時々此の哀れつほい眼付の一つが説明を求めると、先生は、朗讀を止めて、今讀だばかりの一節を佛、西バ

スク或は伊語で繰り返すのであつた。抑へ付けた歎泣と、どき／＼する胸の鼓動とが聞えた。愈々破船は沈降した。

朗讀は終つた。先生は羊皮紙を明窓の上に置きペンを取り上げ、彼が書いた下の端に注意して空けてあつた餘白に署名した。

博士　ゲルハルツス・ゲエステムンデ

それから他の者共に向つて言つた。

『來て、署名しなさい』

バスク婦人が近寄つて、ペンを取り上げ、署名した——アスンシオン。

彼女はペンを愛蘭土婦人に渡した。彼女は文字を知らぬので、十字を描いた。

先生は此十字の傍に書き添へた——バルバラ、ヘブライドス、チルリフ島産。

そしてそのペンを首領に渡した。

首領が署名した——首領、カイズドラ。

ゼノア人は首領の名の下に署名した——ジアンジラーテ

ランゲドツク人は署名した——ジャツクカツールズ、——ナルボンヌ産。

プロヴァンス人は署名した——リュクビエルカブガルウブ——マオンの舟子。

此署名の下に先生は覺書を附け足した——乗組三名のうち、船長は浪に没はれ二名生残せるにより彼等は署名す。

時に先生が言つた——

『カブガルウブ』

『ハイ、此處に居ります』と、プロヴァンス人が答へた。

『お前はアルカノンヌの瓶をもつてゐるか？』

『ハイ』

『それを俺に呉れ』

カブガルウブは火酒の最後の一口を飲み干して、その瓶を先生に渡した。

水は船内に上りつゝあつた。船は段々深く沈んでゐた。船の傾斜した端は、上つて來た濤がサラサラと洗つた。全員甲板の middle に集つた。

先生は炬火の焰でインキを乾かし、羊皮紙を瓶の頸よりも小さく疊んで、それを瓶の中に入れた。彼は塞子を求めた。

『それは何處にあるか知りません』と、カブガルウブが言つた。

『此處に繩のきれがあります』と、ジャツク・カツールズが言つた。

先生は繩のきれで瓶に栓をして、タールを少し求めた。ガルデアズンは行つて、繩の一片で信號燈を消し、繩の入つた器を船尾から取つて、熱いタールの半分入つたそれを先生に持つてきた。

彼等一同が署名した羊皮紙の入つた瓶は、栓をされ、タールを塗られた。

『出來た』と、先生が言つた。

そして彼等一同の口から、微かにブツ／＼と吐くいろ／＼な國語が、憂鬱に漏れ出た。

『Aensi soit-il! (斯くあらせ給へアメンと同義)』

『Mea culpa! (我が罪よ!)』

『Axi sea! (斯くあらせ給への意)』

『Aro rai! (同上——羅馬の方言)』

『Amen!』

それは恰もバベル(太古人類が天に昇らんとして建てた塔、其工事中人の語は分裂して互に不通となつたといふ)の人聲のやうに、天がそれを聞かぬと畏ろしい拒絶を發した時、陰を通して離散した。

先生は罪と愁ひの仲間を去つて、舷側に行つた。其處に立つて、彼は空間を詠めて、底深い聲で言つた——

『Bist du bei mir? (我が傍にありや)』

多分彼は或る幻影に話してゐたのだらう。

破船は沈みつゝあつた。

先生の背後には、一同夢中であつた。祈禱が大きな力を以て彼等を支配した。彼等は頭を下けずに曲つた彼等の懺悔には、心ならずもといふ様子があつた。彼等は風が歇んだとき帆が、ハタメクやうに、逡巡した。がつかさりとした此連中は段々、手を合はせ、頷づいて、いろ／＼な姿勢をとつた、併し一様に謙遜と、神に於ける絶望的信頼とに満ちてゐた。深い處の或る不思議な反映が、彼等の下賤

な容貌を和けるやうに見えた。

先生は彼等の方に向つた。彼の前身が何であつたのにもせよ、此老人は危難の前には偉大であつた。上を包む天性の深い寡黙は、彼を少しも取亂さなかつた。彼は吃驚させられる人ではなかつた。彼の上には沈黙した戦慄の静寂があつた。彼の面貌には神意の威嚴が讀み得られた。此年老いた、思慮深い追放人は、我知らず法王の態度をとつた。

彼は言つた——

『氣を付け』

彼は一寸と海を注意して、附け足した——

『今俺等は死んで行く』

それから炬火をアヴェマリアの手から取り、それを揮つた。

火花が散つて、暗に飛んだ。

それから先生は炬火を海に抛つた。

炬火は消えた。總て光りは消えた。巨大な測り知られぬ陰の外何物も残らなかつた。それは恰も墓を埋めるやうであつた。

暗のうちに先生の言つてゐるのが聞えた——

『祈らう』

一同跪いた。

彼等が跪いたのは最早雪の上ではなく、水の中であつた。

彼等は只モウ二三分の時間をもつのみだつた。

先生は獨り立つてゐた。

雪は彼の上に降つて、白き涙を注ぎかけて黒い背景の上に姿を見せた。彼は陰の物言ふ人形であつた。

先生は十字を身に切り、その聲を張り上げた。彼の脚下には船が沈まんとするに先だつ殆ど悟り難き波動を感じた。

彼は言つた——

『Pater noster qui es in Coelis (天に在す我等の父よ)』

プロヴァンス人が佛語で繰り返した——

『Notre père qui êtes aux cieux.』

アイルランド女はゲリリック語で繰り返した、それはバスク女に通じた。

『Ar nathair ata ar neamh.』

先生が續けた——

『Sanctioetur nomen tuum. (御名の尊ば)』

『Fie vultre nom soit sanctifié.』

『Naomhtar hainm.』

外、何物も残らなかつた。

彼の腕が消え失せた。深い海には油の大樽よりも、大きな襷がなかつた。雪は断えず降つた。

一個の物が浮いて、浪に揺られて、暗に失せた。それはタール塗りの瓶で、柳籠の外覆で浮かされ

『Adveniat regnum tuum. (御國の監ら)』

『Que votre règne arrive.』

『Tigendh do ríoghachd.』

跪いてゐるうち、水は肩に屈いた。先生は續けた——

『Fiat voluntas tua. (御意をな)』

『Que votre volonté soit faite.』と、プロヴァンス人は吃つた。

すると、アイルランドとバスクの姉は叫んだ——

『Deuntar do shoil ar an Halimh.』

『Eicut in coelo, sicut in terra (天に於けるが)と、先生が言つた。』

一つの聲も彼に答へなかつた。

彼は見下した。一同の頭は水の下にあつた。彼は一同を跪いたまゝ溺れるに任せた。

先生は明窓の上に置いてあつた瓶をその右手に取り、頭上に差上げた。

破船は沈みつゝあつた。彼が沈むとき先生は祈禱の残りを呟いた。

一寸の間彼の肩は水上にあつた、それから次には瓶を捧げた、恰もそれを無限に示すが如く見え

てゐたのだつた。

第三卷 陰の小兒

一 チエス・ヒル

嵐は海上に於けるに劣らず、陸上でも烈しかつた。同様な要素の荒い解放は、棄てられた小兒の周圍にも起つた。弱く、罪なき者は、その盲目な力の、無法な暴虐に弄るゝこととなつた。影は辨別がない又無生物はそがもてりと想はるゝ慈悲がない。

陸上には僅かな風しかなかつた。寒氣には何か知ら不動なものがある。霰も降らなかつた。降る雪の稠密さは恐ろしい程だつた。

霰は、打ち、惱め、傷け、窒息せしめ、破碎する。雪は一層いけない。柔かで、刻薄で雪は黙つてその仕事をする。それに觸つてみよそれは溶る。それは純潔だ、恰も偽善者が正直なやうに。雪片が崩雪となり、悪黨が罪人になるのは、此白いやつが徐々に積み重なるからだ。

小兒は霧の中に行進をつゞけた。霧は只柔かな障害物を呈するに止まる。それ故に危険だそれは屈服するが又抵抗する。霧は雪のやうに詭計に富む。斯る危険を伴ふ戦争に於ける不思議な角技者たる

小兒は、坂下に達することが出来て、チエスヒルに着いてゐた。それを知らずして彼は、兩側に海を控えた半島に居た。それだから彼は、霧の中、雪の裡或は暗の中に、右手の灣の深所に陥るか、又は左の外洋の暴れ狂ふ濤のうちに陥る危険なしには道を失ふことが出来なかつた。彼は知らずして此二個の深淵の間を旅行しつゝあつた。

ポートランド地狭は此時代には、妙に凹凸してゐた。今日では過去の形は毫も残らない。ポートランド石を羅馬のセメントに造らうとする考が起つて以來、全岩石は變化に従はされて、その原形は悉く變つた。石灰層、石盤石、迸發岩等は、齒齦から出た齒の如く礫岩の層から、聳えてゐるのが見出される。けれども鶴嘴は、嘗ては鵝の止り處であつた、此逆立つ、鋸齒様の峰を崩し且つ平坦にした。嘗ては鷗が飛び交ひ、高いところを汚す、猜む者のやうに、其處に集まつた頂は今ももう存在しない古いブリテン語で「白鷺」の意味あるゴドルフイと稱ふ高い一本石は求めてもない。夏にはなほ、穿たれ、海綿のやうに穴の明いた其表面に、迷迭香、薄荷、排草香、荳香など、浸せばよい香料の出来る草や、砂に生える、節だらけの草で、莖を織るものなどが蒐められる。けれども灰色の琥珀や、黒い錫、一種は黒、一種は碧、一種は青、第三番目はサルビア色の三通りの石盤石を見出すことは出来ない。狐、狸、川獺、黃神などは身を退いた。一時は羚羊の居たポートランドの崖にも、コーンウォールの末端にも、何物も残らなかつた。彼等はなほ或る入江で鰈や、鯨を漁るけれども、鮭は最早マイケルマスとクリストマスの間にウエイに産卵の爲め溯江しない。最早イリザベス王朝時の如く鷹程の大きさある名の知れぬ。林檎を眞二つに裂くが、その種子しか喰べない、古い鳥を見ない。英語でコ

だ、なせかなれば最も錯覺的であるから。危険を知るのは、警戒に面することだ、それを知らないのは恐ろしい。小兒は眼に見えぬ危険と闘つてゐた。彼は多分幕であつたらしい或る物を通しその道を索つて行つた。

彼は躊躇しなかつた。彼は岩をまわり、罅隙を避け、陷良を推し、斯る障害によつて爲された迂路曲折に従つた。されど彼は進んだ一直線には進まれぬけれど、彼は確とした足どりで歩いた。必要な時には、氣力をこめて引き返した。彼は如何にして流沙の恐ろしい鳥糞から自身を機に應じて離すべきか知つてゐた。彼は雪を振り拂つた、彼は一度ならず水の中に膝まで入つた。彼は水を出ると直ぐに、彼の濕つた膝は夜の烈しい寒氣で凍つた。彼はそのしやちこばつた衣服を着て、急いで歩いた。けれども彼はその水夫服を胸にのせ、乾かし、暖めて置くことを忘れなかつた。彼はなほ飢に苦められた。

深淵の機會は限りがなかつた。あらゆるものがそのうちに於て可能である、救ひですら。見えないでも、その結果は發見される。如何にして其小兒が雪の經帷衣に包まれて、危淵の顎の間の狭い高地に路を迷ひ、どうにかして地峽を横切つたかは、彼自身には解することが出来なかつた。彼は滑り、攀ぢ、轉け、搜し、歩き、奮勵した——それが總てである。之が總ての勝利の秘訣である。半時間足らずの後、彼は地面が上つていくのを感じた。彼は他の濱に着いてゐたのだつた。チエスヒルを去つて、彼は大陸に着いてゐたのだつた。

今日サンフオード・カスツルとスモール・マウス・サンツを連絡する橋は當時はなかつた。それは恐ら

く彼はその智能で手索りながらワイリ・シヂスまで、二度上りをしたのだつたらう、其處には當時イースト・フリートを横切る自然の道路たる砂原の突端があつたのだ。

彼は地峽から救はれた。併し彼は再び嵐と寒さと、夜と面々相對した。

彼の前には今一度眼の及ぶ限り平原の暗い輪廓が展らけた。彼は小徑を求めた、地面を檢めた。卒然彼は身をかがめた。彼は雪の中に、徑と覺ほしき或るものを發見したのだつた。

それは正しく徑であつた。足跡、足跡は雪の白きにくつきりと刻み出されて、明白に見えた。彼はそれを檢めた。それは跣足であつた、大人のにしては餘りに小さく、小兒のにしては餘りに大きな。

それは多分婦人おんなのであつたらう。その向ふにも一つ、次でも一つ、も一つ。足痕は一跨ぎの距離をおいて續いた、そして右へ平原を横切つていつた。それはまだ新らしくて、只僅かに雪が積つてゐた婦女おんなが今しかたその道を通つたところだつた。

此女は小兒が煙を認めた方に歩いてゐた。小兒は足痕を見詰めて、それを自身でも尾て行つた。

二 雪の効果

笑ふ人 彼は霎時の間は此路を辿つた。不幸にして足痕はだん／＼と不明になつていつた。雪の降るのは稠密に烈しくなつた。それは海上で双楫船がかく惱されたその時だつた。

笑ふ人 小兒は船と同様惱まされたが、また一風異つてゐた。彼はその前に起る陰影の脱け出し難き交錯の裡に只雪の上の足痕のみがたよりであつた。彼はそれを迷路の道しるべとする緒とした。

突然、雪がそれを積みかぐしたか、それとも他の理由からでか、足痕が消えた。一切が平々、坦々滑かで、一つの汚點も、少しの手懸もなくなつた。地上に敷いた白布と天上にかけた黒布の外には何物もなかつた。徒歩の旅人は恰も飛んでいつたかのやうだつた。小兒は失望して、身をかゞめて、捜した。併し無駄だつた。

彼が眞直になると、何かほんやりと音を聞いたやうだつたが、それは確ではなかつた。それは聲、呼吸、影に似てゐた。それは獸類よりも人間、生きたものよりも墳墓的であつた。それは音ではあつたが、夢の音であつた。

彼は見た、けれども何物も見當らなかつた。

寂寞、廣大、鉛色が彼の眼前にあつた。彼は耳を傾けた。彼が聞いたと思つたものは、消え去つた彼はなほ耳を傾けた。總てしんとしてゐた。

霧には或る幻覺がある。

彼は、最早案内の足痕なしに、行きなりばつたりその路を進んだ。彼が僅に二三歩進んだとき、又その音が聞えた。此度は彼は疑ふことが出来なかつた。それは呻吟、殆ど泣きだつた。

彼は身をかへした、彼は音を索した。音はも一度起つた。若し地獄の邊境(邪教徒、未信の子)に聲があつたなら、それはこんな聲で叫ぶだらう。

此聲の如く、鋭く、微かに、きい／＼したものが無い。それは聲であるから。それは魂から起つた咳(せき)には顔を帯びてゐた。併しそれは殆ど無自覺に發せられた。それは苦み、訴えるとは知らずに、苦

みを訴ふる聲だつた。

啼聲は恐らく最初の一呼吸、最後の一嘆息だつたらう、生命を終る咽喉鳴り、生命の始まる歎きと同じく、遠くに聞えた。それは呼吸した、すると又止つた。又それは泣いた。不可見の胸から出づる憂暗な哀求。小兒はその注意を八方に配つた——遠く近く、上に、下に。誰も居なかつた、何物も。

彼は耳を傾けた。聲は再び起つた。彼はそれを判然と聞きとつた。聲はどうやら羊の啼聲に似通つた。その時彼は驚いて、逃げ出さうと思つた。

呻吟はも一度、是で四度目だつた。それは妙に哀れつほく、悲しかつた。人は、その最後の意志的なるよりも一層機械的な努力の後、此叫びが多分終るものと思つた。廣野にとまつてゐるらしい救ひに本能的に訴える、最後の叫びであつた。それは可能な攝理に向けられた苦惱の訥辯であつた。

小兒は音のしてくる方に寄つて行つた。

けれども彼は何物をも見なかつた。

彼は再び警戒して進んだ。

訴えはなほ續いた。詞を爲さず、こんがらがつてはゐるが、それは明瞭になつて、今や殆ど鳴り渡つた、小兒は聲の近くに居た。けれどもそれは何處にあるのだ？

彼は訴えに近く居た。震へる叫びは彼の傍を廣い空間に通つていつた。人間の呻吟が暗に漂ひ去つた。彼が逢つたのは是だつた。彼が迷ひ込んだ深い霧が朦としてゐたけれど、少くも彼の印象は之であつた。

彼は、逃げよと、そのかす本能と、止まれと命する他の本能との間に躊躇してゐるうちに彼は雪の中に、彼の脚下數歩の處に、人間の身體の波動してゐるのを認めた、長く、低く、狭い、恰も土鏝頭のやうな隆起を見た。眞白な墓地の墳墓。

同時に聲が叫び出した。それが出るのは、その波動の下からであつた。小兒は身を曲げ波動の前にしやがみ、両手でそれを拂ひのけようとした。

彼が除けた雪の下には、彼の手に一つの形があつた。突然彼が造つた穴の中に、蒼白い顔が出た。聲はその顔から出たのではなかつた。その眼は閉され、口はあいてゐるが、雪が一ぱいに填つてゐた。

それは動かかなかつた。それは、小兒の手で身動きもしなかつた。霜に指の凍えた小兒は、それに觸れたとき、身震した。それは婦女の顔だつた。亂れた髪は雪にまじつてゐた。婦女は死んでゐた。

又小兒は雪を掻き除けた。死んだ婦女の頸が現はれた、それから襟襖にくるまれた肩が。突然彼はモット弱いものに觸つた。それは何か小さな埋れたものであつた。それは動いた。小兒は急いで雪を除けると、あはれな小さな身體、——瘠せて、冷たく、なほ生きてゐる——死んだ女の露はな胸に、裸で仆れてゐた。

それは女の兒であつた。

それは包まれてゐたのだつたが、襟襖が僅であつたから、もがくうちに獨りでにそれから脱け出たのだつた。その下には弱つた手足、その上にはその呼吸で、雪が少し溶けてゐた。子守女に見せたな

らは五六ヶ月と言ふだらうが、實は一才ぐらゐらだつたらう。何せなれば貧困のうちの生長は、痛ましい割引をする、それは時としては尙儂病をさえ生ぜしめる。その顔が現はれたとき、それが泣き聲を出した惱ましい泣泣の續き。母がその泣泣を聞かないのは、全く死んでゐた證據だつた。

小兒は嬰兒を腕に抱き取つた。堅くなつた母の屍骸は見るも恐ろかつた。その顔から凄い光りが出た。開いて齒のない口は「不可見」が死者に對する疑問に、陰の不明瞭な詞を以て答へてゐるやうだつた。氷原の物凄反映が其顔色に宿つた。褐色の髪の下には若い額、摘んだ鼻孔、閉した眼、霜にとざした瞼眈から口の隅まで、一齋の深い涙の濛があつた。雪が屍體を照した。冬と墓とは敵ではない。死體は人間の氷柱である。彼女の素裸の胸はいたましかつた。彼等の目的を成就した。彼等の上には生命の去つた他の者により、一個の生物にまでみたまされた、生命の崇高な光りがあつた。又其處には處女の純潔の代りに、母の威嚴があつた。乳首の一端には白い眞珠があつた。それは凍つた乳汁の一滴であつた。

棄てられた小兒が通つてゐた平原の上に、數時間以前に、一人の乞丐女が、嬰兒を抱いて、隠れがを捜しながら、道を迷つた。寒さに凍えて彼女は嵐に吹き仆され、又起き上がることが出来なかつた。降る雪は彼女をおふた。出来る間は彼女はその胸に娘を抱きしめた。斯くして死んだ。

嬰兒は大理石の乳房を吸つた。自然により鼓吹された盲目的な信賴だ。最後の嘆息の後にも女には其子に乳を呑ませることが出来るやうだ。

併し嬰兒の唇は乳房を見出すことが不可能であつた。其處には死によつて盗まれた乳の一滴が凍つ

てゐた。一方嬰兒は墓よりも搖籠に馴れてゐるので泣き出したのだつた。

棄てられた小兒は、死に行く小兒の泣聲を聞いたのだつた。

彼はそれを掘り出した。

彼はそれを腕に抱き取つた。

嬰兒は腕に抱きとられると泣き歇んだ。二人の子の顔は互に觸れ合つた。紫色な嬰兒の唇は、前に母の乳房を捜したやうに、小兒の頬を求めた。嬰兒は凝つた血が殆ど心臓を停めやうとする刹那まで行つてゐた。死體は死を傳へる。その麻痺は傳染する彼女の足、手、腕、膝は寒氣で萎へてゐたやうだつた。小兒は恐ろしい冷たさを感じた。彼は乾いた、暖い、水夫ジャケットを上から着てゐた。彼は嬰兒を死體の胸に置き、ジャケットを脱ぎ嬰兒をそれに包み、再び腕に取り上げ、今や殆ど裸で、北風の吹き荒む、雪の渦巻の裡に、嬰兒を抱えて、彼はその旅路に上つた。

小さな者は、小兒の頬を捜し當て、再びその唇をそれにつけた、そして暖さに宥められて、眠に落ちた。此二つの魂の暗の中に於ての最初の接吻。

母は、雪を背に、夜に向つて、其處に仆れてゐた。併し恐らくは小兒が自身を刳いで嬰兒に着せたとき、母は無限のその底から彼を見てゐたやう。

二 嘆きの道は重荷となる

其は子供を海岸に置いて、双楫船がボートランドの入江を出帆して以後、四時間と少し経つてゐた。

彼が棄てられ、旅してゐた長い間彼は只三個の人間に會つた。一人は丘の上の男、雪の中の彼女の腕に抱へた嬰兒とである。

彼は飢と疲とに力が盡きたが、弱つた力で重荷をさけて、以然よりも一層決然として進んだ。彼は今殆ど裸であつた。彼に残つた二三の襪は凍つて堅くなり、硝子の片のやうに鋭く、彼の肌を切つた。彼は寒くなつたが嬰兒は暖かになつた。彼が失つたものは抛棄されずに、彼女によりて得られた。彼はあはれな嬰兒は居心地よく睡つてゐるのを見た。是は彼女にとつて生命の復活であつた。彼は前進を續けた。

時々、しつかと嬰兒を抱えて、彼は身をかゞめ、一握りの雪をとつては、凍傷をふせぐ爲めに、彼の兩足をこすつた。又他の時は、彼の咽喉は燃えるやうに感じて、少しばかり雪を口に入れて、それを吸ふた。是は一時彼の渴きを止めたが、渴きを熱にかへた。

嵐はその烈しさに形なくなつた。雪の洪水は可能である。是が則ちそれだ。海の底をそれが裂きとつたと同時に、發作は海岸を苔打つた。恐らく此時であつたらう双楫船が濤と闘つて、砕けつゝあつたのは。

彼は北風の下、なほ東に向ひ、雪の曠野を旅してゐた。彼はどうして時が経つたかを知らなかつた長いこと彼は煙を見なくなつてゐた。そんな表徴は直に消えるものである。その外に、それは火が消される時間を経過してゐた。或は恐らく彼は誤認してゐたやう、そして彼が旅する方には市も村もないのだつたらう。疑ながらも彼は辛棒した。

二三度嬰兒は泣いた。すると彼は揺りながら歩いた。嬰兒はすかされて、黙つた。彼女は眠入つてしまふのだつた。身顛しながら、彼は嬰兒の温味を感じた。彼は屢々ジャケットを嬰兒の頭のまわりに締めて、霜が何處からも入らぬやうにした、又融けた雪が衣服と嬰兒とのあはひに滴れないやうにした。

平原は不同であつた。凹みにまでそれが傾斜して、地の穴に風の吹き込んだ雪は、こんな小さな兒童に比べては、彼を殆ど埋める事程左様に深かつた。そして彼は半ば埋まりながら、それを通してもかくべく持つた。彼は膝で雪を、押分けながら前進した。

谷を過ぎて、彼は、風に吹き拂はれて、雪の薄い高地に達した。其處に彼は一枚氷の表面を見出した。嬰兒の生温い息は、彼の顔にかゝつて、一寸と其處にとまり、そして彼の髪を凍らして、氷柱とした。

彼はも一つの危険が接近するのを感じた。彼はそれに陥らざるを得なかつた。彼は知つてゐた、若しそうするなら、彼は決して再び立てないことを。彼は疲労に堪えなかつた。暗の重みは、死んだ婦女の場合と同じく、彼を土に引き止め、氷は彼を生ながら、地面に粘り付けた。

彼は懸崖の斜面を歩いてゐた。そして我に歸つた。彼は穴の中によろけ込んだ。そして再びそれを出た。それから至極僅な躓でも死となつたらう。過つた歩みは彼に墓を開いた。彼は這つてはならぬ。彼は立ち上る力さえももたなかつた。今總ての物が滑つこかつた。到處に霜と雪が凍つてゐた。彼が抱えた小さな生物は、彼の進行を恐ろしく妨げた。彼女は骨に彼の疲労と根疲れを過度にしたば

かりでなく、又一個の手足纏であつた。彼女は彼の両手を占めた。氷の上を歩く彼には、両手は自然の又必要な平衡であつた。

彼は此平衡なしに事を爲さねばならなかつた。

彼はそれ無しにやつて、前進した。そうなるとは知らずに、其重荷の下に身を曲けて。此小さな嬰兒は、災難の盃を溢れしめる其罪であつた。

彼は一步毎に跳板の上で、見物人なしに、輕業をやるやうに、よろめきながら進んだ。彼は恐らく此路を陰の遠いところにある眠らぬ眼の——母の眼、神の眼——骨折で辿つたのだらうといふことを我々に繰り返さしていたゞきませう。彼はよろめいて這つた、踏みとどまつた、嬰兒に注意した、そうして彼女にジャケットを巻き付けて、その頭を覆ふた。再びよろめいて、進んで、這つて、そして身を伸ばした。卑怯な風は彼の正面から吹き付けた。明かに彼は必要以上に道を進んだ。彼はどうしても、後にビンクリーヴ農場のあつた平原、現にスプリング・ガードンとバアソネーチ・ハウスと稱へるゝ間に居た。家や小舎が荒地に建つてゐる。百年足らずの時が曠原と市とを隔てる。

突然、彼を盲目にしてゐた氷の風がないので、彼は前面短距離に、雪に浮き上つてみえる破風窓や煙筒の一簇を氣付いた。影畫の反對だ。黒い地平線に白で描かれた市街。今日我々が陰畫と稱ふやうなものだ。屋根、住宅、宿り！彼はとう／＼何處かへ到着した。彼は希望の消し難き勵みを感じた。航路を外れた船の番人が、彼が、『あれ陸が』と叫ぶときに斯の如き感動を催す。

彼は歩みを早めた

とう／＼彼は人間に近寄つた。彼は程なく生きてゐる者のうちに居るのだ。もう恐いものは無い。彼の内には突然暖味と信頼とが湧いてきた。彼が脱け出しつゝあつた事は過ぎ去つた。それから後にはもう夜も、冬も、嵐もない。あらゆる悪運は後に残したやうに思はれた。嬰兒も最早荷厄介ではなかつた。彼は殆ど駈けた。

彼の眼は屋根にピタリとくつ付いた。其處には生命があつた。彼は決してそれから眼を放さなかつた。死んだ者は、その墓の半ば開いた蓋を通して見ゆるならんことを斯く眺めるであらう。其處には彼が前に認めた煙の出る煙筒があつた。

今は煙がそれから出てゐなかつた。彼がその家に着いたのは長いことではなかつた。彼は市の外郭に來た。通路は開放されてあつた。その時分には、通路を閉すことは不要になつてゐた。

市街は二つの家から始まつた。此二軒の家には、蠟燭も洋燈も見えなかつた。全通路にも眼の及ぶ限り燈火が見えなかつた右側の家は家といふよりも寧ろ屋根であつた。何物も之よりは賤しくあり得ない。壁は泥、展根は藁そして壁よりも葺いた方が多かつた。壁の裾に生え出た大きな一本の葦麻いんげんは屋根に届いた。茅屋は只一つ、犬小舎のやうな戸口をもつてゐた。それから一個の窓は、穴に過ぎなかつた。どこもかしこも締めてあつた。傍に、飼ひ豚の小舎があるので、此家にも人が住つてゐることを示した。

左側の家は大きく、高く、全體石造りで、屋根には石盤が葺いてあつた。それも戸が締つてあつた。それは彼の貧乏人の小屋に向ひ合つた富者の家だつた。

小兒は躊躇しなかつた。彼は大きな邸に近付いた。分厚な櫛造りの二重折の戸は、大きな釘が打たれて、其背後には門や錠前で固められてゐるを想はせる種類のものであつた。錠の打槌うちがそれについてゐた。彼はどうやら打槌を取り上げたが、その手は痺れて、手といふよりも木の株となつてゐた。彼は一度打つた

答がなかつた

彼は再び打つた、そして二つ打つた。

内部には人のけはひもなかつた。

彼は三度打つた。

何の音もなかつた。彼は家の者皆が寝て、起き度くないことを知つた。

そこで彼は小舎に向つた。彼は雪の中から小石を拾ひ上げて、その低い戸を叩いた。答がなかつた。

彼は爪立ちして、硝子に石を打ち付けた。硝子を破るには餘りに柔かに、併し聞える程音高く。

聲も聞えず、足音もせず、蠟燭もつかなかつた。

彼はそこでも人が起き度くないのだと知つた。

石の家も、草葺の小舎も同様にあはれな者に對して耳を貸さなかつた。

小兒はなほ遠く行つて、彼の前に伸びた家々の間に入るべく極めた。それは市の入口といふよりは、二つの懸崖がけの間にある灣のやうに見えた。

四 沙漠の、も一個の形

彼は到着したのはウエイマウスであつた。

當時のウエイマウスは、今日の堂々たる、立派なウエイマウスではなかつた。

古代のウエイマウスは、現在のものゝ如く一つの旅宿と、デヨーヂ三世の記念像とを以て矩形の埠頭をなしてはゐなかつた。是はデヨーヂ三世がまだ生れてゐなかつたからである。同一の理由から人は未だ、東に向つた緑の丘の上に、芝を切り開いて平らにし、白堊を露き出しにして、その背に王様をいひ、デヨーヂ三世の名譽に於て、彼の尻をいつも市に見せてゐる、長百八呎の彼の白い馬を未だ計畫してゐなかつたのであつた。併し此名譽は至當であつた。デヨーヂ三世は、彼が幼年の折に嘗て持たなかつた智能を老年に失つたから、彼の治下の慘禍に就いて責任はなかつた。彼は無邪氣だつた。なぜ彼に像を建てゝやれないのか？

ウエイマウスは、百八十年以前、亂雑なやうで均整してゐた。昔話にアシユタロテの神が世界中をあらゆるもの、その家内に居る善い婦女すら、囊に入れて、背に負ひ、旅行したことがあると話されてゐる。その魔の囊からゴチャムに投げ出された切片が、その不規則なウエイマウスを想像せしめる——小舎の中の善い女をも引括めて……。音楽堂が此種の建築の標本として残つてゐる。祖母の家の周圍に、祖父さんの教會が集まつてゐる——ウエイマウスは斯麼だつた。英國の岸に打上けられた古代ノルマン人村の一種。

棄てられた小兒は、嬰兒を抱へながら、第一の通りを、次に第二の通りを、次に第三の通りを通つた。彼は眼を上げて燈火の見える窓を高い二階や、屋根に求めた。時折彼は戸を叩いた。誰も答へなかつた。シーツの間に暖められる程心を石の如くするものがない。音響と、震動とは遂に嬰兒の眼を醒さした。彼は、嬰兒が彼の頬をしやぶるので、それを知つた。彼女は彼を母と思つて、泣かなかつた。

彼は曲らうかそれとも長く迷ふかといふところに来た。彼は、家よりも茨の多い、住宅よりも畑の多いスカムブリツチ通りの交叉點に居たのだらう。併し幸にも彼はトリニチイ學校の近くに、今までも残つてゐる通りを捜り當てた。此通りは、欄干のついた、粗末な埠頭のある水際に彼をつれて行つた。彼は右手に一つの橋を見出した。それはウエイマウスとメルカム・レヂスとを連絡する、ウエイ橋であつた。その下をバックウォーター河が海に注いだ。

小村のウエイマウスは、當時市であり、港たるメルカム・レヂスの郊外であつた。今メルカム・レヂスはウエイマウスの教區である。村は市に合併された。その仕事をやつたのは橋だつた。橋は吸入の妙な車輜である、それは住民を吸ひ込み、又時として一つの河岸を對岸の者を犠牲にして膨脹せしめる。

小兒は、當時は木造りであつた其橋に行つた。彼はそれを渡つた。上覆の御陰で其上には雪がなかつた。彼の跣足は、それを渡る間一時の和ぎを得た。橋を越えて彼はメルカム・レヂスに入つた。其處には石造より、ヨリ少なく木造の家があつた。彼は最早村に居らず、市に居た。

橋はセント・トマス街と稱ぶ稍や立派な通りに開いてゐた。彼はそれに入った。其處此處に高い、彫刻のした破風窓や、店のさまがあつた。彼は又戸を叩き始めた。彼は聲を出して叫ぶだけの氣力がなかつた。

メルカム・レヂスでは、ウエイマウスの如く誰も起きなかつた。戸は用心深く二重に門がさゝれてあつた。窓は、眼が喰にとざゝれるごとく、その外扉で覆はれてゐた。不愉快な驚きに起されぬやうに、あらゆる注意が施されてあつた。小さな漂流者は睡れる市により起された名状し難き失望に苦んだ。なやされた蟻の巢の如きその沈黙は、頭をクラ／＼させた。その失神は皆その夢魘と混じ、そのまどろみは一個の群である。そしてその俯しに臥てゐる人間の身體から、夢の氣が立騰る。眠りは此世の彼方に暗鬱な仲間をもつ。睡れる者の解體した心は、死であると同時に生であるところの霧となつて彼等の上に漂ふ、そして「可能」と結び付く。「可能」は又亦恐らく、空間にそれが浮ぶときに心の力であらう。それ故に混雜が起る。夢——此雲——は彼の星——心——の上にその襲と透明とを挿し置く。此閉した險、其處で幻が實景に代る處では、輪廓及び外形の陰氣が分解が自らを了解難にまで押張つて行く。神祕な、飽和の存在が眠である死の彼岸の生命に混和する。此蟻虫と、魂とは空中で混同する。眠らぬ者ですら、不幸な生に、満ちた彼の上に、媒介物が壓迫してくるを感じる。是が何とは知らぬ恐怖と稱ばれるものである。大人が感ずることは、小兒はなほ一層感ずる。幽霊のやうな家が増大せられた不安は、彼が携けてゐる御荷物を一層重からしめた。

彼はコニーカー・レーンに入った、そしてその路の端にバックウオーターを認めて、海だと思つた。彼は最早海が何の方向にあるかを知らなかつた。彼は引き戻して、左にヌー・デン・ストリートに曲り、セント・アルバンス・ロウまで戻つた。

其處でフト、手當り次第に、彼は通りすがりの家を烈しく叩いた。彼が最後の力を絞つた打撃は發作的で、狙ひもなく、今歇むかと思へば、又は疝癢が起つたやうに始まつた。戸を叩いてゐるのは彼の熱の烈しさであつた。

一つの聲が答へた。

それは「時」であつた。

三時が後の、聖ニコラスの古い鐘樓から徐々と鳴つた。

それから又あたりは寂となつた。

誰一人戸を開けなかつたことは意外のやうだ。併しその沈黙には大きに説明を要する。我等は、一六九〇年一月に、倫敦では疫病のやゝ烈しい流行を見、何處でも病ひの漂泊者を入れんことを恐れて、他人を泊める事が少くなつてゐた。毒を吸入する恐れから、人々は其窓を開く事すら欲しなかつた。

小兒は夜の冷たさよりも、人間の冷たさを一層ひどく感じた。人間の冷たさは、わざとである。彼は平原では感じなかつた、彼の打沈む心の緊縮を感じた。今彼は生命の中に入り、しかも單獨であつた。之が辛苦の頂點であつた。彼は無慈悲な忘却を知つた。今や無情な都市は餘りに堪へ難きものであつた。

彼が今敷へた時間は、も一つの打撃であつた。或る状態に於ける「時」の聲よりぞつとさせられるものはない。それは冷淡の公言であるそれは永却が語つてゐるのである——

「俺にはそれが何だ？」

彼は佇つた。彼は自分に、そのつらい時、俺は此處に仆れて、死んだがまだと、言ひはしなかつたかは確でない。併し嬰兒はその頭を彼の肩につけて、又眠に落ちた。

此盲目的な信頼は再び彼を奮起せしめた。一切の助けを離れた者は、我自分が助けの基礎たることを感ずる。不可抗が義務を招ぐ。

斯る思想や、斯る状態は彼の齡にはなかつた。恐らく彼はそれを了解しなかつたらう。それは本能のことであつた。彼はフト爲すべかりしことを爲したのだつた。

彼は再びヂョンストシ・ローの方へ向つた。併し彼は最早歩まなかつた。彼は自身を曳摺つた。彼はセント・メーリ^{スワズリ}街を左に、小路を之字形に通つた。曲り、ねつた通路の端に、彼は稍廣い、開けたところに出た。それは手入れをしない荒地の一片であつた。恐らくは今チエスターフィールド・フリースのあるところであらう。家は其處きりで無くなつた。彼は右に海、左にかすにか市街を見た。

彼はどうなるのか？彼は再び田舎に出た。東には雪の大きな平野は、廣いヂボールの坂を描き出した。彼はその旅を続けねばならんのか？彼は進んで、再び孤独に入らねばならんのか？彼は引返して、再び市に入らねばならんのか？此兩個の沈黙した啞の平野と聲の市街との間に何を爲すべきか？何れの拒絶を彼は選ぶべきか？

憐愍の錨あり。憐愍の眼もある。此小さな、絶望な漂泊者が、身のまはりになけたのはその眼であつた。

不意に彼は脅嚇を聞いた。

五 厭世家がその分をする

變な、けたまましい切齒^{はきし}の音が暗のうちから彼に聞えた。

それは人を追ひ戻すに充分であつた。彼は進んだ。沈黙が恐くなつた者には、咆哮は心地よい。

烈しい唸りは彼を安心せしめた。その脅嚇は約束であつた。然らば、そこには生きた者が起きてゐる、よしやそれが野獸であつても。彼は唸りの來た方に進んだ。

彼は扉の角を曲つた、そして背後に、雪と海との反映が作る大きな、憂鬱な光りのうちに、何やら小舎めいたものがあるのを認めた。それは小舎でなければ、車であつた。それは車輪があつた。それは馬車だつた。それは屋根をもつてゐた。それは住宅であつた。屋根から煙筒が出て、煙筒から煙が騰つた。此煙は赤かつた、そして内部には善い火があるやうだつた。後部に、蝶番のあるのは戸のあるしるしで、此戸の中央にある四角な口から箱の中の光りが見えた。彼は近寄つた。

彼の近寄るのを知つて、唸つたものは烈しくなつた。彼が會ふべきものは、最早唸りではなく、咆哮であつた。彼は鋭い音を聞いた、丁度鎖がその長さ一ぱいに烈しく引き伸されるやうな。そして不意に戸の下、後ろの車輪の間に二列の鋭く、白い齒が露はれた。

車輪の間の口と同時に、一個の頭が窓から突き出た。
『静にしろ』と、頭が言った。
口は黙つた。

頭が又言った——

『誰か其處に居るな？』

小兒は答へた——

『はい』

『誰か？』

『私』
あたし

『おお？誰だお前は？何處からお前は来たか？』

『私は疲れてゐる』と、小兒が言った。

『何時だ？』

『私は寒い』

『そこで何をしてゐるのだ？』

『私は飢しい』

頭が答へた——

『皆が王侯のやうに幸福では居られない。去つちまへ』

頭が引込んで、窓が締つた。

小兒は頭を垂れ、腕の嬰兒をしつかりと抱きしめ、そして力をふるつて再び旅行を始めた。彼は二三歩踏み出して、急ぎ去らうとした。

併し窓が締まると同時に聲が開いた。梯が下ろされ小兒に談してゐた聲が車の内から、腹立たしげに聞えた。——

『おい、何だつてお前入つて来ないんだ？』

小兒はふりかへつた

『入つて来い』と、聲が又言った。誰がこんな奴を俺の處へ送つてよこしたか？此飢えて、凍えて内へ入つて来ない奴を？』

小兒は同時に排斥され、招がれ、チツと立つてゐた。

聲が續いた——

『這入つて来いと言つてゐるのに、餓鬼奴！』

彼は決心して、一步を梯の下の段にかけた。車の下には大きな唸りがした。彼は引き歸した。クワツと開いた口が現はれた。

『シツ！』と、人の聲がした。

口が引込んで、唸りが歇んだ。

『上つて来い』と、男が續けた。

小兒はやうやく三つの段を上つた。彼は嬰兒に邪魔せられた。痺れて、ジャケットに捲かれ、包まれた嬰兒は、只小さな形のない塊りとより見られなかつた。彼は三段を上つて、框に来て、佇つた。

箱の中には蠟燭はついてゐなかつた。恐らく貧からの節儉だらう。小舎は只泥炭の燃えるストーヴの上口から漏れる赤い輝きだけで照らされてゐた。ストーヴの上には、きつと食物らしいものゝ入つた粥鍋と、柄付の鍋とがくつてゐた。うまさうな臭ひがしてゐた。小舎には箱、椅子、天井から燈のともつてない角燈などがあつた。その外に間壁には棚がついたり、鉤があつたりして、それにいろいろなものが吊してあつた。棚や釘にはいろいろ小兒には分らぬ化學の道具や料理の道具が乗せたり、かけたりしてあつた。箱車は長方形で、ストーヴは前にあつた。それは小さな部屋ですらなく、僅に大きな箱であつた。内部のストーヴよりも、外部の雪から餘計に光りが來た。箱車の内部は、ほんやりと、霧がかゝつてゐた。けれども天井に映つた火の反射で、人は讀むことが出來た――

ウルズス 哲學者

事實小兒はウルズスとオモの家に入るところだつた。一個は彼が今唸りを聞いたもの、他は話してゐるものだつた。

框に着いて、小兒はストーヴの傍に、一個の丈の高い。滑かな、年とつて、灰色の服を着た人を見た。その頭は立ち上ると屋根にとゞいた。その人は爪立しようつても出來なかつた。箱車は丁度彼の大きさだけあつた。

『這入つて來い』と、ウルズスなるその人が言つた。

小兒は這入つた。

『その束を下に置きなさい』

小兒は、目を醒まして、驚かせまいと、そつとその御荷物を箱の上に置いた。その男は續けた――

『えらく靜に卸したね！ 聖なる遺物（キリスト）の骨など）でも、それより叮嚀には扱へない。お前はその襪に穴をあけることを恐がつてゐるのか？ 仕方のない宿無しだな！ 今頃街路を迂路付いて！ 誰だお前は返事をしなさい！ いゝや……返事をしないと、言ふんだ。此方へ來い、急いで？ お前寒い？ ちやあたんな！』其男は小兒の肩をストーヴの前へ押しやつた。

『えらく濡れてゐるな！ すつかり凍つてゐるな！ えらい姿で家内に入つて來たものだ！ 來い、襪を脱げ、畜生奴！』一方の手で、大急ぎで彼は小兒の襪を引き剥がすとそれはズタ／＼に裂けた。同時に一方の手で釘から自分の襯衣と、當時キッスミリーリックと稱はれた編みジャケットを取つた。

『そら衣服だ』

彼は羊毛の襪を一掴みとつて、火の前で疲れきつて、當惑してゐる。小兒の手足を擦つてやつた。小兒はその時は、暖かで、裸體で丁度天國を見てそれにさわつてゐるやうに感じた。手足を擦つてから、彼は次に小兒の足を拭つた。

『どれ手足！凍傷なんざありやしない！俺は貴様が凍傷がしてゐると思つた、馬鹿だ。後脚も。前脚も。貴様今度はそれを失くさなかつた。着なさい！』

小兒は褌衣を着た、すると其男は編ジャケツをその上から着せてやつた。

『それ——』

と、其男は腰掛を蹴つて、又肩を押して、小兒を坐らせた。それから彼はストーヴの上に煙つてる粥鍋を指した。小兒が粥鍋に見たことは彼には又もや天國であつた。即ち馬鈴薯と鹽肉の一片が入つてゐた。

『お前飢しいなら喰へ』

其男は棚の上から堅いパンの皮と、鐵の肉叉を取り却して、それを小兒に渡した。

小兒は躊躇した。

『俺に卓布を擴けさせる積りぢやないかお前は』と、其人は言つた。そして粥鍋を小兒の膝に乗せてやつた。

『噛めそれを』

飢が驚駭に打克つた。小兒は喫べ始めた。あはれな小兒は食ふよりも嚙み込んだ。パンの碎ける快い音が小舎に満ちた。その男は唸つた。

『そんなにガツ／＼喰ふな、食辛棒奴！此奴はどうした食ひ意地のつゝ張つた奴だ！こんな小兒が腹が減つて食ふときにや、全くいやになる。貴様は王侯の召上るのを見るがよい。俺の時分には公爵

の召上るのを見たものだ。あの人達は喰べはしない。そこが尊いのだ。だが、マア今度は飲みなさい。やい豚、詰め込め』

空虚な胃の腑と戦友である耳の御留守は、此言行矛盾を含む行爲の慈悲によつて、柔けられた烈しい形容詞に對しても、小兒をして殆ど注意を惹起させなかつた。霎時は彼は二つの要求と、二つの恍惚——食と暖——とに心を奪はれてゐた。

ウルズスは自身に何やら眩きながら、その詛ひを續けた——

『俺はヂエームス王が in propria persona (自ら) 名高いルーベンスの畫を鑑賞される食堂で食事を召されてゐるところを見た。陛下は何物にも觸れなかつた。此乞食はまくらつてゐる——まくらふとは獸が草をくふことから來てゐる。何だつて俺は此ウエイマウスに來たのだ。七度も地獄の神々に誓つて？俺は朝から何一つ賣りはしない。俺は雪を煽て、話をした。俺は颯風(さかぜ)に笛を吹いてきかした。俺は一文もポケットに入れない。すると今、此夜乞食がころがり込んだ。恐かない處だ。戦ひと、争ひと、競争とが市の馬鹿者共と俺との間にある。奴等鏹錢の外何にも俺に呉れようとしな。俺は生藥(せいやく)の外何にも奴等にやらうとはしない。よし、今日は俺は何にもしなかつた。一人の白痴も街路に居なかつた。一片も錢函の中に入らない。喰へ、地獄の子！裂いて、喰へ！俺等は脛(すね)の皮肉に比べるものがないときにでつくわした。俺の錢で喰へ、寄生蟲！此小兒は飢え以上だ。此奴氣が狂つてゐる。ありや食慾(しょくよく)やない、獐(さか)猛(もう)だ。彼奴は狂水病にやられてゐる。きつと彼奴疫病に罹つてゐる。貴様は疫病か、オイ盗人？あいつがそれをオモにやつたとしたらどうだ？いや、決して！人は死ぬがいよ、

だが俺の狼はいけない。併し、と、俺自分でも腹がへつた。是は根つから甚だ不愉快だと、俺は公言する。俺は夜遅くまで仕事した。人がひどく窮迫するとき、その生活には時季がある。今夜俺は腹が空いてゐた。俺は單獨だつた。俺は火を起した。俺は只一個の馬鈴薯と、只一個のパンの皮と、一口の鹽肉と、一滴の牛乳とをもつてゐた。俺はそれを暖めた。俺は自分に言つた「よし」と、私は喰はふとすると——ドン！此鰐が丁度その時飛び付いて來た。彼奴は俺の食物と、俺との間に見事に入り上つた。見ろ、あんなに荒らし上つた。喰へ、鱈、喰へ！鱈奴！貴様 頸に幾個齒をもつてゐるか？飲め、狼の子！いや、その詞は取消しだ。俺は狼を尊敬する。俺の物も嚙んぢまへ、大蛇！俺は終日、夜更けまで空腹抱へて働いた。俺の咽喉はいたむ、俺の臍臓は苦んでゐる、俺の腸は裂けてゐるのに、俺の報酬は他人の喰ふのを見てゐることだ。だがそれは皆同じことだ。俺等は分けよう。彼奴はパンと馬鈴薯と、鹽肉を喰べる、俺はミルクを飲まふ」

丁度その時あはれな、長引いた泣き聲が小舎の中に起つた、ウルズスは耳をたてた。

「貴様だな、臍詰者？何ぜ貴様泣くんのだ？」

小兒は彼の方に向つた。彼が泣いたのでないとは明かだつた。彼は口一ぱいに入れてゐた。泣聲は續いた。

ウルズスは箱に行つた。

「ウン吼えるのは貴様の包みだな。オヤ／＼物言ふ小包！何だつて貴様の包みは泣くんのだ？」
彼がジャケツトを解くと、口を開けて泣く嬰兒の頭が出た。

「おや、誰かお前は？」と、彼が言つた「此處にあんな奴がも一人を。何時こんな事がお終になるんだ？誰だ其處に居るのは？取れ銃、伍長！衛兵を呼べ！も一つどんときた！何を貴様は俺に持つて來たか、盜賊！是れは喉喉が渴いてゐる事を知らないか？此小な奴も飲物がある。それぢや俺はミルクすら飲めないのだ！」

彼は棚の上に亂雑に置いてある物のうちから、リネンの繻帶、海綿、硝子壺を取り卸すかたで、烈しい吐きを漏した。

「何て地獄式な處だ！」

彼は小さな嬰兒を眺めてゐた。

「是は女だな！あの聲で知れる。矢張りぐしよ濡れだ！」

彼は小兒にしたやうに、くるんであつた襁褓を取り去つて、荒いリネンではあつたが清潔で乾いた襁褓で嬰兒を包んだ。此手荒な着換で嬰兒はむつがり出した。

「無暗にビイ／＼泣き上る」と、彼は言つた。

彼は海綿を一片長く裂き取り、四角なりネンの布から絲を一筋引き出し、ミルクの入つた柄付鍋をストーヴから取り卸し、ミルクを硝子壺に入れ、その頸に海綿を押し込み、その上からリネンの片を被せ、絲で結び、熱くはないか確める爲め、その硝子壺を自分の頬につけ、それから未だ泣いてゐる彼の怪しい包を小脇にかゝえ、

「それ、晚餐だ！畜生乳を吞まさせてくれ」

と、彼は瓶の頸を嬰兒の口に當てがつた。

彼は硝子罎を、いゝ加減に傾けて、唸つた――

『奴等皆同じだ、卑怯者奴等！悉皆とつてしまふと、黙り上る』

赤兒は猛烈に飲み、且つ咽ぶ程、熱心に、天意により與へられた此胸を掴んだ。

『貴様息がつまるぢやないか』と、ウルズスが唸つた『此奴も亦ガツ／＼してゐる』

彼は嬰兒が吸つてゐた海綿を引き去つて、咳の鎮まるを待ち、それから又硝子罎を唇につけて言つた、――

『吸へ、やくざ馬！』

そのうちに小兒は肉叉を置いてゐた。嬰兒が飲むのを見ると、彼等は喰ふのを忘れてゐた。いまに先まで彼が喰べてゐる顔容は満足の表情だつた。今はそれは感謝であつた。彼は嬰兒の生命が蘇るのを見守つた。復活の完成は彼自身より始まつて、消し難き光輝が彼の眼に満ちた。ウルズスは依然アツ／＼と小言を言つてゐた。小兒は折々、感に堪えたが口には言はれぬその感銘に濕つた眼をウルズスにあけた。ウルズスは荒々しく彼に言つた。

『うん、まだ食ふか？』

『ぢや貴方は？』と、小兒は全身顫へながら、眼に涙を溜めてゐた『貴君は喫べるものがない！』

『貴様は御親切にも皆喫べて呉れたな、熊の子め！俺に充分でなかつたんだから、貴様にも餘り澤山ぢやない』

小兒は又肉を取り上げたが、喫べなかつた。

『喰へ』と、ウルズスが叫んだ『それが俺に何だ？誰が俺の事を言ふか？あはれな、小さな、文無し教區の跣足な牧者め、皆喰ちまへと言ふんだ。貴様は此處で喰つて、飲んで、寝るんだ。喰へ、でなけりや貴様等二人とも蹴り出すぞ！』

小兒は此脅嚇に又喰ひ始めた。彼は粥鍋に残つてゐるものを喫べ終るのに造作もなかつた。ウルズスは呟いた

『此建物はまづく組み合せてある。寒さが窓硝子からくる』

前の方の一枚の硝子は、箱車の動搖でか、又は或る悪戯子の投げた石でか破れてゐた。ウルズスはそれに星形の紙をくつ／＼けて置いたのが糊が割がれてゐた。嵐はそこから入つた。

彼は半ば箱に腰掛けてゐた。嬰兒は、その腕に抱かれ、その膝の上に、創造主の前のケラビムと、母の胸なる嬰兒の幸福な壯嚴をもつた瓶をチュウ／＼と吸つてゐた。

『飲んでゐらあ』と、ウルズスが言つて、又つゞけた『此後ぢ、節制の説教をしなけりや！』

風は紙の張つたところを割がしそれを小舎のうちに飛ばした。併し是は改めて生命に入つてきた子供達には何でもなかつた。小娘が飲む間に、小童は食つた。ウルズスは唸つた！

『飲んだくれは襦袢の中にある赤兒のときに始まる。チルストーン監督が過度の飲酒を大聲叱呼するのは何たる御苦勞だ！何といふいやな風の息吹だ！それに俺のストローは古い、逆睫毛を生やす程煙が漏れる。人は寒さの不便と火の不便をもつ。人ははつきりと見る事が出来ない。あすこの奴等は俺

の親切を亂用する。うん、俺はまだ畜生の面を見分けられない。安樂が此處では欠けてゐる。チヨウも照覽あれ、俺はよく閉めきつた室で立派な御膳につくとの好きな人間だ。俺は自分の仕事を失つた俺は肉慾主義者に生れついてゐる。最大のストイックス「禁慾主義者」は食卓の快樂を長く貧らんとして、鶴の頸を欲しがつたフィロクセースだつた。今日何にも受けなければ、明日賣るべき何物もない住民、下僕、商人、此處に先生あり、此處に生藥がある。古い友達、君は暇潰しをしてゐるぞ。君の藥を包みなさい。此處ぢや誰も彼も健康だ。誰も彼も健康な市は面が憎い。只空だけが下痢してゐる何たる雪ぞ！アナキサゴラスは雪は黒いものと教へた。寒さは黒いから、彼は正しい。氷は夜だ。何といふ颶風だ！俺は海の上で此樂しみを想ふ！颶風は惡魔の通行だ。それは颶魔の、我等の骨箱の上を駈けて、眞逆様に筋斗打つ喧嘩だ。雪の中で、是は尾を、彼は角を、も一個は焰の舌を、も一つはその翼に鈎爪を、も一つは大法官の肚腹を、も一つは學士會員の禿頭を持てゐる。各の音にお前は形を認める。各々の新たな風に新たな惡魔が居る。耳は聴き、眼は見、顔はガチャ／＼鳴る。畜生！海には人間がゐるぞ、それや確だ！我が友よ、出来るだけよく嵐をつまきれ！俺は世をつまきただけで充分だ。さあ来い、俺は旅舎をやつてゐるか、ゐないか？何せ俺は此旅人達と商賣するのかが？一般に亘る難儀は、俺の貧乏にまでも飛沫をよこす、俺の部屋に、人間の遙に擴がつた怪しい滴が落ち込む俺は旅人の貧慾に渡されてしまつた。俺は餌食だ。飢て死ぬ者の餌食。冬、夜、厚紙の小舎、下に外に一人の不運な友。嵐、馬鈴薯、俺の拳骨程の火、寄食者、隙間／＼から漏る風、無一文、吼える襖褌包み。俺は開けてやる、要すると内部に乞丐を見付けた。之は立派か？又、法律は犯されてゐる。

噫浮浪の子をつれた浮浪人！惡戯な拘兒、惡心な畸形兒！そこで貴様は初夜の鐘が鳴つた後まで街をうろつくのか若し？我等の善い王様がそれを知つてみる、貴様に教へる爲めに堀の中に貴様を投げ込まいで置かうか？俺の紳士は夜俺の淑女とうろつく。十五度の寒氣に帽子もなげりや、靴足だ！斯麼こと御禁制だと知れよ。法律も規則もあるぞ、無茶な貧乏人奴浮浪者は罰を喰はされる。正直な人間の家は警固せられて、保護せられる。主様は人民の父親だ。俺は俺自分の家をもつてゐる。貴様等とつつかまつたら、街の中でひつばたかれたのだぞ、それが亦正當だ。きちんとした市には秩序が入用だ。俺の方ぢや、貴様等を警察に渡さないで「悪いことをしたことになる」だが俺は斯麼馬鹿者だ！俺は何が正しいかを知つて、悪いことをする！噫、ならず者、こんななりをして這入つてくるとは！俺は奴等が這入つてきたとき、奴等の上に雪を見なかつた。それは融けた。そして此處俺の家は沼になつた。俺は家の内に洪水をもつてゐる。此湖を乾かすのには思ひも寄らぬ程澤山の石炭を、山元で十二錢の石炭を、燃さなげりやならん。此箱車に三人を入れるにどうしやう？それはもう濟んだ。俺は子供部屋に入る。俺は自分の家に英國將來の乞丐階級の乳香子を持たうとしてゐる。俺は履はれ口と、事務所と、職掌をもつて、彼の巨大な賣淫の「零落」の損はれた福德をつくらやうに將來の紋架の鳥を完全に仕立て、又若い盗人共に哲學の形を與へるやうにしなければならぬ。熊の舌は、神の警戒である。そして若し俺が、過去三十年間此種の動物に喰はれなかつたなら、俺は富者になつてゐただらう。オモは肥え、俺はその藥箱の中にヘンリー第八世の待醫ラシクルのやうに、外科器械と珍品とをいつばいに持つてゐただらう、いろんな動物や埃及の木伊乃や、そんな骨蒸品などを持つてゐる

たゞらう俺は醫學校の一員で、有名なハイベイは一六五二年に建てた國會館を用ゐる權利をもつてゐたゞらう。倫敦全市が見渡せるその圓頂の洋燈の下に研究が出来たらう。俺は太陽の量りの研究を續けて、遊星から隠糊した蒸汽の立騰るのを證明し得たらう。セント・パルトロメ虐殺の前月に生れて皇帝の數學者だつたジョン・ケパレルの意見は斯うだつた。太陽は或る時には煙る煙筒だ。俺のストロウもその通り。さうだ、俺に運が向いてゐたら、俺の人物はちがつてゐたらう。俺は今のやうなつまらん者ぢやなかつたらう。俺は大道で科學を墮落させなかつたらう。群衆に信條はつまらぬものだ。群衆は、何時の世の賢者も猶豫なく輕侮して、その放肆と慾情とを最も謙遜な人が、その正義に於て嫌つた、年齢、性、氣質、狀態の雜然たる混和以上、何でもない。唯俺は娑婆がいやになつたどうしたつて、人は長くは生きない。此人間の生命は直ぐ終る。いやさうではない。それは長い、間我々等が餘りに氣を落さぬやうに生命を甘受する愚をもつべく、又自身を吊す繩や釘を取る立派な機會を得させない爲めに、自然は人間に聊かの注意をもつやうな風をみせる。今夜ではないけれど。惡黨は小麦を煎し、葡萄を熟らせ、歐鷲に歌を教へる。いつも朝の光りか、ジンの一瓶、それが我等の幸福と呼ぶものだ。それは惡の素敵な屍衣のまはりにある善の小さな縁だ。我等は惡魔が地を織り、神がその縁を斷つた運命をもつてゐる。そのうちに、貴様俺の晚餐を喰つてしまつたな、泥棒奴！」

腕にやさしく抱かれた嬰兒はそのうちにグツタリと眼を瞑つた、飽きた證據だ。ウルプスは硝子壺を眺めて、呟いた――

『皆呑んでしまつた、耻知らず奴！』

彼は立ち上り、左の手で嬰兒を抱きながら、右の手で、箱の蓋を明け、彼が眞の皮と云つた、例の一枚の熊皮を下から引き出した。彼が之を爲してゐる間に、彼はも一人の小兒が食べてゐる音を聞き横目で彼を見た。

『若し、今後あの太食ひを俺が養ふことになりや、何かしなけりやならない。俺の仕事の生命を喰ふ蟲になるのだ』

彼は片方の腕で、靜に熊皮を箱の上に披けた、丁度今寢入つたばかりの小兒をさますまいと用心しながら。

それから彼は彼女を毛皮の上、火の傍に臥かした。そうしてから、彼は燻をストーヴの上に置いて叫んだ――

『俺も渴くわい』

彼は壺の中を覗いた。その中には二口三口牛乳が残つてゐた。彼はそれを唇にもつていつた。丁度彼が飲まふとしたとき、彼の眼が小兒の上に注がれた。彼は壺を再びストーヴの上に乗せ、硝子燻を取つて、その栓を外して、残つたミルクを入れると、丁度一ぱいになつた。それに元通り海綿に、リネンの布とを覆ひ、瓶の口へ縛り付けた。

『矢張り腹も減つたし、咽喉も渴く』と、彼が言つた。

そして附け足した――

『人はパンを食へないときには、水を飲まねばならぬ』

ストーヴの背後には口の付いた瓶があつた。彼はそれを取つて、小兒に渡した。

『貴様飲むか？』

小兒は飲んだ、そして又食ひ續けた。

ウルズスは又も瓶を取つて、それを口へ持つていつた。中の水の温度は、ストーヴの傍で、不平均に變つてゐた。

彼は二三口飲んで、擧面した。

『水よ！清潔な眞似をした、貴様は偽りの友に似てゐる。貴様は上の方では暖かく、下の方では冷たい』

そのうち小兒は晚餐を終つてゐた。粥鍋は空以上だつた。それは綺麗になつてゐた。彼は自分の膝にこぼれた少しの屑を拾ひ上げて丹念に喫べてゐた。

ウルズスな彼の方に向つた。

『それだけぢやない。さあ貴様に言ふことがある。口は飯を食ふためばかりぢやない。物を言ふためだ。今貴様は暖まつて、詰め込んだ。やい黙め、氣を付ろ。貴様は俺の質問に答へるのだぞ。貴様は何處から來たか？』

小兒は答へた――

『私知らない』

『何に？知らない？』

『私今晚海岸に棄てられたんだもの』

『何だ俄鬼め！お前の名は何といふか？此奴、親戚の者が棄て、しまふ程な碌でなしだ』

『私に親戚はない』

『少しは俺の趣味に向くようにしろ、そして俺には調子つ外れに歌ふ奴は氣に入れないことを覚えてゐろよ。お前は妹があるからにや、親戚がある筈だ』

『それは私の妹ぢやない』

『妹ぢやない？』

『いえ』

『ぢやあれや誰だ？』

『私が見付けた嬰兒だ』

『見付けた？』

『え』

『何だつて！お前があれを拾ひ上げたのか？』

『え』

『何處で？、嘘を吐くと殺しちまふぞ』

『雪の中に死んでゐた女の懷から』

『何時？』

『一時間前』

『何處で?』

『此處から一里半ばかりの處で』

ウルズスは秀でた眉をひそめ、哲學者の感銘を特徴する彼の形をとつた。

『死んだ! 仕合せな女だ! 其女を雪の中に残して置かなけりやならん。女はそこで結構にやつていける。何の方だ?』

『海の方で』

『お前は橋を渡つたのか?』

『え』

ウルズスは後の戸を開けて、光景を眺めた。

天氣はよくなつてゐなかつた。雪は濃密に且つ悲しく降つてゐた。

彼は窓を閉さした。

彼は破れた硝子の處へ行つて、襖でその穴を塞いだ。彼はストーヴに泥炭をくべた。彼は出来るだけ廣く熊皮を箱の上に擴けて、隅から大きな本を取つて、枕代りに皮の下に入れ、そして嬰兒の頭をそれに置いた。

それから彼は小兒に向つた。

『そこに臥なさい』

小兒は従つた。そして嬰兒の傍に長々と横になつた。

ウルズスは熊皮を子供達の上から巻き付けて、その端を足の下に押し込んだ。

彼は棚の上から大きなポケットの正しく興奮劑の瓶や、醫療器械の入れたものゝ付いた麻布の帯を取つて、腰のまわりに巻き付けた。

それから彼は天井に吊した提燈を取つて、それを灯した。それは暗い提燈だつた。火が灯れてからも、小兒達はまだ陰に居た。

ウルズスは半ば戸を開いて言つた――

『俺は外に出るが、恐がることはないぞ。俺は戻つてくる。眠れ』

それから梯を卸して、彼はオモを呼んだ。彼は愛の吼聲で答へた。

ウルズスは手に提燈をもつて、下りていつた。梯は引込められ、戸は再びとざゝれた。小兒達のみが残つた。

外からは一つの聲、ウルズスの聲が言つた――

『小兒、俺の晚餐をたつた今喰つてしまつた奴、もう寝てしまつたか?』

『いゝえ』と、小兒が答へた。

『よし、若し嬰兒が泣くなら、残りのミルクをやんなさい』

解く鎖のガチャ／＼する音が聞えて、人間の聲音と、獸のそれとが、こんがらがつて遠くに消えていつた。二三分後には、二人の小兒はグツスリと眠つた。その眠りに消し難き或る物があつた。彼等

の寝息がもつれ合つた。此無性の結合、貞操以上に強い無邪氣が彼等のまわりを包んだ。

六 目醒め

日の始まりは惨としてゐる。悲しい蒼い光りが小舎に入つた。それは氷つた曙であつた。夜によつて幽霊の形にほかされた物の所在を浮刻にまで爲す彼の蒼白い光りは小兒達を起さなかつた。彼等の眠りはそれ程深かつた。箱車は暖かつた。彼等の呼吸は、二つの穩かな浪のやうに交互した。最早外に颯風もなかつた。曙の光りは徐々と地平線を占取した。星宿は一つ／＼吹き消される蠟燭のやうに消えていつた。唯二三の大きな星だけが抵抗した。「無限」の深遠な歌は海から來た。

ストーヴの火は全然消えてはゐなかつた。曙光は少し宛白日にまで破れた。小兒は女兒よりもヨリ少く熟睡した。遂に他のよりもヨリ明るい一條の光線が窓硝子を通して、彼は眼を開けた。幼年の睡眠は忘却に終る。彼は何處に彼が居るか、何が彼の身邊にあるかを知らず、記憶せん努力もなく、半昏睡の状態で横はつて、天井を見ながら、ポカンと只天井の文字、(哲學者ウルプス)を見てゐた。彼はそれを讀めないで、何のことが分らなかつた。

錠前の鍵を廻はす音が彼の頭をめぐらさした。

戸はその眩金の上にまわつて、足音が聞えてきた。ウルプスが歸つてきたのだ。彼は階段を上つて手にした提燈を消した。同時に四足のビタ／＼する音が階段に聞えた。それはウルプスに従いて歸つて來たオモであつた。

小兒は稍吃驚して、跳ね起きた。狼は恐らく空腹だつたらう、悲しげな欠伸をして、二列の白い、齒を示した。彼は階段を半ば上つたとき、立佇つたそして説教者が演卓の端に眩を置くやうに、前脚を箱車の中に入れて、凭れかゝつた。彼は遠くから箱を嗅いだ。それがいつものやうでないのを見て彼の狼形は戸を縁として朝の光りに對し、黒地に描き出された。彼は決心して入つた。小兒は狼が箱車に入つて來たのを見て、熊皮から出た。そして立ち上つて、なほ深く眠つてゐる赤兒の前に身を置いた。

ウルプスは丁度天井の鈎に提燈をかけた。黙つて、器械的丹念を以て、彼は首のついた帶を解いてそれを棚の上に納めた。彼は何物をも見ず、又何物をも見てゐるらしくなかつた。彼の眼は硝子のやうだつた。何やら深く彼の心に動いてゐた。彼の思想は遂に常の如く、迅速な詞の迸出に於て呼吸を見出した。彼は叫んだ——

『幸福ぢや、疑もなく！死んでゐる！石のやうに死んでゐる！』

彼は身をかがゞい、ストーヴに十能泥炭をくべた。彼は泥炭を掻きまぜるかたで、唸つた——

『俺は彼の女を見出すのに骨を折つた。「不可知」の悪意が彼の女を雪の下二尺に埋めてゐた。クリストファ・コロムバスが彼の心で見たやうに、鼻でもつて明かに見るオモが居なかつたら、俺はまだ其處に居て、雪崩を掻きながら、「死」と隠れんほをやつてゐたのだつたら。チオゲネーヌはその提燈をとつて、一人の者を捜した。彼は譏刺を發見したが、俺は喪を發見した。彼の女の冷たさつたら！俺はあれの手に觸つた。石！何たる沈黙だらうあれの眼！死んで、小兒を後に殘して置くやうな馬鹿

に誰がなれる！此箱に三個を詰めるのは便利ぢやない。俺は今少さな家族をもつ、男の子一人、女の子一人！』

ウルヴスが喋つてゐる間に、オモは暖爐の近くににじり寄つた。寝てゐる赤兒の手がストーヴと箱との間に垂れてゐた。狼はそれを甜め始めた。彼は赤兒が醒めないやうに、そつとそれを甜めてゐた。ウルヴスはふりかへつた。

『よくやつた、オモ。俺が父親で、お前は叔父さんになれ』

彼は哲學的注意を以て、火を整へながら、彼の傍白をやめなかつた——

『養子！それぢや決つた。オモも承知だ』

彼は身を伸した。

『俺は、彼の女の死に誰が責任があるかを知り度い。人間か、それとも……』

彼は眼をあけて、天井を見たそして彼の唇は呟いた——

『それは貴方で御座いますか？』

そこで彼の額が重荷の下に屈するやうに下つた、彼は續けた——

『夜が女を殺すやうに面倒を見た』

彼の眼をあけると、丁度醒めて、聽いてゐた小兒と眼を見合せた。ウルヴスはぶつきら棒に彼に口をきいた——

『何をお前は笑つてゐるのだ？』

少年は答へた——

『私笑ひやしません』

ウルヴスは悸として、二三分間彼を見据えて、言つた——

『ぢやお前は怖ろしい奴だ』

箱車の中は前は暗くて、ウルヴスは小兒の顔を見ることが出来なかつた。白日はそれを現はした。彼は両手の甲を小兒の兩肩に置いて、その顔を一層鋭く検めて、叫んだ——

『もう笑ふな！』

『笑つちやるません』と、小兒は言つた。

ウルヴスは頭から足の先まで顫へた。

『貴様は確に笑つてゐる』

そして彼は怒つたでなければ、あはれんだやうに小兒を引つ掴んで、烈しく訊いた——

『それを誰がお前にしたのか？』

小兒は答へた——

『お前のいふことは私には分らない』

『何時頃からお前はそんなに笑つてゐるのか？』

『私は今まで何時でも斯うだつたのです』

ウルヴスは箱の方に向いて低い聲で言つた——